

對馬南部方言集

田國男編
山政太郎著

818-Z37

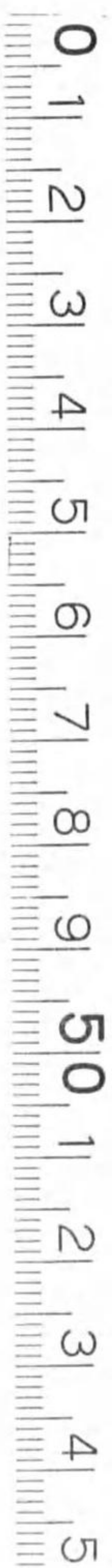


1200500753474

818

3

全 國 方 言 集 七



始



納本

818
23

柳田國男編・瀧山政太郎著

對馬南部方言集

中央公論社版



全 國 方 言 集 七

序

對馬の文化は中央に比べて、正に十年或は二十年の後れを取つてゐるとの批判を動もすれば聽く所であるが、これはその一を知つてその二を知らざる者の錯過的判斷に過ぎないものと自ら解釋して、必ずしも侮辱を受けたやうな感を惹かないものである。そもそも對馬は帝國西門の鎖鑰、國防上要害の地たることは今更喋々を要しないことである。明治三十八年五月二十七日、我が帝國海軍の精銳が波羅的艦隊を對馬海峡に撃破し、曠古の大捷を博せらるゝや、對馬海峡の名は夙に顯るゝに至つた。殊に日本の文明が東漸の史的證左著しいにつれて葦爾たる西陲の孤島でありながら居然として大八洲の一に班し、舊藩政時代には居城を府中と稱し出づれば金紋挾箱、國主大名の威嚴を示されたものである。今や對馬は領臺以來朝鮮の併合と共に一躍して日本の中央ともなつた。世界の視聽を集めたる朝鮮海峡隧道が對馬を中心として其實現を見るのは、敢て遠き未來のことにもあるまいと察せられる。

由來對馬の山海は風光の明媚なると史實の豊富であるとの二點、知る人ぞ識る程度でなく世上已に定評がある。近世の事は姑く之を略し往古の事蹟を擧ぐれば、『舊事本紀』に次に對馬の州を生む

とし、而して大八洲の一に列せられてある。『古事記』にも亦さうである。『延喜式神名帳』に對馬島大六座小二十三座とし、式内社の多きこと全國中第五位である。大嘗祭に於て悠基主基の齋田を卜定あらせらるゝところの「龜卜の法」は、伊豆壹岐對馬の三國がその發祥の地たること『延喜式』に明記せらるゝところである。「神功皇后の新羅を征し給ふや、舟師を率ゐて和珥津より發し給へり」とある和珥津は今の上縣郡鰐浦である。「天智天皇三年對馬に烽候防堡を置き」「六年對馬金田に城を築く」「天武天皇二年對馬國出すところの銀を獻す」。是れ我が國銀を産するの始めである。「文武天皇五年對馬金を貢す、乃ち元を建てて大寶と曰ふ」。『延喜式』に對馬眞珠を出すとのことが載せてある。「文永十一年元賊の來寇するや、宗助國之を對馬小茂田に破り、身數創を被り、將士と共に戦死せり」等、最も著しいものである。以上は悉く國史の載するところである。「白雉三年百濟の尼法明對馬に來り、吳音を以て『維摩經』を讀む。よりに吳音を對馬讀といふ」とある。その他遣唐使、遣新羅使、唐の使節及び空海、最澄兩師入唐寄泊の遺蹟、今尚ほ存してゐる。

嚴原はもと府中と稱せられた。諸侯の版籍を奉還し明治三年九月を以て藩制を施行せらるゝに當り、府中の稱を改めて嚴原といひ、後ち町村制により隣接三村を合併して嚴原町と稱せらるゝに至つたものである。

本集收むるところの語彙は舊府中たる嚴原を中心としたものである。對馬は延長二十六里に涉りその南端と北端とは音調に於て殊に著しい差異があるばかりでなく、言葉も各村多少の差異あるも嚴原地域に行はれる言葉は大體に於て各村に共通し、幸に應接上聊も不便を感ずることとはない。

明治十三年の頃までは土着の住民のみで、當時猶ほ舊藩政代文物の餘波を受け、言葉も亦井然たるものであつたが、その後交通の發達と共に東西南北の言葉相交錯し、その雜然たる言葉は累を幼年者にも及ぼし、その結果は全く語義を滅却したる言葉さへ生まれ出づるまでに至らしめた。

『津島紀事』の著者平山榘先生が文化十年にもせられた對馬言葉の字引に『日暮芥草』二十卷がある。廣く神書儒書佛書を引用し懇到なる所見を附し、言葉に對する參考として眞に有用の資料である。只惜むらくはこの書散佚して今は十卷を存するのみである。

私が對馬方言の蒐集に着手したのは明治の中頃であつた。當時舊來の言葉で老年者間にのみ存せられて、壯年者間には將に滅びようとするものの續出する危機に達した。是に於て努めて老年者の談話に耳を恃て、聽くに隨うて之を筆記すること累年、以て今日に及んだ。

元來これは只自己の物好きに集めたるに過ぎないので、固より完璧のものでなく尙ほ大いに推敲洗練の餘地があることは言を俟たないところである。それをも憚りなく之を識者の覽に供しようなどといふは到底想ひも及ばないことであつた。然るにこゝに圖らずも學界に紹介せらるゝの僥倖を得るに至り、慚汗脊を沾すを覺えた。

昭和十一年五月宮内省圖書寮の宮良當壯氏方言調査の爲め對馬へ出張せらるゝに當り、拙稿を供出し意外にも採擇せられた。

これより先き昭和六年四月二十四日嚴原修善庵にて贈正五位陶山存先生の祭典法要を修せらるゝに當り、柳田先覺が日野清三郎氏の案内を以て參拜せられ、是日日野氏の紹介により初めてその知

遇を得た。

私が方言研究家各位の末席を汚したのは、日野氏の紹介で拙稿の一部に解説及び用例を附し、昭和十五年八月を以て柳田先覺の机下に進めたるの時より始まる。

拾摭した言葉の多くを『ことばの泉』及びその補遺に對比し、同書に掲げられた言葉はこれを削り、その掲げられてないもののみを採録して先覺の机下に進めたものである。然るも尙ほ先覺はこれを一閱されて、對馬の言葉は京都江戸に於て用ゐられし言葉最も多しとのことを示された。

是に由りて之を觀れば對馬言葉は中央の言葉に比し單に語調を異にせるに止り、實に對馬方言として特擧すべきものの寥々たるを知らるゝのである。

因みに字音に就て一の希望を申し述べて見たい。對馬に於ては化花果の音はクワ、回會怪の音はクワイ、獲擲劃の音はクワク、活刮滑の音はクワツ、完官寬の音はクワン、瓦臥畫の音はグワ、外の音はグワイ、月の音はグワツ、可我涯渴勘の音はカ、ガ、ガイ、カツ、カンと申す如く、クワとカとの判別を字音の上にも又言葉の上にも劃然と分ち今尙ほ正式に音讀してゐるに對し、新式の字音假名遣によりクワをカと改められんとすることは正音を破壊せらるゝの感なき能はず、全國中正音を用ゐらるゝ所も亦少からざるべく思はるゝが、是等の地方と相携へて正音を維持したく希望するところである。

昭和十八年四月

對馬嚴原 瀧山政太郎識

本文順序

1	動詞	三
2	形容詞	三八
3	副詞	五一
4	代名詞	六〇
5	助辭	六二
6	辭令	六五
7	感動	六八
8	慣用句	六九
9	子供の言ひぐさ	八三
10	諺	八四
11	名詞	
	時・天候	九三

地形	九四
魚介	九六
草木鳥蟲	一〇〇
蟲のもの	一〇三
人のさま	一〇四
運搬	一〇六
經濟	一〇七
食習	一一〇
服裝	一一五
居住	一一九
人體・病氣	一二一
家・交際	一二六
職業・稱呼	一二九
批判による稱呼	一三〇
行爲・學動	一三四
言葉の戯れ	一三九

12

子供	一四二
行事・神事・怪異	一四五
葬送	一五一
状態・情況	一五二
音訛	一五五

對馬南部方言集

クル 行くに同じ。本土では行くと言ふ處を「来る」といふことがある。敬語來らるに當るものはケラル、コ

イラルである。例「何某のケラッタ」「今晚は何某さんのコイラル管ちやけ、待つとかう」

モツ 子を産む。「葛が鷹モツ」は劣者の子に優者が生れたの意。「雀が鷹を生む」と同義。

タク 物を煮ることをタクと言ひ慣らはす。「味噌汁をタク」「芋をタク」など。

バル 鉄で土を掘ること。掘り返すはバリカヤスである。

コケ 立つてゐる物を抜き取らうとして前後左右に揺曳する。

セク (1)己れの足らざるを思はずして人のよきことを羨み、呪ひごとのやうに言ふ。(2)痛む。例「胸がセク」

「腹がセク」(3)閉づ、しめる。又セグともいふ。例「戸をセク」「襖をセグ」(4)セギツケルと言へば突きつ

けるの意、セギタアスは突き倒すである。

ツク 鉋を掛けることをカナヲツクと言ふ。

エル 彫り込む。例「材木に穴をエル」

エグル (1)彫り込む。例「木をエグル」「穴をエグル」(2)酸い、えぐい。芋など食ふ時喉のいらつくこと。エ

グイといふ形容詞は無い。

カツグ 潜る、泳いで水中にくゞり入る。

メエス 與へる。例「その品はおしい(汝に)メエスけ、取つて行かしや」
スエル 神佛に物を供へること。

イロフ 觸れる、扱ふ。例「イロフちゃでけんばい、イロハスなや」

マメス コロガスに同じ。粉などをまぶすこと。

ナホス (1)直くする、元の如くする、修復する、病を癒す。(2)物を仕舞ひ込む。(3)居を移さす。例「彼に家を貸して居つたけれども、都合あつて外にナホシタ」。この自動詞ナホルは、元の如くなる、病が癒る、居を移るの意。例「家ナホリシタ」。

カテル 加はらしむ。

マドフ つぐなふ、償ふ。例「他から借りて居つた鉢を割らした(壊した)から、新しく買うてマドウタ」

コナス (1)消化す、着コナス等の意味。塊になつた飯を杓子でほぐすのもコナスといふ。(2)弱者を虐げること、とづきまはす。力づくにても言辭の上にも共にコナスといふ。例「彼は人の弱味に付け入りてよく人をコナス」

セタグ 探り求む、あさり歩く。例「人の氣付かぬよい仕事は無いかと、世間をセタギ廻る」「女セタギ」

「後家セタギ」

オロス のゝしる、貶す、悪しくいふ。

サメル 削る。木をサメルとは木の肌を去り、荒削りすること。

カクマフ 人を援けはぐくむ。例「あの内には頼り所のない憐れな老人をカクマウて居る」「あの子は親にも

早く死別れ、可哀さうではあるけんどん、カクマヒテはあるけ、彼には仕合はせである」

シゲル 品物が家内に散亂したり、邸前に落葉や塵埃の散亂したりしてゐるのをいふ。他動詞はシゲラカス。

アエル 樹木が暴風に遭つて枝葉の萎みたること。又雨がアエルと言へば小雨の降ること。

マクル 物の落ちるを言ふ。農村のことは。

マクリコム はふり込む。

マクリステル はふり捨てる。

マクリカラゲル まきあげる。

カヤル (1)孵化す。他動詞はカヤスである。(2)物は勿論人の心の覆るをもいふ。例「あの子は正常なよい子であつたが近頃全くカヤッテしまうて、親達も心配されて居ることであらう」

イサル 沈む。イサラスは沈没せしむ。

クエル 崩れる、くづれる。

クボル くぼむ。

ヤオル 和かになる。例「風がヤオル」

ウワル 臼で米を搗いて、その出来上るやうになつたのを「ウワツタ」といふ。

ツカス 人又は物の一所に集まる。例「多人数の人がツカシかける」「用がツカシかける」

コブル 小搗きする。例「玄米をコブリテしらげる」

ハマル 奮發する。例「彼は人の事にハマッテ世話をする」

ナエル 塞える。例「體が疲れてナエル」「ナエナエになつた」「歩き過ぎて足がナエタ」

ネマル 飯や煮物の腐敗したのをネマツタといふ。

ヨワル 魚肉などの腐敗しかつたのをいふ。

メゲル 陶器漆器などの缺け傷くこと。

スケル 物を受ける時に手を差出すこと。垂れる水など下で受ける。例「彼は人が物を遣らうとすれば、ち

やんと手をスケテ待つとる」

スケオトス 人の爲さんとして居る仕事を、横合ひから奪取すること。

カブル 神経痛などで骨身の痛むこと。例「肩がカブル」「骨がカブル」

オラブ 叫ぶ。

オドロク 睡眠の覺める。

モトウル 永く保つ、いつまでも續く。例「あの女は何度も嫁入りするが、何處でも永くモトウラヌ」。又口

がモトウラヌと言へば聽取り難い程に呂律のまはらぬこと。

ミチャク 碎く、壊す。例「打ちミチャク」。ミチャケルともいふ。

マル 小兒のゆばりするを尿マルといふ。又、成人も小便マルなどいふ。

マリカブル 大小便をしかぶる、粗相する。

コク 言ふの卑語。「何をコクか」「嘘をコクな」等。又物を尋ねて際會し得なかつた時にデボコイタといふ。

ガル 叱る。叱られるはガラレル。

タボフ 物を貯へること。

カラフ 擔ぐ、背に負ふ。又途中で雨に逢ひたるを雨カラウタといふ。

クビル 紐などで物を締めくくる。キビルともいふ。

ウテル 呆氣にとられて答ふるに辭なきこと。例「やばから棒突出したやうなことを問はれて、一寸ウテタ」

モテル 永く保つこと。例「此の品は丈夫でよくモテル」

ホタル 投げ放つこと。ホタリコム、ホタリタアス(倒す)の語もある。

○

クセル 板などの濕氣で歪みや反りを生ずる。

グゼル 人に難題をいひかけてくねること。

カツク なじむ、なつく。例「あの人はやさしいもんぢやけ、子供達がよくカツク」

スルク 摩れ合はしむ。家の戸壁板間の拭掃除をすることもスルク。農村のことは。

スルキアフ すれあふ。例「あんな人とはスルキアハレヌ」

マメル 朝に夕にいつもその仕事に携はる。マメクルともいふ。

サクル 剝る、ほる。例「柱の穴をサクル」

スグル 木をスグルとは木の肌を芯の出るところまで削つて滑りよくする。

ホグル 穴を明ける。

ホガシトル 續いて仕合はせよきこと。例「あの人は彼處からは金が送つて来るし、此方からは物が送つて来るし、仕合はせのよいことでホガシトル」。

ゼゼル 舌滞りて言語の正しからざること。

クスム 出づべき所へも、どかしく思つて出ぬこと、引込思案。

リヨウル 料理する。例「肴をリヨウル」

カガル 繩紐等を以て絡ひ合はす。又喧嘩の時などに爪を人の身體に立て搔き裂くをいふ。

ツガル 先方の人の顔くまでにきつかりと談じ置くこと、だめを押す。

モガル 自己の仕事人の世話等に氣を揉む、氣を遣ふ。氣を揉み果たし、氣を使ひ果たすことをモガリテエ

コツスルといふ(一〇五頁参照)。

「あすこの息子は親があれ程迄にモガツテ意見をしても少しも心を入れ替えらうともせず、親もモガリ

テエコツシテとうく病氣を起した」

カスル すゝる、吸る。例「茶漬飯をがすく」カスル」又水など残りなきまでに汲み出す。

エセグ 人の富貴榮達を羨み、妬み言をいふ。

ハツク 物の乾き切る。例「早が續いて物がハツイタ」「乾和布を火に炙りハツカシテ食べる」

スピク 齒の寒さを感じてしみる時に、「スピカレルやうにある」といふ。

ウツク 腫物や疵のづくづく痛む。

ネツム つねる、抓る、つむ。

イビル (1)人をなやます。(2)鯛又は挿花の根を火氣のある灰の中に挿し入れて焼く。

モモグル ゆすぶる、振り動かす。

ズズヒル 合はせた絲の縊りが、一方のみ硬くてしつくり合つてゐないこと。

ズズレコボレル 溢れこぼれる。

ソギル 殺ぎ取る。

ネギル 詰め寄る、責めつける、難題を言ひかける、強請する。睨む

ヤギル 子供が我意を徹さうとして強情を張ること。

セエギル 精魂の續く限り氣張る。セエバルともいふ。

イコル 干大根などが寒氣の爲に氷りたらしくなる。

カツゴル かゞりつく、掴まりつく。例「彼は寒いく」と言うていつも火にばかりカツゴツトル」

ヒデル 火傷の跡のひり／＼とすること。

キドル すわる、坐る。

シモル 沈む。例「船がシモル」

ニヤル 煮上る。

ドロム 粘り氣を生ずること。海藻搗布を細かく刻み、汁に和してその粘つたさまをいふ。

カシヨフ 觸れる、障る、搔きませる。例「人の事にカシヨウてはいかぬ」「そんなことには成可くカシヨハヌ
がよい」

カガソフ 斯うしたら良からうか否かと躊躇する。

ガジユム 縮む。例「寒さの烈しいのにガジユンデをる」

ギシユム 勢を張る。例「彼は近頃分限者となつたと思つて、ひどうギシユンドル」

ナジユム なやむ、悩む。例「子供がナジユンデ生れた」

メジユム 繼ぎ目裂け目などから水氣の滲み出ること。

クジナム 自分のすべき事を誰かするだらうと動かず、頻りに勞を他人に譲らうとする、骨惜みをする。

タジナミヤフ 二人の者が互に勞を譲りあふ。

ボツナム かこつ。彼は子供を失うてしをくとしてボツナムではかりをる。ブツナムはぶつくとつて難儀を語ること。

ギバル 差出て人より先に事をしようとする。例「あの人はよくギバル人で、人の一時間かゝつてする仕事を、半時間で仕上げようとする」

スクバル すくむ、竦縮する、ひれふす。例「彼は悪事を働き逃げ出したが、後から聲を懸けられ俄かに其場にスクバツテ了らた」

チエエバル 困るといふ朝鮮語の轉入したもの。

ヘタバル 坐る、又坐り込んで動かぬ。

キカバル 威張つて強ひて我意を通さうとする。

ベエル 足蹴にして物を放る、跨にかけて人を倒す。ベエリタアス、ベエリコム等の語がある。

オサエル 食物を箸で挟んで、お客の手に渡すこと。

オワエル 逃げるのを追ふ。

サカエル 喧嘩の中に入つて和解させる。

カツチエル 仲間に入れる。

ソバエル 雨がしよぼくと降る。

ドメク ホメクと同じで、暑さがドメクと言へば、暑氣の烈しいこと。

ビロメク 時々影を現はす。例「あの男は時々此處にビロメク」

コギリメク 氣轉を利かしてよく立働く。

ヨカシメク 揚々として權勢を示す、上流の人の如く装つて虚勢を張る。例「ヨカシメイテ人を見下げる」

ヨカシ ヨカシ 權勢ある人、富裕なる人、上流の人。

アラメカス 人を荒立たしむ。

セカス おだてる、そやす。例「セカシたてるのでせきこんではらかきだした(腹立てだした)」

エラカス エツラカスと同じ。嘲弄す。

シラカス 人を嘲弄する。

ホトバカス 水に浸して膨脹させる。

トラカス 人を打ちたく、打擲す。「かばちトラカスゾ」は頬を打つぞの意。

トボヤカス おだてる、そやし立つ、のせたてる。例「氣に入りさらな事を言うて人をトボヤカス」

ムシラカス 人を打ちたたく。かばちムシラカスと言へば頬を打つこと。

オクラカス 後らす。

モエラカス 金銭などを増殖する。

ミセブラカス 見よがしに見せる、見せびらかす。

チヨウクラカス 子供をそやしたてゝ暴れ騒がしむ。てうらかす(嘲弄)とは稍異なる。

ズラス (1)物の位置を少しく移動させる。(2)人を避けようとする。例「向うから人の来るのを見て、ズラシ

テ直ぐ横道を切つた」(3)己れのなすべき事をなさず、その責めを免れようとする。

クヤス 崩す、くゆるやうにする。

ブチクヤス ぶちこはす。

モヤハス 凧と凧とをもやひ合せて勝負をする。

ハチカル 大股擴げて立ちほだかる、世間狭しと我儘なこと。例「ハチカリ廻つて自分の意地を通さうとす

る」

ヘチカル 坐るの卑語。ヘチカリコムは坐り込む。

タマガル たまげる、たまぎるに同じ。

マテガル 手まめによく仕事をする、よく世話を焼く。

ソソクル (1)破れた所を繕ふ。(2)そゝのかす。「何某はまてえ(全き)人間であつたが、彼がソソクリ出して善

からぬ道を踏ました」

セセクル 弄ぶ、扱ふ。セセクともいふ。

カスクル 水を其容器の底まで残りなく汲出す。

ホソクル 嘲弄する。

アセクル 掻き廻す。アセルは多くの品の中からよささうな品を探し出すこと。アデクリカヤスは物を手で

翻覆すること。

コネクル 歩いてゐて過つて躓く。又コネル(難題を言ひかける)に同じ。

クネクル クネルともいふ。例「難題を言ひかけて人にクネクル」

スネクル すねるに同じ。

スベクル 迂る。例「そんな所を飛び廻つて居つたら今スベクルぞ」

クジクル 又クジヲクルともグジルとも言ひ、さもない事を事々らしく言ひなして人を困らせ虐げる。

クジヲオコス 例「あのしれものめが、公事を起して又人をいぢめる」

クジニン くじを起す無頼の徒。

スイクル 錐揉みする時などに眞直に通らず横にそれる、あて外れ。又スツボウコクともいふ。

カチケル 餅などの乾いて堅くなること。

ササケル 物の先の自然に細かく割れる。

スルケル 摩れ合つて傷くこと。

ソツケル 人の意志に反した言動をなしてさからふこと。さういふ人をソツケモン。

ホソケル さらばふに同じ。瘠せ衰へる。例「彼は近頃病氣がよい方でなく、大分ボソケて居る」
 コツケル さらばふ、やせこける、やせ衰ふ。例「やせコツケル」「色がはげコツケル」
 ホロケル 脆く碎ける、ぼろ／＼になる。
 モモケル 桃毛立つ、紙などの摺れ合つて毛立つ。
 チバケル 物を問はれて色々に言ひ紛らし、偽つて實を言はぬ。
 アバケル 腫物や火傷の化膿糜爛する。例「灸がアバケル」
 ウジケル 腫物の化膿し爛れる。
 ヒヨウケル ザウゲルともいひ、人の笑ひを招くやうな言動をしておどけること。
 ツバネル やぶれ綿を延べ治すをいふ。例「あのつんづんに敵れて居つた綿をツバネ綺麗に出来し上げた」
 アヤメル 人の名譽をも辨へず之を陥れることを、人をアヤメルといふ。
 スタメル 煮物をして餘分の水分をこぼし滴らせる。
 ヨツメル 一纏めに集める。片付けまとめることをカタヨツメル。
 カンメル 頭に被る。
 ホシメル 犬などけしかけて相争はしめる。又人の喧嘩に立ち入つて煽動し、鬭争を増大せしめる。ホシメ
 カスともいふ。
 セコタメル 責めまはす、苛め廻はす。
 シノベル 藏める、仕舞ひおく、入れて置く。

スワブル (1)吸ふ。例「子供が乳をスワブル」(2)食物を直ちに嚥下せずして口中に置き、小味を試みつゝ食
 べる。
 フクダム 人の寢に就いたことを卑しめていふ俗語。
 ツクホム つくばふ、蹲踞ふ。
 オケレル 「飯が蒸せる」をメンガオケレル。
 ヨタレル 草臥れてよた／＼する。
 カツレル 饑ゑる。例「食事時を過ぎても食膳を出さず、カツラカサレタ」
 オホクレル 溺れる。
 タタクレル 着物や紙などの折疊みの正しからずして皺立つたこと。
 ムカバレル 病の爲顔の腫れる。
 ウタブレル 身を持ち崩し、世の中をなぐれまはる。
 ワルブレル 例「彼は近頃一際ワルブレテ何とも手が着けられぬ」
 ソゼル、ソジル 損ず。他動詞はソザス。
 オウセル 負はせる。例「馬に荷物をオウセル」
 ハブレル 腹立たしい振り合ひ。ハブレカヤルとも。
 トビク 床上や座所に震動を感ずること。
 ソロビク 着物の丈が長過ぎたり、帯が解けたりして地に垂れ下つて引かれて行く。

ウチナゲル 仕事を勵ます自然に任せて放置する。

ウチミジャク 打ち砕く、拉ぐ。

ウッチョク 打捨て、置く。

ウツマル 話や讀書の央ばに語の止まる。例「彼は訥辯であつてつらく語が出て、ウツマリウツマリ話をする」

ウツバサガル 物と物との間にはさまる。

ウツバナス 打放つ。

ウツブルフ 打振ふ。

イアゲル 水に漬けて置いた米を筥に取上げること。

イッカケル 注ぎ掛ける。

イッカヤス 覆す、かやす。

イックヤス 崩ゆるやうにする。イックエルが崩れる。

イッコボス 零す。

イッコム 穀物或は水を器につき込む。

イッチャケル 零す。零れるはイッチャカル。

オツタクル 人の物を奪ひ取る。

オットル 押へて物を取る。

オウツリマアル 得意げな事を言つて彼處此處くまなく駈廻る。

オチカヤル 快方に赴いた病氣が元に戻る。

ウツブルフ 寒さにこらへかねてふる／＼ふるふ。

ツンマブル 人の氣を損ふをも意とせずおこつたらしい態度をしてゐる。

ケエナル もと来た路をふりかへつて来る。

ケエナツテミル もと来た路を向き直つて見る。

ケエクリナアル もとの路になほつて歸り来るをいふ。

ケエマガル かいまがるの轉。體を曲げて轉び臥す。

コツバゲル 色のはげ去ることを強めていふ。

コツバツル はつるの強意。例「喧嘩して人の頭をコツバツル」

コクツム 家や身代の崩潰する。例「彼のうちは奢りが頂上してをる。今に身代のコクツム時が来るのぢや

コイヤフ 能く打合はせをなし置く。

コゴシラフ 老人病人の口に合ふ食物を見計らひ調理して進める。

ハチギレル 切れるの強意。

ヒンナメル なめる。

チギル 果實を木からもぎとる。

チワル 割りあはせる。物を各人に分配する場合に「チワリテする」といふ。例「今度の井戸普請の諸費用は平生水を汲む三十六軒にチワリテ金を取立てよう」

チマドフ 血迷ふ。

チチクラアス 打ち喰はす、なぐる。

チチコム 打ち込む、放り込む。

チチブクレル 肌の内から張り出て脹れる。

チチヤブル 打ち破る。

チチャメル 止める。例「そんなことならチチャメテしまへ」

ソツバル 引張る。

スガヤス 裏を表に返す。

トトピアガル 一層高く飛上る。

ドマゲレル 人の心の悪に覆ること。例「彼は近頃ドマゲレテしまうて昔の心根とは全く違つた人物となつた」。

カヤル(五頁)参照。

ドウツクマル 身長高からずして横ひらた幅く肥満せること。

タバサム 考慮に入れ置く。例「向ふからどういふ風に言ひ出して来るかわからぬけ、ちやんとこれ／＼の

事はタバサンデおいて、しつかり應對して來なさい」

ゼツタラフ 背に負ふ。節分の厄拂ひがめでたいことを唱へ最後に「茲の御家の悪魔外道を、此厄拂ひが背な

にゼツタラウテ、西の海へとざらりざつとこつけこう」といふ。

ホウズル 着物の丈が長くて、裾が地べたに垂れる。

ホウズリマワル 世の中を勝手氣儘に浮かれ廻る。

シカブル なしあやまつ、粗相する。マル(六頁)参照。例「子供が尿シシカブル」

ヨシカカル 寄り懸る。

サデオチル 落ちる。農村の語。例「そんな危ねえとこに行たげな(行けば)今サデオチルが」

トチマドフ 戸惑ふ、狼狽して去就を決しかねる、まごつく。

ヘキラル へし折る、撓めて折る。

ナメコム 人を安く見こなして甜め込む。

トバシコム 口中に飛び込むが如くに多食する。例「彼は大食漢で何を持つて行つてもトバシコム」

ネリコム 深く考へ込む。例「あの人はネリコンダ人で——」

ネヂツキル ひねり切り、逆に旋らして切る。

ネヂキコム ねぢこむに同じ。ねぢてはめ込む。又談判の際などに先方の失言に乗じて不服を鳴らす。

ツラサゲル 吊下げる。

カヒタテル 伺ひ立てる。例「看護に力を盡し、とう／＼あの病人をカヒタテタ」

フンダツ 踏みはだかる。又フンダチカヤルともいふ。

サカダツ 病氣の快方に向ふ。

クタツク 寝るの卑語。

タバツク 世間をたはれ廻る。例「何處をさうタバツイテ廻るのか」

ムラツク 心一つに定らぬさま。例「彼は近頃逆上して氣分がムラツイてゐるやうだ」

イラビツク 鍋の煮物が焦げつく。その焦げつかうとしてゐる状態をイバリツクといふ。

ムスボリツク 數多のものが結び集り付く。

ガミツケル 人を頭押しに噛み付くやうにどなる。

コキツケル 荒く人を叱り飛ばす。コキマアスは荒く使ひ廻すこと。

フキツケル 憤りに乗じて人を吹鳴りつける。

ホウギリツケル こつびどく極め付ける。

ハビキアフ 對抗する。例「彼が何某の向うを張つて見ようとしても、もとより力があはぬのであるけ、と

てもハビキアハレス」

ツンナフ 手をつなぎ合ふ。例「一緒にツンナウテ行かう」。ツレナフともいふ。

ウベヤアス 配り合はす、入れ合はす。

トットバス (1)持つた物を取り外す。(2)病人の死ぬ。例「長い間の看病も水の泡となつて、とう／＼トット

バシタ」

オロシクヤス 人の缺點を擧げて悪しざまに言ひけなす。

ナリマアル 大聲で世間を吹鳴り廻る。

ノタクリマワル さまよひ廻る。

トリアドメル 物を一所に纏め集める。

ノツケソル 仰のけざまに反り返る。

ヲリアガル 議論の激しく昂じる。

モチオホブル もてあます。品物を持つてゐる爲にかへつて損害を被る。

ホメクヤス ほめたてる、ほめそやす。

コエクラフ 肥滿せる人を指していふ俗語。

コエマツレル 體の肥え太つたのをいふ。主として子供にいふ。この子供は乳が多いかコエマツレル。

カキシボル 下痢する時快く通せずかきしぼるやうであること。

スバクリデル 詰込まれた物が自然に抜け出づる。

フミチャチャクル 目茶々々に踏みにじる。

○

タンダエル 探り索める。例「だん／＼タンダエテ行けば判る」

キンシル 品を吟味して優れたのを選ぶ。

モツキヨウジル 勿體をつけて人を祭り上げる。阿諛の意を含む。

チャスル 人目を掠めて盗む。

ベエスル 兒語、物を捨て去る。パンスル、アッペエスル、アッポイスルともいふ。

ゴットリスル 物事に驚いて忽ちに力を落す。

あの人の病氣は随分重かつたが、家内に俄かに起つたことに就てゴットリシテ、忽ちにあの世の人となつた。

ハシカスル ハシカは芒ヒヤのこと。麥の芒を取除くことを麥のハシカスルといふ。

シガクスル 用意する。

ジヨウスル 人の物を己れの意のままにする、自由にする。

シヨウヤクスル 蠶の四眠を終へて成長する頃をシヨウヤクスルといふ。

セエラクスル 残す所なきやう普く探し求め廻る。

ドウシンスル 人と同伴する。

トンコスル 兒語、躓き倒れること。例「危いぞ、今トンコスルばい」

アッポスル 幼兒の遊ぶこと。

ハッサンスル 物事に諦めを付ける。例「随分苦しい目に遭うたけれども、これでハッサンセネバ仕方はな

シ」

ハットウスル 人の通りかゝるを途中に遮る。

バハンスル

幕政時代朝鮮との貿易は對馬藩の仕法として獨占到屬し、人民の私に貿易することを許さず、犯す者は嚴罰に課せられた。その禁を犯し密貿易するを俗にバハンスルと言つた。

ケンミスル 正し見る、良否を極めて見る、調べてみる。例「秋のみのりの熟不熟をケンミシタ」

インシンスル 品物を贈る。

バンゾウスル 人と人との賣買の中に入り、双方よいやうに口入れをする。

コンノウスル こづく、打ちたく。例「彼は先頃何某より甚いコンノウラサレテ居つた」。コンノウナラ

ンは始末のならぬ、こなし方の無いの意。「コンノウナラン男」など。

ヒキベツスル 物と物との比較をなす。

ホウチャクスル 腫物の爛れたことを、出来ものがホウチャクシタといふ。

ボウマンズル 前後左右をも辯ぜぬやうに狼狽する。火事場に於る周章のさまなど。

ユサンスル 油断するに同じ。うつかりする。

ヨダカスル 夜を更かす。

テメヲスル 人の買物をして密かに口錢を取ること。

ユメスケヲスル 夢助。油断の意。例「彼は仲介人に利潤の大方を吸取られながら、氣付かずにユメスケヲ

シトル」

イケツコロシツスル 人を操つて活けつ殺しつすること。

ニヤンニヤンニスル 噛み砕く。「猫が鼠を捕つてニヤンニヤンニ」

チャアフウニスル 人を取り所の無い者のやうにけなして愚弄する。

チャチャボチャニスル 仕事など取止めのならぬ迄に崩れしめるやうにする。例「辛苦をして折角あれ程までに築き上げた仕事をあの大山師が横合ひから色々なことをすゝめて損をさせ、遂にチャチャボチャニシテしまうた」

ムツトスル むつとする、憤然とする。

ムクトスル 腹立つ、憤る。

ドッキリスル 濃厚なものを多く味つた場合にいふ語。例「今日如何にもあぶら濃き物を食はされてドッキリシタ」

ムクムクスル (1)心持悪くなつて吐きたくなる。(2)心の中に腹立たしく思ふ。

アクアクスル 倦怠。例「仕事が夥しくつかしかけて来たので、ほんにアクアクスル」

ケソケソスル 動作に落付きなく浮々してゐること。又ケソツク。

テンテンスル 人を款待する。又轉じて權門に媚びる。「彼は某によりて事を成さうと思つてか、某に對していつもテンテシテつとめてをる」

クワイクワイスル 氣寛くして惜しみなく金錢を使ひ、人に物を施す如きをいふ。又クワイツクといふ。

ジガジガスル 胸が痛み又腹がにがるさま。

シヨギシヨギスル 物事が捗らずして氣がいらだつ、心いそがはしいこと。

スカスカスル 寒氣を感じる。又スカツクといふ。

ゾゴゾゴスル 寒氣がして體がぞくぞくする。又ゾゴツクといふ。

ツクツクスル 腫物が痛むときいふ。

ハチハチスル 痛みの甚しいこと。

頭痛で頭が割れさうにハチハチスル。

ムシムシスル 憤懣抑へ難い時にいふ。

モンモンスル 例「今日は暑くて體がモンモンスル」

モヨモヨスル 例「何か躰がモヨモヨスルやうにあると思つて見たら、蟲が這うて居つた」

チヨコチヨコスル 戯れに人の腋下などに手を觸れてこそぐる。

ミガドクドクスル 恐怖の念に驅られた時の氣持。

セギセギスル 先に譲り譲りする。例「これは早くせにやならぬのであつたのを、先にセギセギシテとらうと
う今になつた」

バカイバカイスル バカフは我後れじと争つて奪ひ取ることだから、負けまじと奪ひ合ひをするの意。

ヘネゴネスル はきくしないこと。例「あの人は物の不極りな人でいつもヘネゴネシテゐる」

フリシャリスル 例「彼は何か腹立しくどうもフリシャリしとる」

トチバチスル 極めて忙しく事をなすをいふ。

ウラボンシトル 誤つて着物を裏返しに着たりしてゐる人を、ウラボンシトルと言つて笑ふ。

ガボガボシトル 容器ばかり大きくて中身が小さい爲空間の多いさま。

ミジヨミジヨシトル 野菜類の柔かくて口ざはりのよいこと。

キシキシシトル 言語動作の何となく角立つてゐる様子。

ゾウゾウシトル せはしさうな様子。

ソブソブシトル あの家は何かせはしさうで家の中がゾウゾウシテラル。

ツクとも。 煮加減の良からぬ粘氣のない飯を、ソブソブシトルといふ。外米飯のやうなもの。又ソブ

ノメノメシトル 柔かくて口ざはり手ざはりなどの良いこと。餅のよく搗上げて柔くなつたのにいふ。

サブラウトル さびてゐる。やせおとろへてゐる。例「彼は此頃は太分サブラウトルが、どうも病氣が折り入つて來たのであらう」

アキスカットル 中身はなくて明き透いてゐる。

ソチゴウトル 「彼は近頃ソチゴウトルやうにある」は際立つて氣分が違つてゐること。「彼はソチゴウタコトをする」といへば間違つた遣方をするの意。

テツクットル 何もせず手をつかねてゐる。

ブットル 高振つてゐるを略してブットル。

マルウナル 身代のよくなること。

メデタウナル 八十歳以上の老人の死亡した時の悔みは「メデタウナラシャリまして云々」といふ。

カネエナル かねになるで、習ひ性となるの意。例「平生のらくらして居つてはそれがカネエナツテ、働きに

取りつかれぬことになる」

ナリニナル 草臥れたるさま。例「今日は遠方から重い物をかたげて來てナリイナツタ」

ヘンドニナル 廻り路になる、遠くなる。

チンドリサッコニナル 血だらけになる。例「彼は大けな怪我をして體はチンドリサッコニナツテ歸つて來た」

ヒトシツクニナル 雨に濡れた時、汗の多く出た時などにいふ。

メレンニナル 前後も辨へぬ程酩酊する。

カチンニナル 餅などの乾いて固くなる。カチケルに同じ。

ヒニナル 烈火の如く腹立つ様子を、ヒニナツテはらかくといふ。ハラカク(三三頁)参照。

シワコクテエナル しわくちやになる。

シラガフツケエナル 白髪富貴になるで、髪も髭も悉く白髪となること。上縣郡佐護村では白髪ばかりの頭となることをシラガジュウフクといふ。

ジライフ 理を理とせず強情を張つて我意を通さうとする。

ホイホイフ 喘ぐ。例「彼は子供を病院に入院させて、その金を作り立てることにホイホイウテゐる」

ガシガシフ 例「何時もせはしさうにガシガシ言う」とる。ガシガシピンボウ(八一頁)参照。

チャラチャライフ チャラチャラともいひ、戯れごとの意。例「チャラチャラ言うてふざける」

イチイチイフ

針で刺すやうにいふ。

ツンツンイフ

誇り高ぶる語。例「彼は頭が高うして愛想なく、いつもツンツン言うて人を極め付ける」

ヤアヤアイフ

急がせる。例「早うして呉れえちうてヤアヤアイウテ急がした」

イゴモクイフ

故障を言ひたてる。例「彼はどうもやかましい人間で、又もイゴモク言うて居る」

ウンスンイフ

例「重い物をからうてきつさうにウンスンイウトル」病氣が重くなつてウンスンイウテナル

ソラハライフ

人を急がせる。例「彼は氣ぜきな人間で来るが早いかソラハライウテ人を騒がさせる」

ヤリモリイフ

氣急しく物をいふ。

シチマンハチマンイフ

多辯に喋々する。例「彼はシチマンハチマン喋舌つてばつかりしとる」

シチャランバチャランイフ

前項に同じ。

ヒョウヒヤクイフ

おどけた事をいふ、ヒョウゲル。

コウノヘンシヨウイフ

人の言に同意せず物事に難癖を付け、言を左右にする。例「彼は偏屈人でいつもコウノヘンシヨウばかり言うとる」。

メエメエナク

子供のよく泣くを言ふ。

クロナキイナク

黒泣きに泣くで、譬へのならぬ程の泣き方。例「あんな者にひつき廻りとつたら今に難儀を見て、クロナキイナカにやならぬ時が来るのぢやが、それが分らぬとは情無いつちや」

ケンシキトル

見識張る、見識あるふりを装ふ。

ゲンザミル

人を輕視する。例「彼は何かいゝかち(良いかと)思つて、えらさうに構へて常に人をゲンザミル」

テ居る

カザンデミル

食物等を啖ひ試る。村方の語。

ハシウツ

配膳して箸を付けること。

ホパウツ

物々交換をなしてその價格の差金を辨ふ。

カタヘラウツ

人の飲食してゐるのに途中から加はつて、其半方を食するをいふ。

アイコウツ

例「何某と何某との談合の中間で、何某がわきからアイコウツテ意外に早く纏つた」

バツテエウツ

寝様の亂雑なこと。

アクスエエウツ

飽き果てる。例「重ねく、仕事を夥しう持ち懸けられてアクスエエウツ」

カマカケル

初めに談じの緒だけを話し、後日いよくの談じをなす時の聯絡となしおく。

ソイカケル

火に火を持つて行つて益々火勢を強からしめる。例「彼は何々の仕事でしくじつて居りながら、それにも懲りず又大けな事を思ひ立つたが、成就はとて難しからう。丁度しくじりのソイカケするやうなもんぢや」

フクリンカケル

輪をかける。例「甲は念入りな仕事をするが、乙はその上に又フクリンをカケトル」

ヘチグソカケル

人のいふことに反對して是をけなす。

オッコカケル

兒語。腰を掛ける。

テンサス

非を打つ、非難の點を指す。例「彼に於てはテンサス所は更はない」

ミツヲサス

騒擾の中に一言を入れて、是を鎮めること。

キラハル 水面に鐵錆の如ききら／＼したものの浮出たこと。

チラリハル 朝鮮語のチラリハンダの轉。おこり飛ばす。

ノラハル ノラは懶惰。のらくらして空しく時日を徒費する。

ヤダンハル 理を理とせず己れの非を言ひ張る。朝鮮語の轉訛。

クッシンクフ クッシンは苦參か。野生の蔓で味最も苦く、其根を薬用とする。顰面した人のことをクッシン

クッタやうな顔をしようと云ふ。是に反し物事を苦にせぬ呑氣な人を「苦もクララもない人」「苦なしの九

右衛門」等といふ。苦參を一名クララといふ。

ヒックククラフ 人の引き惑ひに遭ふ。アビキヲウケル(三五頁)に同じか。

ソババチクラフ 傍杖食ふ。喧嘩の傍に居て思はず打たれる、卷添へとなる。

オシヨウバンクラフ 人の事に連坐して外部の卷添へに遭ふ。

コウクワス よく言ひ含めておく。例「此事件は斯々の事から起つてゐるが、つまりは斯々の事になると思

ふからよく氣を付けておけと言つて、コウクハシテおいた」

サカモクロククラアス 理を理とせず己れの非を通さうとして却つて逆さまに張り向ふ。

デボコク 訪問した人に面會出來ず空しく立歸る。又目的の仕事の達せられなかつたこと。

ホンシヨウツク 一時逆上した病人の本性に立歸る。

ケンキョウツク 暴れ騒ぐ。ケンキョウ馬、ケンキョウ蚯蚓等の語がある。例「あの子は平素が亂暴で、何か

氣に食はぬことがあれば直きケンキョウヅイテ仕方がねえ」

コテツケル 巧く言ひなして自分の方に人を引きつける。

ソノヲヒク 血統を引く、遺傳する。

シヨウミョウヒク 喘息にかゝる。

グルミョウヒク 臨終に際して命が切れきらす、日數のかゝること。例「あの人は生前に随分惡業を積んだ人

ぢやけ幾日も幾日もグルミョウヒイテ、行く先に行きやえぬ」

コヘエユフ 器物の壊れたのを一時絲又は紙縊を以て結合せおく。

シュウレエフク シュウレエはちやるめら、朝鮮の樂器にして形喇叭に似たり。酒の甯瓶に入つたものを其

儘口にあてたのがシュウレエを吹くに似てゐるので斯く言ふ。又雨傘の突風に煽られて外に返つたのがシ

ュウレエの形に似てゐるので、傘がシュウレエフイタと言ふ。

カドヒシガタツ 角立つに同じ。

ヤマクマカケル 山々を駈けまはる。

フケガクル 微づく。

ヒヤイホガデル 寒さ怖さのあまり毛孔が立つて鳥肌になる。

ヘイニノル 幣に乗る。祈禱により、神の人身に憑りしが如く感應すること。

カゼニアフ 死靈の風にあふ。

シュウモンニイル 入籍する、子女の他家の竈に入る。

オサガコホル 座が白ける。

スバテエマアル 有らゆる所を駆廻る。例「何處をさうスバテエマアルのか」「彼は道樂に身を持崩し、今日

は彼處に明日は此處にとスバテエマアツテ體に火の付くのも分らん」

ミガシヲル 身がしぼるに同じ。小便が快く通せず陰部の痛むこと。

メガツツク 人のする事のもどかしく見るに堪へぬ。例「愚圖々々して仕事の捗らぬのを見とつたらほんに

メガツツクばい、も少し精を出してしなさい」

メガヤネル 眼脂の出ること。

メニスガル 慘酷な事を目撃して、その事が眼底に去來し何時迄も離れぬ。

メツツクリカヤス 目のまはる程に忙しく立働く。

メクジニタテル 憎しみの目的とする。例「彼一人をメクジニタテテ責め廻す」

メヒンネブル 眠る。又人の死したること。

ミミフク 耳うちする、人の耳に口を寄せてこつそりと言ひ置く。

ミミヒツバル 酸いものを食した時ミミヒバルやうにあると言ふ。

ハナハチク 人をして二ノ句を繼ぐ能はざらしめるやうにする。

ハナグリトホス 辛味の強いものを食べると其香が甚しく鼻をつくこと。

ハギシカム 齒ざしり、齒齧みする。

ゼットウニカカル 口論して自分の非を擧げて詰められた時に、「何それが貴様のゼットウニカカルか。黙つ

とれ」等と言ふ。

クチイアガル 例「彼は言ふこととする事が全く裏腹で、只クチニアガリテ多辯にしやべるのみである」

クチカケル 口かける。例「通行の人にクチカケテ冷かす」

クチツボメル 人に折入つて物を頼み、或は詫入る時などは、自然と口の窄むものである。例「クチヲツボ

メテ斷りを言ふ」

クチニハナガサク よく喋舌ること。

シラクチタタク 無益の事を頻りに言ふ。

アツベエツラサゲル 意外の事に遭つて呆氣にとられ、愚かな面貌をしてゐること。

ツラニメンカブル 面目無きをも願みず訪問する時の語。おもてを犯す。例「今日はあがる面目はねえので

ありますけんどん、ツラニメンカブリテ參上致しました」

イキイノル 意氣に乗る、調子に乗ること。例「人にそやし立てられて居つてもそれとは悟らず、イキニノ

リテ話をして自慢して居る」

アタマニキリアガル 人にあやなされて調子に乗り自らをえらしと思つてゐる人を指し「アタマニキリアガ

リテ云々」といふ。

ムネガシハル 食ひ合はせて當てられて胸を絞り寄せるやうな氣持になる。

ムネオソハレル 夢の中に悪魔などのために苦しめられる。

ムネハライタメル 例「心配事が多くてムネハライタメル」

ハラカク 腹立つ。ヒニナル(二七頁)参照。

ゾウバラガワク 臟腹が沸くで、甚しく腹立つ。例「思ひも無いことを言はれて、ほんにゾウバラガワイタ」
キアガリガスル 人の騒ぎにつけて上氣する。

キモセヲヤク 肝煎る、世話をやく、物事をとりもつ。例「あの女は他人のことにまでキモセヲヤク」

キガモゲル 氣の苛立つこと。例「あすこは心配事が次から次へと出て來るので、主人もキガモゲテ此頃は顔色が良くない」

テラツク 約束してあてにして居た事が、違約により間に合はず無駄に終つた時に、テヲツイタといふ。例

「約束の品を幾日たつても持つて來ぬので全くテヲツイテ、とうとう仕事は成り立たず迷惑した」

テガワラフ 手先に俄に痙攣を起し暫く握り締めがたいことをいふ。

アシテハコフ 人の世話をしにわざ／＼赴く。例「人にアシテハコバシテ世話をかける」

テアシテアラフ 手足を洗ふといふこと。

マタヒンバル 股引張る。例「あの人はマタヒンバツテ歩く癖がある」

ツメガクフ 寒氣に凍えて、手足の爪が嚙食はれる如く疼痛を感じる。

ナマツメオコス 手足先を傷けて爪を起す。

シリヲキル 人から買物を頼まれ、途中でこつそりと口錢を食ふこと。

シリカタカク 大病人の大小便の始末する。又コシカタカクともいふ。

シリカラゲル 多くの客を接待するに用意の料理が半ばで盡きんとするを、シリカラゲルやうにあるといふ。

よ。

シリガウジヨツク 尻が落付かぬ。他行を思ひ立つてゐる際に客が入り來つて出にくい事となり、尻を動か

すのである。シリハウヨウヨスルともいふ。

ツツメヲアハス 事の始末を合はす。

アビキヲウケル 潮のだん／＼さし來るをアビキといふ。波及。人事にも用ゐる。例「何某の爲にそのアビ

キヲウケテ迷惑を蒙つた」。ヒックワクラフ(三〇頁)参照。

ネガツク 四方山話などが興に入つて立去り難くなつた時に、もうネガツイテ立たれぬなどいふ。

ミソガデケル 溝が出来る、交際上隔りの生ずる。

ミソツボガデル 常に宅のみに居て稀に外出することを斯くいふ。

マチゴガツキル 待ちあぐむ、待ち飽く。

ゾラダス 暗示する、事を明かに述べず暗に其一端を示して悟らせる。例「彼がどんな事に考へてゐるか

思つて、こちらからゾラダシテ見た」

スヲカフ 戦を挑む、喧嘩になるやうけしかけて見る。

コンキトル 心配する。例「あの子供は癖の悪い者で親にコンキばかりトランとる」

ゴフカク 思ひも付かぬ苦勞をする。辛勞な事にぶつかり易い人を業な人といひ、さういふ性質をゴフショ

ウ(業性)といふ。例「あの人は子供の悪い爲年老いてまでゴフヲカク」

マタバシトル 自分で事を辨せず人を使つて之を爲さしめる。

イソイキスル 磯に貝や藻を採りに行く。又子供の寢小便したのをイソイキシテ來たといふ。又ミナヒラヒ

ニユクも蟻拾ひに行くで同義である。

ヤマタテル 葬式をするに當り其通路に神社があれば、椿の葉を其社前の塀に挟み不淨を避ける。これをヤマタテルといふ。

メンデエクル 人の面倒しさを顧みず根掘り葉掘り繰返し尋ねる。

ホンソクマドフ 本體を失ふ。例「あの人の病氣は追々に深入りしてゐるらしい。今の内にしつかり養生して置かねば、今にホンソクマドフことになる」

シチャバレカク 甚しくチャラチャラ言つて(二七頁参照)暴れ騒ぐ。

シチカバチトラカス 頬を撲る。人を悪罵する時の語。シチホウゲタクラハスとも。

シヤチコハバル シヤチホコバルに同じ。屈曲の自由にならぬ程固くなる。

チュウチュウニコホル 極寒の日に忽ちに氷ること。

ヤセヒツバル 甚しく瘠せて骨と皮になる。

ナリフスボル 果實の夥しく生つたのをいふ、鈴生り。

キリガトホス 茶などの温氣にあつて香氣の失せること。

アメカラフ 雨擔ふで、途中傘なくして俄雨に遇ふ。

シヤチキイフル 雨が車軸の如く降る。

イハクガアル 申し分がある。

モドリハウシナフ モドリハは歸るよすが、寄り所。歸るよすがを失つて歸るに歸られぬことになる。

ツバキナメサセラレル

知らぬ間に馬鹿にされる。唾甜めさせられる。例「油断をしてをる間に、その良し

所は人に吸取られて、今ではツバキナメサセラレテぼんやりしとる」

シリクチカラモノライフ 兩舌を使ふ。例「彼は手前勝手な人間でシリクチカラモノライウトル」

アタマンギリギリカラモノライフ 勝氣な人の甲高に物言ふ。

アクコウモクコウツク 悪口の限りを言ひ罵る。

ゼニヲヌカノヤウニツカフ 金錢を濫費する。

クチハテンジウニツル 例「驕つたことをしよつたぎりいや、詰まる所はクチハテンジウニツルのぢや」

アブナイセヲトホス 舟行の難所たる潮の間を通り越すことから、難關を突破するの意。

サトウヤンマヘハハシットル 砂糖屋の前は走つてゐる。せんざい餡物などの甘味薄いのを斯く形容する。

イケエ 分量の餘計なること。

コメエ 物事にこすいこと。

キツイ しんどい、大儀。例「重荷をからうてキツイ」「病氣が重くてキツイ」

ダルイ 疲れ倦怠の意。又遅鈍なる人をダルイ人ぢやといふ。

スリイ スリイ人とは鈍い人のこと。

ネバイ 粘り強い。例「此赤土はネバイ」

エズイ おそろしい。

オロイ よくなし。

キシジケエ 戸障子などの滑りの悪く開き立ちのきしつくこと。

ダダビラタイ ヨコビラタイに同じ。人の容貌を評するにダダビラテエ顔ぢやなど言ふ。

シツチャカマシイ 甚だやかましい。

シチメンドウクセエ 七面倒臭い。

セセラビエエ 悪寒する、體がぞく／＼として寒氣立つ。

チッコメエ 至つて細小なること。チッコメエともいふ。

マダカイ 魔高い、か。魔物によく出會する人をマダカイ人といふ。

ノウトウンタケエ 聲音の高い。

ジュリイ 道路の泥濘をいふ。

ハシケエ 布紙などの粘り弱きこと。陶器などの壊れ易いこと。

キバンケエ 短氣。例「あの人はキバンケエ性質の人で、人とよく争ふ」

サカシイ 健かな。農村の語。

オトロシイ おそろし、おどろしに同じ。

ダラシイ 弛緩す、疲れてある。例「今日は暑苦しうして體がダラシイ」

ケキシイ 猛く恐ろし、勢尖し、角立ちし言語動作。例「あの人は振合ひのケキシイ人で、穩かに話のならぬ人ぢや」

ぬ人ぢや

イソウシイ 森嚴な。例「昔殿様の江戸參観の時の御出立の壯んなことは實にイソウシイものであつた」

マチナガシイ 待ち長し、待ちあくむ。

メンドウシイ 面倒な。

アリツベシイ ありありと、はつきりとせる様子。

マダカシイ 健脚の人をいふ。世間をよく飛歩く人を足のマダカシイ人ぢやといひ、又小兒の躁がしいをも

マダカシイといふ。

アトビカシイ 跡に未練が残つてゐる。

オトマシイ うとましい。

サグタマシイ 穢らし、貪り食することの賤しき。例「彼は物を食べるのにサグタマシイ食ひ方をする」

イメヤマシイ いま〜し。

アラカマシイ あらつぼい。

セセカマシイ 狭くて猶豫なし。セセコマシイに同じ。

ソソカマシイ そそかしい、そそつかしい。

ソウガマシイ 騒々しい。

イゲガマシイ イゲは小魚の小骨やとげ。イゲガマシイはいげの特に多いこと。

イカツガマシイ 腹立たしく物事に角を立てて言ふ。

オホクラマシイ 容易な事を如何にも難事のやうに重々しく言ひ立てる。例「あの位の仕事を如何にもオホ

クラマシウ言ふ」

コラシイ 待ちあぐんで氣の盡きること。なす事なくて徒然を感じる、退屈、無聊。

カララシイ 喉のかはいて湯水の欲しくなる。

オツラシイ 智慧の無いやうな。例「あの人は何とか引締りのないやうなオツラシイ顔付である」

ヤラシイ いやらし、いとはし、怖ろし。毒蟲などに出會つた時にあゝヤラシイといふ。又残忍酷薄なる人

をヤラシイ人ぢやといふ。

ヤゴラシイ 煩はしい、厭はしく思ふ。ヤゴヤゴともいふ。例「そんなヤゴラシイ話はさう再々聞きたらね

えばい」「斯う亂雜に取り散らかしてあつてはヤゴラシイぢやねえか」「あせぼが體一杯に吹き出てヤゴヤゴしてたまらん」

セカラシイ (1)はづかしがる。(2)面倒くさい。ユゼカラシイといへば小面倒しいである。

(1)彼はセカラシイ性分で人前に出て物言ひ出しかねて何時も尻込みばかりしてをる。

(2)又面倒しいことばかり言うてセカラシイこつちや。

セワラシイ 面倒しい、せか〜する。例「面倒しいことをせか〜言うて來るのでセワラシイこつちや」

シタラシイ 濕氣のさまにいふ。例「雨天続きで物が乾かすシタラシイこつちや」

ユウラシイ ゆつくりしてゐる。

イヂラシイ 針で刺すやうに意地悪くやかましいこと。

ケンケツラシイ 誇り高ぶるかたち。例「彼は偉さうに高振りて人に對して懇ろならず、如何にもケンケツ

ラシイ男ぢや」

ムサクロシイ むさくるし、むさし。

ヤエクロシイ 複雑な、面倒しい。

カタスボラシイ 零落した人の中へ出て肩身狭く感じること。

ムゴイイ 調味の最も濃厚なこと。

シチゴイイ 甚しく濃い。

ステエ するどく。

チコヨバイイ こそばゆい。

シリチヨコバイイ 曾て爲せし非行を人中で遠廻しに當て付けられた時などに、座に堪へかねて尻の落付かぬこと。

トリクサイ とろい、爲すことの遅鈍な。

トウログセエ とろい、鈍い、のろい。

キナグセエ 絹紙等の火に焼け焦げる香。

コウネツクセエ 自慢らしく物をいふ。例「彼は何か物知りかの如くにコウネツクセエことを言う」とる」

○

アヂナ 變つた。例「アヂナ事をする人ぢや」「でもまあけしからん、アヂナ事を言つたものぢや」

ガイナ (1) 強情な、我意な。(2) あらつぽい。

(1) ガイな事を言つて強情を張る。

(2) ガイにするな 荒つぽくするな。

ヤナ 苛酷な、むごい、甚だ。例「ヤナ立派な品ぢや」「ヤナこつちぢや」

ヤニクナ 人に悪たらしくいふこと。

ナマナ 容易な。多く否定形に使はれる。例「ナマナ事ぢややれぬ」「ナマにされる仕事ぢやない」など。

ナコナ 柔和な。

ヒヨンナ 妙な、變つた。豫期せざりし變つたことの起つた時などに使ふ。

ケブナ けしからぬ。ケブケレツナともいふ。ケレツはきてれつ。例「ケブナ事を言ふ奴ぢや」

シヨウナ 魚の生鮮なるをシヨウナさかなぢやといふ。

ゾツケナ 失禮な、不行儀な。例「此奴ゾツケナ奴ぢやなあ」

アコギナ 一つの物を得ながらそれに満足せずして更に又他の物を得んとするをいふ。例「あの方はアコギ

ナ事を言ふ人だ」

アラオチナ おろそかな。

キガサナ 物に激しやすく氣急ぎにせか／＼とする。例「彼はキガサナ人間で何か少し間違つたことでもあ

れば容赦なく先き勝ちになつてちぎ怒り散らかす」

キズイナ 人に對して怒り勝ちで、動もすれば暴力にでも訴へまじき人などを。

キゼキナ 氣急な、せつかな。

ケンタイナ 誇りたかぶる貌。例「彼は偉さうにケンタイナ應對振りである」

コウトウナ 着物の柄などの地味な。

コツペエナ 小癩な。

フトウナ 丈に釣合はぬ胴の太い物などをフトウナ品といふ。

マツトウナ あやまちない、全き。例「マツトウナ人」

カンドウナ 慾深な守銭奴をカンドウモン。例「彼は取る事が好きで出すことが嫌ひ、實にカンドウナ人で

ある」
ギャウレツナ 大袈裟な。

メッホウナ 譯無いことを言ふの意。

ヒンツナ 無益な、無駄な。例「ヒンツナ仕事」「ヒンツナ出費」

ニハンナ 二半な、か。邪なる行爲。例「彼はニハンナ事をして居りながら世の中を大手を振つて廻つとる」

ニンジャクナ 弱々しい、懦弱な。ナマニンジャクナともいふ。例「そんなナマニンジャクナ事では世は渡られぬ。ま少ししつかとして遣つて行きなさい」

ネンバッコウナ 取分け念を入れること。例「あの人はネンバッコウナ人で、そのした事に就ては點指すところは無」

ノウテンギナ 浮れ立つ、軽はずみな、動じ易い、物見高い。例「彼はノウテンギナ人間で、一寸したこと

でもあれば直き飛んで行く」

バツサツナ 物事に餘り氣を懸けず大ざつばなること。例「バツサツナ人間で家の事なんかはちつとも考へず

金を湯水のやうに使ふ」

ビシヤクナ 弱々しき、堅牢ならざる。

ガンマクナ 荒々しい、自分の力を計らず多くのことを一時に成し遂げんとあせるやうなこと。例「彼はど

うもガンマクナ人で、成し遂げられぬ事を何も彼も皆一緒にやつてしまはうとする」

カタイツツナ 片意地といふに同じ。我意を固く取つて動かぬこと。

フンジユウナ 不自由な。

オホヤウナ 大様な、物事に餘り氣を懸けず常にほつたらかしてゐる、オホヤウスルは無沙汰するの

意。例「其後は御伺ひも申しませんで永らくオホヤウ致して居りました」「平生物事にオホヤウナ人である

け、こんな仕損じも出来るのである」

オホバンゲエナ 大ざつばな、並み外れの(世帯や獻立などに)。例「あすこはオホバンゲエナ世帯をするう

ちで僅か十人位の客人をまかなふに二十人分にもなるやうな獻立をしてゐる」

オホソウヤカナ 心廣くほがらかな、晴れやかな、こま／＼せぬ。例「あの人はこま／＼した事を言ひ爲を

せんで、實にオホソウヤカナさつぱりした人だ」

ケテエナ きたいな、けしからぬ。悪む語。シチケテエナともいふ。ケテエンワリイ、ケテエクソン悪いと

いふのは、不満に堪へぬ時に使ふ語。例「彼は自分の宜しからんことは棚に上げておいて、只人の事ばか

りを悪しざまに言ひなす、こんなケテエの悪い事アねえ」

ザントウナ 粗忽な、憤み氣のない、醜惡な。例「彼は人の前に出ても憤み氣が全く無く、直ぐ足を出すや

ら粗相な語を使ふやら、どうもザントウナ人間ぢや」「此品の體裁はどうか。どうもザントウナ品ぢやね

えか」

サツバサテエナ 混雜せるさまに言ふ。見るに堪へざる亂雜さのこと。例「サツバサテエナ事^{こと}でいつも取散ら

してある」

ナンメンダラクナ 返すべきものをも返さずその儘に放つておいたりするさま。例「あの男は萬事ナンメン

ダラクナ事で世を渡る」

シコブツナ 人而言へば醜いまでに肥満せるさま、品物なら特に不恰好なもの。醜物。

ジュウコウナ 高慢な。例「あの人はいつもジュウコウナ事ばかり言うてる人ぢや」

ジュウデンナ 分に超えて氣の利いたさうな事を言ふやうな時に使はれる。例「彼は人の事にまで懸りたる質の人で、何か自分を物識りかのやうに考へて、何事にでも直ぐ頭を出してジュウデンナ事ばかり言うてる」

テンガツコウナ 恥をも知らず人の指彈を受くべきことを敢へて爲す、せずともよいことをする。例「仕事が全う出来て行くことになつてゐたのを、脇から何某がテンガツコウナ事をして、事は遂に成立たざつた」

ドチクシヨウナ 苛酷な、非道な、無情な。例「彼はどうもドチクシヨウナ奴で、人の爲にならぬことばかりしてをる」

ボクシヨウナ 「今日彼は何某に古疵を發き出されて一言の言譯もしやえんで、ほんにボクシヨウナもんぢた」などと使ふ。

ロクシヨウナ ロクは正しく歪みないこと。「ロクシヨウナ奴ぢやない」は正當の者ぢやない。ロクシキニはろくにの意、又シキロクニともいふ。何れも否定形と共に用ひられる。例「彼は人が物を尋ねてもロクシキニ返事もせぬ」

フテキシヨウナ 人に對して眞意を缺きたる不敵な者を評して「フテキシヨウナ人間ぢや」などいふ。

ブキヨウセンバンナ 決断せねばならぬ時に臨んで決しかね、人の笑ひを招くが如き時にブキヨウセンバン

ナ事ぢやといふ。又とり返しのつかぬやり損ひをした時に、ブキヨウナやり損ひをしたといふ。

イハクリノヤウナ 巨巖のやうな丈夫な體を形容する。

ホタノヤウナ 柑柑かんかんのやうな。肥満せる人の形容。

ヲコゼノヤウナ をこぜに刺されたやうに常にいら／＼言つてよく怒る人の形容。

アラギモトルヤウナ 出し抜けに人のいやといふ程のことを言つて困らせる。例「人のアラギモトルヤウナ事を言うて」

ツツナイ 頭痛の打つこと。頭痛激しくて勢のなくなつたことをセエツツナイといふ。

イゲツナイ 貪り食する。食物に卑しい。例「何某はイゲツナイ男で出したものを遠慮なくよく食ふ」

シツナイ ねぢけた、根性曲つた。例「どうもあの子はシツナイ根性者ぢや」

タジナイ たしない、甚だしい、乏しい。例「何もかもタジネエこつちや」

キシヤナイ 穢い。

コジキナイ 乞食ない、多慾で人の物を欲しがらる。又他人の物を貪り食する者を賤しんでいふ。

シヨボシナイ しょんぼりと、やつれた姿、淋しげなさま。例「近頃彼はシヨボシネエ風をしてをる」

ホウトクナイ 情無い。

イトシナゲニ 人の死を悔む時に使ふ語。「おいとしいことごとさります」ともいふが、「イトシナゲエ、とらう御養生が届きません」といふ。

ムジヨウナゲニ お悔みの語。農村にのみ使ふ。ムジヨウナゲエと訛つてゐる。

ゲエネエ 情けない、つれない。これは農村の語。例「あの人はゲエネエ事をいふ」

キヨガネエ 言ひ甲斐なくて氣拔けがする。例「あの人はしんから身を入れて話をしても一向こたへたらしくなく、何を言うても全くキヨガネエ」

メジヨウネガナイ 目性根が無いで見忘れ勝ちなこと。

オモイレガナイ 思ひ入れが無いで、頼みとされぬ、望を囁せられぬ。

イキハリノナイ 緊張の氣の無い。

テイタラクノネエ 爲體無い。

アキダリモナイ 物事に不足を言ひ飽く事を知らず。

イカシコモナイ 幾らもない、少い。

イタラモナイ 至らぬことといふ意。例「要らぬ事を言うたけこんな事が起つたのぢや、イタラムネエことぢや」

「イタラムネエことあ言はぬがい」

エエソモナイ 飛んでもない。弔詞には「エエソムネエ事で御座りました。とう／＼御養生が叶ひませんで

といひ、仕事を仕損じた時は「エエソムネエ、やりそこなひでござりました」といふ。

アヂモクチモナイ アヂモスッポウモナイともいひ何の味も無いこと。

カタガイイ 幸福な人をあの人は肩がいといひ、不幸な人を肩が悪いといふ。

ケツキガイイ 毛附が良い、身形のよいこと。例「あの人は近頃貯へが出来たらしく大分ケツキガヨクな

つとる」

タツペエノイイ 恰幅のよい丈夫な作りの人をいふ。

ダンベエノヨイ 平坦なる所をいふ。

クチウラガワルイ 口占が悪いで、「生きとつてこんな苦勞を見て居らうより早く冥途に行くがよい」とか言

つた悲觀的言語を發するのをクチウラワルイ人ぢやといふ。

コウセキノワルイ 人柄の悪いこと。正しくなくて人に指彈せられるやうな者。

スヂメガワルイ 癩病系の人をいふ。

ナデエガワルイ 世間に對して名目が宜しくない。

カイミヨウノナガイ 人の名の肩書の長いこと。

ガツケエノフトイ 面積の廣い。

スンガリトシタ 背丈ののび／＼とした。

ノンメリトシタ ゆとりのある態度。ユツタリトシタに同じ。

リントシタ 見識ある人を稱へる語。例「あの人は才能ありて一見識を備へた人でリントシタものぢや」

スツパトシタ 爽かなる。

クワントシタ 藝能ある人を譽める語。例「あの人は才もあり學問もあり何處に出しても恥はかぬ、クワン

トシタもんぢや」

ウカソカシタ うか／＼したる。例「何の考へもなしにウカソカシタ事は言へぬ」

ウツプタツプシタ 有り餘る、澤山にある。例「何某の家は暮し向きがよく何でもウツプタツプシタもんぢや」

ワサワサトシタ 温厚な人の形容。心置きなき言語舉動の人の形容。

ソワソワシタ そはく、舉動の落着かぬ。例「彼は仕事に身を入れていつもソワソワばかりしとる」

ゴヤゴヤシタ わづらはしい。例「そんなゴヤゴヤシタことを再々聴きたうはない」

ゾベラゾベラシタ 華奢な風采をなした人を嘲つていふ語。

ビビツタ 微小な、些細な。例「さうビビツタことはされぬ」

イキツマツタ 老齡をイキツマツタ年といふ。

ハゲコツケタ 衣類などの色褪め禿げた。

ダイノ 最も、おほいに。例「私はあれがダイノ好きぢや」「あの人のダイノ御自慢のことぢや」

ボクト 俄かに。又ボクボクとも。例「病氣がボクト悪くなつた」「事がボクボク出て来る」

キツカト きつかりと。

チント 正しく、おごそかに、几帳面に。

チャント (1)誤りて。村方ではサントといふ。例「今日はチャントやり損うた」(2)正しく、おごそかに、几帳面に、整然と。例「チャント几帳面に整理してある」。又チャッキリチャントともいふ。

デックト 恰幅よきこと。例「此の人はデックトよう肥えてをる」

ナドト なんとなく。例「彼がどんな考へをして居るか、心を引いて見ようと思つて、ナドト聞いて見た」

ベシヨリント 薄つべら。

ヌラリト 知らぬ顔をする。例「あれ程に責め廻されても平氣でヌラリトしとる」

ニヨロリト 人が物蔭から出て来る時などの様子。

ヒヨカリト 不意に現れ出るさま。

ツラノツペリト 面の皮厚し、恥知らず。例「彼は此處に来る顔は無い筈であるのに、ツラノツペリト平氣で来て話をして行つた」

ジネンホットリト 自然にぼつ／＼と。例「水の滴りも年數がたてば、ジネンホットリト石をもうがつやうに

なる」

トコトコト 易々と。

ダダクサニ 亂雑な様子。例「何も彼もダダクサニなつとる」

イチリニ ……のまゝに、……のなりに。イチリイと訛る。例「一度来たイチリイ二度と来ぬ」「約束したイチリイ今日まで影も見せぬ」

ギョウニ 物の多いこと。村方の語。

アカラサマニ 明瞭に。

ヒラブツツケニ 遠廻しにかけず差しあてて打ちつけに。

ドミコミニ 物を良否の別なく打ち込みにする。例「何たあ言はさずドミコミニ打ち込んである」

ムサンコウニ 考へなく。無謀に。例「彼はムサンコウニ金を使ふ」

チツクリンニ 逃げるが如く急ぎ足に。例「追ひかけられてチツクリンニ逃げて行つた」

シキロクニ ろく／＼に、そこ／＼に。例「彼に物を尋ねてもシキロクに返事もせぬ」。又ロクシキニともいふ。

イキナウニ 弛みなしに。例「物をしかけたなら事の済むまではイキナウニして了はねばならぬ」

トヤミナシニ 例「雨がトヤミナシニ降る」

イキスリゲエニ すれちがひに。例「何某と途中でイキスリゲエニ遇うたが、気がつかざつたものか物も言はんで通りすぎて行つた」

マツサカバチニ 眞逆様に。

ヌシガデニ 自然に。例「其儘に放りて置いたのであつたがヌシガデエ太つた」

タマダシカニ 慥かに、大切に。

ナシワヘシワニ 臺なしに。甚しく痛み損じたさま。又人をひどくこきおろすを、ナシワヘシワニこきおろすといふ。

バンバラケニ 物事のしまりなく亂れた様子。例「あのうちは宅の中を片付けてあることがなく、何時でも彼處にも此處にもバンバラケニ出し散らされてある」

トシノイキサメニ 老齡の身を持ちながら。例「あの人はトシノイキサメニ分別のないことをする人ぢや」

タダモノイ タツタモンニイともいひ、次第次第にの意。例「今あすこの防ぎに十分に手を盡さねばタダモノイ火は太る一方である」

ヤダモノイ 無茶苦茶、みだりに、やみくもに。

サカバチイ 逆さま。例「あん高えところからサカバチイ落ちたが怪我もせざつてよかつた」

トツテノケタヤウニ 例「永い病氣が此頃トツテノケタヤウニ良うなつた」

ツカノヤウニ 塚を積んだやうに堆く。ヤンヅカ(五五頁)参照。

スサマシウ 多分に、澤山に。例「これはスサマシウ頂きましたありがたうございました」

ボロクサウ 人を立場のない位迄に言ひかたづける。例「ボロクサウきめまはす」

カタウマタウ 固く全く。形容詞の時は「カテエマテエ人」等といふ。

コトコトラシウ

「自分の言行に重味をつけてコトゴトラシウ吹聴する」など。

ツラツケナウ

甚しく面あてに。例「彼は何かをその立場の無いまでにツラツケナウ言うて恥をかゝせた」
ウレツナウ 公平に。物を平等に分配せんとする時などに「どちらもうレツナウ分けませう」といふ。又ウラ

ミコイナウともいふ。

イクリカクリモナウ

突然に、だしぬけに。例「何の事もねえのにいきなり飛出して来てイクリカクリモナ

ウ打懸りて来た」

イットケムナウ 何時ともなしに。

チヨウシテ いつも定りて、常に。

ホトホトシテ ねんごろにもてなす形容。例「親切にホトホトシテ取り持つ」

サシイサイテ 指しに指して。例「サシイサイテ来たのに逢はれぬのは残念ぢや」

フナバタカマヘテ 船の出帆に臨んでゐる様子で、事に臨んで狼狽して初めて用意するの愚を笑ふ語。

ハナツンダレテ 鼻汁をダラリと垂れた、だらしない形容。

シャツチ しゃにむに、是非に。

ヒトハナ 一しきり。

ヒトベツ 人毎に。

ハイ 早く。例「ハイ行て来い」

オツケ やがて。

ウサクラ 態々。

イッサンメエ 悉皆。例「祝言に用うる品々はイッサンメエ買ひ整へて揃へる筈ぢや」

ネモクゾウ 根元から、少しも餘さず、根ぐるみ、みな。

イキツキバツタリ 行先きを定めおかす行きなりに任せおくこと。

イッコンタクリ 總てを一緒に。例「何も彼もイッコンタクリいあどめる(集める)」

オットリサシアハセ 即座に間に合ふやうに。

フネエラクチウ 府内の隅から隅まで。例「かねの草鞋はいてフネエラクチウ尋ねて廻つてもとうとう見當

り得ざつた」

イカカナンジフニチ 幾十日。例「イカカナンジフニチ経つても出来上らん」

ヒノヒルマ 日の晝間、日中。

ホッソリ 物淋しきさま。

ゾンブリ ずんぶり。例「ゾンブリ水に入れる」「日がゾンブリ暮れた」

ヤンツカ 塚のやうに。澤山に物を夥しく積立てる様子。ダンツカともいふ。

シコデコ しこたま、夥しく、澤山に。例「シコデコ悪口をついて」

セセマセ せまこましいさま。例「此子は外に出ず内にはかり居つてセセマセしとる」

ウベクベ 抜き差しして配合よくする。例「品をウベクベして平均するやうにした」

シャリムリ 無理無體に、是非に。

ノロクヘツタリ いつものべつにのろくして意氣地のない者を指していふ。
メッキシャッキ つれなく人に言ひしする。例「彼はいかつがましい男で、いつも物事に角立ててメッキシャッキ

キ言うとる」

サツサクサ 物事があれやこれやと入交れるさま、又混雜せるさま。

イツモカツモ いつもかにも同じ。

イッキゴッキ 談話などに角立てて議論がましく言ふ。例「話がイッキゴッキしとる」

イブシコフシ 物の表面に凸凹を生ず。こぶく立つ様子。

ヨガミヒジリ 歪曲したさま。イガミヒジリともいふ。

グラリガツサリ あちらにぐらぐらこちらにぐらぐらとして物に勉めぬこと。

イキバリコウバリ 根氣強く物などいふさま。例「自分の意地を通さうちうて、イキバリコウバリしやべり

立てる」

アナグリセナグリ 隅々までも搜索する。例「隅々までもアナグリセナグリ索め搜した」

ツングリマンケリ しんみりと。シンガラコンガラともいふ。例「此子は一人でツングリマンケリ遊んどる」

ツンジョウツツカ 始めから終りまで悉く。例「何事でもさうツンジョウツツカしおほせるものではねえ」

テレンパラン 辻褄の合はぬ様子。例「彼はいつもテレンパラン喋舌つてをるけれども、話がまるであてに

ならぬ」

ドツタンクサン 狼藉する者の様子。例「彼は家中をドツタンクサン言はして、手當り次第物を打ち破り亂暴

を働く」

テンドリボウドリ 我勝ちにと争つて物の取合ひをなすさま。

インツリデンツリ 出たり入つたり不揃ひな様子。

テワウザワウ 右往左往、手を替へ品を替へ。例「彼は右にも手をつけ左にも手をつけ、テワウザワウに廣

く仕事をのばしてをる」

テヤウメヤウ 手様目様。手つき目つきをして人に物をさとらせる。

アクゾウモクゾウ 罵る時に使ふ語。例「人のアクゾウモクゾウ總てをあばき出して悪しざまにのゝしる」

アクテエモクテエ 例「アクテエモクテエしとてこ言うて罵る」

ピンコシヤンコ 飛んだり跳ねたり、上つたり下つたりすること。

ノベツクレツ 猶豫すること。例「今まで急ぎ立てずにノベツクレツ時の來るのを待つた」

スツモツツ 子供などの纏れかゝる様子。

ヨツヒザツツ 寄りつ退りつ。

ホウツコボウツ 這ひつ這ひつ。足の利かぬ人が苦心して歩いて漸く着いたといふやうな時。

ウタセカハセ 物を日光にあてる時など表を裏に、又裏を表にと、數度打ち替へ打ち替へする。例「甘海苔

はウタセカハセして乾し上げねばならぬ」

ウナレゴウナレ ぐらぐらと、ふらふらと。例「彼は仕事をばきはきと勵ますに、ウナレゴウナレ日を送つ

とる」

ヤクヤク わざ／＼、殊更に。ヤカヤカともいふ。

ハスハス 辛うじて。例「ハスハス間に合うた」

スカスカ 易々と。例「スカスカ進んで行く」

セリセリ 人の群集雑沓すること。人がせるといへばその動詞。

マンマン 充分。例「今日寄り集まる人は、マンマンあつて(多くとも)三百人位のものであらう」

ドロドロ 燃料を惜気もなく火を盛んに焚く様子。

グラグラ 働かずにふらりとした様子。

ウソウソ 鼻をうごめかす形容。

ムツムツ 沈鬱したるが如く、物思はしげにはき／＼としないこと。

ネツネツ 優柔不断、ぐづ／＼として定りのつかぬ、はき／＼しない様子。例「あの人は常にネツネツして

決断のつかぬ人ぢや」

ネツソリネツソリ ゆる／＼と、念を入れて、落着いて。例「ネツソリネツソリよくしゃべり出す」

ボソボソ のろ／＼と、ぐづ／＼と。例「何をさうボソボソしとるのか、ぼそつかんでも氣象を出せ」

チブチブ ちび／＼に同じ。

チビンタマ 些少。

チンガチンガ 跛引いて歩む様子。

リュウリュウ 早くせよと促す時の語。例「精を出しリュウリュウやれ」

コビチャコビチャ 少しづつの物を度々に。

コビッチョウ 矮少なる人、又子供の卑語。

エイトウエイトウ 人の群り来るさま。例「今日は夥しい人出で、エイトウエイトウ跡が切れぬ」

チンチンバラバラ 散り散り。

アタマクンダリ 頭から、頭ごなし。例「アタマクンダリ水をかける」
「アタマクンダリ人ががみつける」

トサメエモ かりそめにも。例「人の氣を損ふやうな事をトサメエモ言ひしをしてはならぬ」

オドレノスドレノト オドレは汝の卑語。言葉を荒く言ひ争ふ様子。

シナ 汝。オシともいふ。

ワルガ 汝がといふ語の最も賤しいもの。汝はといふ時にはワリアといふ。

アゲエナ あのやうな。田舎の語。例「此ぬ人はアゲエナ事を言はるゝばな」

コゲエナ このやうな。コネエナともいふ。共に田舎の語。

ドゲエナ 農村の語でどのやうなの意、そのやうなはソネエナである。

ソシナカ それならば、そんなら。

ダルカ 誰か。

ダガ 誰が。例「是はダガ斯うしたのか」

ナシテ 何故、どうして、如何なれば。例「ナシテさういふのか」

ドウイマア 何といふまあ。ドウイは何といふである。例「此人はドウイマア烈しい人であらうか」「こらま

あドウイこつ(事)でありましたのでせうか」

ドンジョウドコソコ 何處其處、どこそこ。例「他所へ出る時はドンジョウドコソコに行くといふことを言う

て出よ」

シナ 例「さうは言うても人間ちうシナはそんなもんぢやねえ」

セシ 當人、本人。例「先日お談じになりましたことは何某へ委しく傳へて置きましたが、まだ返事が無く
て何とも分りません。一應セシに會うて聞き取りて御知らせ申上げませう」

- …ガツラ 　　がてらに同じ。例「子供の守をしガツラ向うの家までいて来た」
- …ナガシ 　　通し。例「いつも来ナガシちや」「朝も晩も通ひナガシちや」
- …グシ 　　グチともいふ。これグシ、これグチはこれと共にの意である。
- …ツケラ 　　と共に。例「今日は孫ツケラ御伺ひに出ました」
- …グクミニ 　　含みにで…のなりにの意。即ち足らんグクミニは足らぬなりに、狭いグクミ、少いグクミはそれ／＼狭いなり、少いなりである。
- …ガキニ 　　…がけに。「行きガキイ」「戻りガキイ」「何々しガキイ」といふ。
- …シコ 　　シキに同じ。…程。例「これシコ」「あれシコ」「いゝシコある」など。ナミダンシコは涙程の少量の意。
- …ハカ 　　…しか。例「これし、ハカ無い」「一つハカ無い」
- …ハナシテ 　　…ハカ、…しかに同じ。「一つハナシテ無い」は一つしか無いの意。
- …ハザミ 　　一箇年ハザミといへば隔年。
- …サネエ 　　…へ。例「何處サネエ行くのか」
- …ケ 　　…から、…故。「斯う言はむすもんぢやケ」「行て来るケ」「常が常ぢやケ、さう疑はれるのも

無理はない」

- …シタギリイニヤ 　　すれば。例「さうシタギリイニヤ事は破れてしまふ。」
- …バッヂエ 　　…けれども。田舎のみに使ふ。
- …クセエ 　　…癖に。
- …ツク 　　…儘。見んツクは見ぬまゝ、聞かんツクは聞かぬまゝ。
- …バイ 　　…ぞ。丁寧な語でない。例「あるバイ」「ありんすバイ」「でけんバイ」「行くバイ」「行かんバイ」。尙でけんバイはいかんぞの意。
- …バナ 　　バイに同じ。何れも友人又は下級の人に對していふ。例「あるバナ」
- …バデエ 　　のである。田舎の語。例「行くバデエ」「するバデエ」「言ふバデエ」
- …ツラウ 　　…たであらう。「いツラウ」「言ふツラウ」「有ツツラウ」はそれ／＼「行つたであらう」「言つたであらう」「有つたであらう」
- …コタアサレヌ 　　…しきれぬ。例「待つても待つても見えぬ。もうどうしても待ちコタアサレヌ」
- …ザツタ 　　…ざりし、…なかつた。例「分らザツタ」「せザツタ」「行かザツタ」
- …ダ 　　女子の友人間に行はれる疑問詞。…か？「來んダ」は「來ませんか」、「いたダ」は「行きましたか」「行かんダ」は「行きませんか」、「いたとダ」は「行つたのですか」、「いやダ」は「いやですか」
- …ヤ 　　(1)…か(疑問)(2)…せよ(命令)。「こんヤ」「せんヤ」は目下に對して「來れよ」「せよ」の意。
- …センデ 　　…しませんか(目下に對して)。

……ンセ ……なさい。例「あたンセ(来なさい)」「泊ランセ」「さんセ(しなさい)」
 ……ナアセンカ ……なさらぬか、田舎の語で稍卑しい。例「しナアセンカ」「食ベナアセンカ」
 ……シヤ ……シともいひ目下に對する命令形。例「あたシヤ(来なさい)」「言うて見さシヤ」「言はシヤ」
 ……ゲナ ……ださうな。例「行きましたゲナ」「済みましたゲナ」
 ……テロ ……とかと、……ちやと。例「近頃は無線電信テロちふもんが出来て…」「あの人はいつも面倒
 なことを言ふ人で此頃も又何テロかんテロ言うとする」
 ……チフ ……といふ。例「行からチフ」「食ふチフ」
 ……タナ ……のぢやないか。「斯うするタナ」は斯うするのぢやないか。
 ……シャル ……せられる。例「行とらシャル」「しシャル」「行かシャッタ」「男しが生れつシャッタ」

デョウ 丈。「おぢきデョウ」「いとこデョウ」「甥デョウ」「姪デョウ」「いもッチョウ」「おとッチョウ」
 ヤン ……さん。さまの稍下位の語。母様がタタヤンで兄様はアンヤンである。
 ションション 他家の男女兒の呼稱。この敬稱はションサマである。
 シュウ ヤゝ卑めた意に用ひる。「爺シュウ」「ばあシュウ」「かゝシュウ」といひ、又使用人の名を呼ぶに「辨
 シュウ」「貞シュウ」「梅シュウ」「松シュウ」などといふ。
 シ 衆、達。ヤゝ敬意を含む。「お役人シ」「子供シ」「男シ」「女シ」など。又「城下シ」といへば田舎の人が
 城下の人を敬して言つた語。
 ソレエ 者等、奴等。武家時代には「町人のソレエ」「百姓んソレエが」などと言ひ、又いたづらな子供を「餓
 鬼のソレエが」と言ふ。
 ガキトウサレ 腕白小僧を貶して言ふ俗語。
 カツテエサレ 癩患者。又人を悪罵する語。
 ウツカリセン うつかりしてゐる人を罵る語。
 オナ 女を罵る時の野卑語。
 メナ メナンコ、メナハチ等いづれも女を輕視していふ語。

シャツ 彼奴。又シャツタチともいふ。目下を言ひなす語。

コラ 下位の者、妻などを呼ぶ語。

ネヤ ねえ。田舎の語。「さうしてネヤ」「ネヤさうぢやらう」など。

ノウヤ ねえ。下位の者に對していふ。例「あんノウヤ」「さうしてノウヤ」

ナスエエ 目下の人に對してねえといふ時。「さうしてナスエエ」は「さうしてねえ」に當る。

ナアヨ ねえ。あのねえを「アンナア」「アンナアヨ」等といふ。

ネエシ ねえの少し丁寧なもの。「あんネエシ」「さうしてネエシ」など。

ナアムシ ねえのやゝ丁寧なもの。「さうしてナアムシ」は「さうしてですなあ」「さうぢやナアムシ」は「さうですなあ」

シイ はい。貴人に應へる返辭。セエともいふ。

ヘイ 呼ばれたるに應へる聲。

アア 親しき友人に對して應ふる聲。

ンンネ いゝえ。下位の人に對して。

ヤイヤ 否、下位の人に對する打消しの語。

イヤンコツチャ いやですわ。

ナンノバチイ 自分の思ひがけぬ悪事を働いたかのやうに人から浴びせかけられた時、「何の罰にそんな事をしようか」と言ひ斥ける語。

カッチヨウ

人からかはれた時に酬いるに「えゝこんカッチヨウはまあ」といひ、物を仕損じた時などに「えゝカッチヨウ」といふ。

シリクラハ 人と争つて罵る時の結末の語。

オトホドホシイ 久しく會はなかつた人に圖らずも出くはした場合、「どうもお違々しいことでござりました。お別れしましてから恰度十年になります」などいふ。

イテキマス 行つて參ります。田舎では行つて来るをイタチクルと言ふ。

オイザトナラシャリマセ 人の家を辭する時に言ふ語。さよならに當る。下位の者に對してはオイザトヤ。

ザットエエ 農村の語。他家を辭する語、さようならに當る。

オナブリモウシタ 品物を贈る時の語。「是は粗相な物を差上げてオナブリモウシましたやうな物でありませけれども云々」

ニラノハ 人に物を贈るに輕少な品をといふのを「ほんのニラノハでありますけれども」と言つて差出す。

オゴツツオウ 丁重のあまり御を重ねていふ。御苦勞もオゴクラウといふ。

サシツケ 早速。例「サシツケテ申上ぐるも失禮でござりますが」

オクレナサリマセ 下さりませを丁寧に言ふ時の語。

ナラシャリマス (1)お出でなされてゐますの敬語。ならせられますに同じ。(2)有りますの敬語。

ケエ 來いの轉。田舎の語。

シヤエン 爲し能はぬ、爲し得ぬ。

オヨ あゝ。「オヨきつよ」はあゝ疲れた。
 オヨオヨ 少しく物に驚いた時。例「オヨオヨまあ驚きました」
 エエモ 怒り氣の時、面倒くさく思ふ時。例「エエモまあ氣の利かぬ人ぢや」「エエモ面倒し」
 ヤイヤヤイヤ 物事にしくじつた時發する歎聲。
 ハアレ 不思議と思ふ時に發する語。ハアレなあむし、ハアレまあ等。
 アレサテ 人の言を否認する場合に發する。例「アレサテさう言はれましても」
 アアレ 人の言動を否定する時「アアレそれはさうぢやないがなあ」等といふ。
 ンダ 女のみを使ふ語。物に驚いた時や相手の言葉を強く否認する時など。例「ンダンダ」「ンダも嫌ぞ」「ンダア、そんなこつがあるのですか」
 バアイヤ 子供が人をなぶり又辱しめる時にいふ。
 スト 子供や犬猫を叱り飛ばす時に使ふ卑しい語。
 クソ 「是位の事が何か」といふやうな氣持。「クソ遣れ」「えゝクソ」などいふ。
 ヤッサンコイ 物を運ぶ時に發する掛聲。ヤッサンコイともいふ。
 チャア 嬰兒に對して聲をかける時の語。

イハデナコテエ 言はずに済まされるか。「さう言はんでもいゝぢやねえや」と言はれて「イハデナコテエ、黙つて済められますか」等といふ。
 イハサレニ ユハサレニとも。…故に、…のために。例「それユハサレニこんな業もかかねばならぬことになつた」
 サエン (1)食物のうまくない。(2)人の智慮の足らぬ。(3)サエタランは面白くない。又サエルこつちやねえともいふ。
 (1)これは味の付け方が悪くてほんにサエン。
 (2)あの人はほんにサエン人ぢや。
 ノサン 堪へられぬ。例「かう雨ばかり降られてはノサン」「さう餘計なことを持ちかけられてはノシキラヌ」
 コタヘン 飽き果てる。例「又も厄介なことを言うて來たがほんにコタヘンのう」。コタヘタといへば感じるの意で、「彼は度々の不幸で身にコタヘタであらう」など言ふ。
 シオホサヌ 爲し遂げ得られぬ。
 カナハレヌ 勝たれぬ、敵せられぬ。例「何といつてもあれにはカナハレヌ」
 ウテヤアヌ ウテアハヌの音便、相手にせぬ。

アバカヌ 納めきらぬ。例「心配事が多くて胸にアバカヌ」。「容器が小さくて品がアバキキラヌ」
ハバカラン 容器は小さく品は大きくて入りきらぬこと。

ヤスカラヌ 只ならず、普通でない。

ヤハウユカン 和かなことではゆかぬ。例「彼はヤハウユカン。もつと手厳しくやれ」

ナンデカサウラフヤラ 何でか候やら、何事をするのやら。例「彼が言ふことはナンデカサウラフヤラあてにはされぬ」

トンボウモネエ 飛んでもない。

トツケモネエ とほうもない、飛んでもない、甚しい。例「トツケムネエ重い品ぢや」

ガハクモネエ 無駄な。例「彼の力でとても遂げられぬことは分つたことであるのに、ガハクモネエことをする」

ソノリヲエヌ 理解に苦しむ、不穩當な。

ノリダチノセヌ はきくせぬ、意氣地のない、心だての鈍い、進取の氣象に乏しい。例「彼はノリダチノセヌ男で、物を頼んでもぐづぐづとしてとんと捌けかぬ」

イロカニミセヌ 内に思ひあるも色に現はさぬ。

カゲニオカレヌ 隅に置かれぬ。傑出した藝能のあることなどにいふ。例「この人はよい腕前を持つて居る。なか／＼カゲニハオカレヌ」

キユウバノハズニアハヌ 急用の時の間にあはぬ。

マヒョウシニアハヌ 即時の用に立たぬ。

トツテモツカレヌ 寄り付けぬ。例「ひどい権幕でなか／＼トツテモツカレヌ」

トリツキハノナイ 取りつくべきすがの無い。ハはよすが、縁。例「あの人はぶつきらぼうで何を言つてもトリツキハノナイぢや」

ヘモカマサヌ 何のことも無かつたといふ時にいふ語。「何某はお宅に御禮に出ましたか」といふ問に對して「はい、お禮どころかヘモカマシャしませぬ」と答へる。

ホウジョウニアカン 埒の明かぬ。

ヒョウニアハヌ 柄にあはぬ、體にあはぬ。比較にならぬ。

シノウガツカヌ 納めきらぬ、入れきらぬ、始末しきらぬ、片付けきらぬ。例「シノウのならんしと(程)品が集つた」

セイトハトドカヌ 制馭し能はぬ。

テシキイオヨバナ 手こなしにならぬ。

シリクチノモトウラヌ 辻褄合はぬ。例「彼は何を言ふやらシリクチノモトウラヌ事ばかり言うとする」

ホケガアガラヌ ホケは湯氣。成功し得ぬの意。

ジコツガワカラヌ 事の起りがわからぬ。

ゼンキンニハカヘラレヌ 錢金には代へられぬ。

シロガツツカヌ 大本が續かぬ。例「さう傲りが頂上してはシロガツツカヌ」

チワトモセン ちくともせん、ヒョウトモセンなども言ひ物に動ぜぬ様子。例「彼は膽力のある人で岩が崩れ掛つてもチワトモセヌ」

ビロリトモセヌ 少しの影だにも見せぬ。

カゲノゾキモセヌ 顔を見せぬ。例「何某は来て挨拶をせにやならん筈ぢやのに、てんでカゲノゾキモセヌ」

ヒトクハヘモセヌ 一衝へもせぬ、闘つてもかなはぬ。例「向ふは力は強しこちらは力が弱いからヒトクハヘモセヌ」

ミミノスツタリニモイレヌ 耳をかさぬ。例「彼には口の酸くなるまで繰返して懇々と言うて見たけどん、

ハナカライキモツカヌ 人に答へをせず黙然としてゐる。例「彼は何某から眞壺(一五二頁参照)を突かれ理詰

めに逢うてもハナカライキモツカヌ」

スノカハノメニモアハヌ ずの皮の目にも會はぬで、何等益するところは無かつたの意。

クモクララモネエ 物事を苦にせぬ人の様子。クッシンクフ(三〇頁参照)。

コンキモクチモネエ いくら根氣をつめても詮なし。

シヤウモオヨウモナイ 何とも仕様もない。

アテエモコテエモナラヌ 當てにならぬ。

オトモカタモネエ 音づれのなきこと。

オトモコトモネエ 返事を待つてゐても音信の無い。

マモトンバモナイ 一寸の間もない。

ヤモテッポウモナイ 待て暫しのない。例「彼は一旦言ひ出したことはヤモテッポウモナイ直ちに其通りやつ

てゆからとする」

ノベモシヤシヤリモナイ 一寸の延びをも與へぬ。例「彼は強情でどこまでも我意を通し、少しのノベモシヤ

シヤリモナイ」

イカトモタコトモシレヌ のらくらして何とも判断のつけられぬ者、叛服常なくしてどちらとも判ぜられぬ

者をいふ。例「甲乙どちらが良いといふのか、どうも信用のならぬ男でイカトモタコトモシレヌ」

ユダンモクチモナラヌ 片時も油断ならぬ。

テモハモツカヌ 手のつけやうのないこと。

ナリモコッポウモカモハヌ 身なりやふうを意とせず是を構はぬ。

テカズラミテクレエ 此遣り口を見てくれよ。

ヘヲカメ 喧嘩をなしての語に「さえん事(六九頁参照)をぬかすな、黙つとつてヘヲカメ」と罵る。

メデミテクチデイヘ 自分のした事に就いて、非難を入られたのを憤り「俺が今迄どんな事をして居つた

かメデミテクチデイヘ」と言つて其人をあべこべにやりこめる。

ニアウタクソヲタレトレ ぶざはしからざる事をせず分限相應なことをしてあげ。

デケルゲドウチャネエ よい奴ではない。

ツキノジフゴンチハヤミソ 一月のうち十五日間は暗夜であるぞ、いつかこの仇を取るぞとて、喧嘩した別れがけに言ひ放つ捨てことば。

ソコヨコイフコトハチイ かれこれ心配するに及ばぬ。例「病氣がさう進んで居るではなし、まだソココ

イフコトハネエ」

ナンテロカテロ 何とかか何とか。…テロ(六四頁)参照。

ナンゴツカゴツ 何事彼事で祝祭儀式などの数々のことをいふ。

ケエニモハレエニモ 藪にも晴にもで、よきにもわるきにも。例「某のうちはケエニモハレエニモたつた一

人の息子である」ケエニモハレエニモ一つはか(一つしか)残つて居らぬ」

トツツマイツ 取つつ置いつ思案する様子。例「物を調べるのに思案にくれて極りがつきかねてトツツマイツ裏を見表を見していつ迄もぐづ／＼してゐる」

カテツマゼツ 物事の幅濶するさま。例「明朝八時までには仕上げねばならぬ仕事があるのに、何某の旅立ち

を見送らねばならず、又今晚は何々の會があつてはづされぬ。まあ何れを先にしようか、實にカテツマゼ

ツなことである」

トリカケヒロヒカケ とりかけひろひかけで、あれやこれや数々の用件を言ひつけること。

シタリヒイタリ あれをしたりこれをしたり。

カケタリナゲタリ 何れが勝れりとも劣れりとも言ひ難し、兄たりがたく弟たりがたし。

タレカブリヒリカブリ 便通などの縮りなくしかぶること。

ヤルカトルカ のるかそるか、事が成立つか成立たぬか。病氣の危急に迫つたのを、ヤルカトルカの境とい

ふ。

ヤツタカミタカ 一か八か、のるかそるか。事が當るか否か運任せにする意。

スツタカモツタカ ごとく。例「あすこはやかましい家の中で、家内の人がいつもスツタカモツタカ言うて

をる」

マンガマレカ 萬が稀れかで、多くの事の中に稀れにあつたことをいふ。

ミチモハタモ 道も端も、何處でも。

ヤタモヘエタモ 彌太も平太も、どんな人でも。

ナイテモカイテモ 泣いても搔いても、忍んでもの意。例「それはしにくうもあらうけどん、ナイテモ

カイテモそれだけは是非せにや濟まん」

マテドコガレド 人を待ち心を焦せど來ることの遅きをいふ。

ツツカケツツカケ 引つきりなしに。

セエヒンカラヒン 疲れ切つたこと。例「今日は暑いのに朝早くから働いてセエヒンカラヒンになつた」

ヒトキリヒトハズミ 生死の分れる所、勝敗の決する所などにいふ。死の直前をたゞヒトキリともいふ。

スツトコセエ 成るがまゝに進ませる行く。

ホチャンチン 事の崩潰すること、物の形の全く無くなること。

チンピンカンピン 些少の物をいふ。

ヒラヘイトウ 平等なこと。

ヒナンヒヤウナン 人のした事に批評を入れ難癖を付ける。

マゴコマツダイ 孫子末代。マンガマツダイ(萬劫末代)ともいふ。

ツイデンコボシ 序に。

ドロコンニヤク 泥酔した人のぶざまを泥蕪蕪に比す。

ヤノセメ 矢の責めで、急ぎ迫つて責め立てる、矢の催促。

ヨノイネ 夜安眠すること。例「ゆふべは蚤が多くてヨノイネがならざつた」

イキノウツシ 容貌や姿のよく似た。例「あの娘は母親とほんのイキノウツシぢや」

アマンタセウ 赤の他人。

ウントウテントウ 天道任せ、自然の成行きに任すこと。

ドドンツマリ とゞのつまり、物事の終極。

スツカリカリ 重味がなくなつたこと。

ヤラズトツタリ 吝嗇家、人から物を貰ふことのみ考へて人に物をやらうとしない。

ネエフクナカラ 空腹。例「今日は遠い道を急いで歸つて来て晝飯も食べずにネエフクナカラになつた」

メノハナンサキ 目の先、目の眞前。

ミノモンチャク 身の置所なきまでにいらだつ、心の焦れる如き思ひをなす。

ナラヒダシノヌクヌク 縄かに習ひ得たことを直ちに人に語る。

イットキノギロギロ 一時の華かさで後に残らぬこと。例「今彼は派手やかにやつてをるけれども、ほんのイ

ットキノギロギロであつて……」

トキノポリポリ 何とでも其時の都合に任せておく。例「よい時もあらうし悪い時もあらうし、どちらにな

つてもトキノポリポリぢや」

テンゴウノカハ 易々と成就する。例「何、それ位の事はテンゴウノカハぢや」

サンボウミツカド 三方三角で、どこもかも全く。

ツマリニジフクンチ 詰り二十九日は即ち十二月の二十九日。結局はの意。例「あのやうに奢りが過ぎては

ツマリニジフクンチが来て、苦しまねばならぬことになる」

カゲンホウコウ 蔭の奉公、縁の下の力持。裏面で骨を折つても人は其功を知らぬをいふ。

タヤスイホウソウ 容易い疱瘡で仕事のたやすく出来ること。物を頼まれ、「それは何よりタヤスイホウソウ

ウです、早速お世話致します」等といふ。

タダノトナリ 至つて安い値段。

クシガキスヌギ 零落した人の何とかして家を保たせようとするが躓き勝ちな様子を、串柿をすぬぎとると

細るさまに譬へていふ。

トウヂョウナガメ 何もせず只あちらこちら眺め廻して呆然としてゐること。例「彼は怠け者で何も働かずに

あちらこちらとトウヂョウナガメはつかして目を送つとる」

ヒトノミミクチゴヤシ 人の耳口肥し。人の物笑ひの種となる。

シニャクサレルカラダ 死ねば腐れる體。子供を叱るに「仕事は山のやうにあるのに無精づいて言ひつけてやる事をそれ／＼にせぬ。シニャクサレルカラダを持つとつてからに……」などと言ふ。

ゾウノクソホド 物の夥多なること。

コノミカヤノミタベテモ 飢えても。例「たとひコノミカヤノミタベル色があつても、正しい道は踏んで行かねばならぬ」

クチハクサツテモ 断じて物言はぬ様。例「彼は斯々の挨拶をせねば濟まぬのに、クチハクサツテモとう／＼一言も言はざつた」

カベニウマノリカケテ 事の急に迫つたのに、後れ馳せに手を着けんとする。

シリハサンゲンニトバシテ 尻は三間に飛ばして。急いで行く様子。例「彼は早く行かうばかりにシリハサンゲンニトバシテ行つた」

ピンバフミセハル 人に金の無心を言はれたりせぬやうに、蓄財無いらしく豫め装ひおくことを貧乏店を張るといひ、人に卑しめられる。

デアフタガイングワ 出會うたが因果。

アトノカラスガサキニナル あとの雁が先になるに同じく後進が先輩を凌駕すること。

コエブネニマクヲハル 肥船に暮を張つても其臭氣は蔽ふべくもない。見かけのみ取締つても駄目。

コブネニニガスギル 小舟に荷が過ぎる、即ち身に應せぬ。

ソコデテアラフテウツバチ 其處で手洗ふ手水鉢で、そこでは何とか手が有らうぞといふ時戯れていふ。

ヨスギテトリガウタフ 此品でも宜しいでせうかと言はれて「それでいゝどころではありません、ヨスギテトリガウタヒマス」と答へる。

カタカライキヲツク 病人の苦しうに息を吐く様子。

ホッシンノイキヲツイタ 心配事の安堵に至りし様子。

アブツタウヘヘタタク 焙つた上に叩く。被害者から言へば泣面に蜂。例「兼々容易ならぬ世話をかけながら又其上に飛んだ迷惑をかけて、全くアブツタウヘニタカレルとはこの事ぢや」

ヒトノナナケラサゲル 人の腹の奥を試み探る。

クハヌハラサゲラレル 痛くない腹を探られる。例「自分はかけ暗い處はちつとも無いのに疑はしさうなことを言ひかけられ、クハヌハラサゲラレテこんな氣色の悪い事は無い」

マブリヤカイトル 守はかいとる。やり損ひせず、無事なるを得た場合にいふ。即ち神様のお守りであつたとの意。

ニンギョウイラクトル 人魚を食つて居る。人魚を食へば歳をとらぬといふ俗説あり、年齢にふさはしからず若い人を稱した句。

タツシタラウトル 總ての物が満足に揃つてゐる。

コレンセキチャ 之が關ぢや、これより上のことは無い。セキは最高最上の意。

フカガクタ 衣服の縫目の綻びたるを鱗が食うたと戯れていふ。

クヂラトツタ

54。

テガキレテノク

寺は檀中の富者が死亡すればその爲に不時の収入がある。之を、「あの寺は鯨を取つたぞ」と

オホケナホカブリヂヤッタ

大なる考へ違ひ。例「必ず成就するものと考へてゐたが事の間違ひで成就に至

オンマジルシガデテキタ

癖ある人の其癖の起るをいふ。

ボノクボガスイタ

衰弱した人をさしていふ。

イトシイチャダカレウチフ

人が親切に言へば鐵面皮にもまた其上に厄介なことを要求する。

チンチャカン

チンと言へばカンと答へる。機轉の利いたこと。例「あの人に物事をして貰はうと思へばチ

ンチャカン

で目の覺めたことをする」

ウチクタイツパイ

打ち食つた一杯で、宵越しの金を使はぬ。例「あの方はウチクタイツパイで、あとの

タテツケサンバイ

宴席で遅參の客に對し「貴方は甚く遅かつた、さあタテツケ三杯ぢや」とて酒を強ひる。

イチチヨウロウソク

一丁蠟燭、一帳羅に同じ。唯一枚しか所持せぬ晴着。

カネノサウレン

金銀を湯水のやうに冗費することを金の葬禮をするといふ。

コンキノハチマキ

根氣の上の根氣。

カラノヨコマチ

唐の横町。得難い品物を探し需める人をからかつて「さう搜されても無いなら唐の横町へ

でも行つて搜してごらんさい」等いふ。

シロイヲノキモ 白魚の肝。小膽の人を嘲つて、白魚の肝のやうだといふ。

コジキノシリノス

乞食の尻の孔。貪慾飽くことなき人を卑めていふ。

マンノワルサヤヘノクササ

運廻りの悪い時には人の尻をひつた突端トツバに行合はせて其臭を嗅ぐ。

ドッチムイテウマレタカ

何方を向いて生れたか。例「此子はドッチムイテウマレタカ。誠に仕合せのよい子

ぢや」

ヨメガシウト

嫁が姑。嫁が強くて常に舅姑を凌いで權力を振ふ家庭。

カカガトト

鼻が父で鼻天下の意。

メイヌツラノライヌ

面容はやさしく見えて心根の拗けた人。

ガシガシピンボウ

忙しうにがし／＼言つて日々働いて居りながらいつも貧乏であること。(二七頁参照)

ゾロゾロピンボウ

目には立たぬが徐々に貧乏に陥つて行くこと。

ミトホシノホウイン

見通しの法印で、先を見通してゐる人のこと。例「貴方がさう先までも見抜いてゐる

やうに言はれても、ミトホシノホウインぢやあるまいし果してどうなるか今から確とした事が言はれるか」

クナシノクエミサン

苦なしの九右衛門さん、即ち物を苦にせぬ氣樂な人。

テンノビ

夜中の火災の強烈にして炎焰天に沖するをいふ。例「今夜の火事は盛な勢で火の手が高く上りま

るでテンノビぢや」

ケチノオドリ

對馬鷄ケチ知村住吉神社の祭禮には近郷十數ヶ村の人が集り、踊りを奉納するが此の日は雜沓を

句 用 慣

句 用 慣

極める。故に衆人群集して雑沓することを鶏知の蹄といふ。又湯の沸騰するさまをいふ。

トキニアヤコソダイサンジ 時世に遇へばこそ大参事、即ち運よく時世にあへばこそ大参事にもなれる。時代代に會ふ者こそ幸福である。

サンキングコウカツテシダイ 對馬侯は交通不便の爲参勤の期日が定められてゐず参勤下向は勝手次第であつた。それから「いつでもそちらの都合のよい時來れよ」を戯れてかく言ふ。

セガキノハタトリ 陰曆七月施餓鬼會の時に寺から壇徒へ旗を頒つ。此日寺で我後れじと争つて旗を受けて歸り佛前に供へるが、その雑沓すること甚しい。故に騒々しいことを「施餓鬼の旗取り」といふ。

ナナシノトウザブラウ 子供同志の間で名を問はれて「俺は知らぬ」といへば「名無しの藤三郎ぢや」と言つてからかふ。

ヒトマネコマネカラスノコマネ 子供が友の人真似をするのを「人真似小真似の小真似」といふ。

ハラカキヤフクトウサケノミヤエビカネ 腹搔けば河豚と、酒飲めば鰻かね。相手が怒つた時に斯く言つてそのふくれた頬や怒りの色を嘲る。

ヤセウマホイドウドウ 瘠馬を見て子供の唱へる語。

フクトクピンボウサイハヒ 竹の節を數へるに一の節を福、二の節を徳、三の節を貧乏、四の節を幸として數へ、貧乏の節に當らぬ節より下を截る。

オヨヒヤコヒヤ、サルノキモンカッテキヨウ オヨは嗚呼。おゝ冷や小冷や猿の着物借りて着よう。寒中に子供の戯れ唱へる語。

ムカシジツトアッタゲナラ 昔話の冒頭發語。

ムカシコンボンジダイ 古いことを昔根本時代といふ。

イマゲエンコッチャネエ 今が世の事で無い、即ち今時代の事ではない。

イシクギノヤウナ 食物の硬いのをいふ。

イトコチヨウノヤウニ 誰にでも従兄弟でもあるかのやうに易々と應接するさま。

セングワンメモチノヤウニ 千貫匁持ちのやうに、自分を大金持かの如く誇らしく言ふ。

アガリカヒゴノヤウ 人の病み抜いて茶色になつたをいふ。蠶の繭を作らうとする頃ほひがあがりかひごである。

ソプロノヤウニ ソプロは藪などに叢生する雜草でその芒は着物に附着し易い。その芒の容易に除きがいことから、人の身邊に附纏ひ離れようとせぬを是に例へる。

ウシノヲキッタヤウニ とだへること。例「何某さんは朝に晩に來てよく話をして居られたが、此頃はウ

シノヲキッタヤウニまるで影も見せられぬ」

スヌイデトツタヤウニ 素抜いで取つたやうにで瘡せこけた人をいふ。

イチマイガミヘゲヤウニ 病氣の徐々に快方向ふ様子。

オホタケウチワツタヤウナ 大竹割つたやうに少しも曲つたことなくわつさりした人。

アメフリノニハトリノヤウニ しょんぼりとやつれた姿。

ネズミノヒイテユクヤウニ 物を人の氣のつかぬやうこそく／＼と一つづつ引いて取去ること。

ネズミノシホシリニイッタヤウ 鼠の鹽汁に入つたやう。みすぼらしい姿。

シンジラメノハフヤウナ 仕事の遅々として進まぬを、「何のさまか、死頭シジツメの匍ふやうなことをして」と言つ

て叱り付ける。

ナツグソノタギルヤウニ 不平をならして口の中でぶつ／＼言ふのを、夏蕪なつゝのたぎるやうだと言つて罵る。

バカノテッポウハナシヤウニ 驚くこと。馬鹿の鐵砲放したやう。

カサアタマカキチラカシヤウニ 瘡頭搔き散らかしたやう。家の中など片付けをせず雜然とした様子。

イチモンノカネヲワツテツカフ 一文の金を割つて使ふやうな細い活計をなす。

キキンドシノサル 憔悴した人を嘲つて飢饉年の猿といふ。例「あの人は瘡せこつけて丸でキキンドシノサ

ルぢや」

バカノトリカヒ 鳥飼ひの爲に時間を浪費するを嘲つていふ。

チヨウニンノウマノリ 町人の馬乗りで、危いの意。

オツキサマノコトツケ 宛てにならぬ。例「あの人に物を頼んでも全くオツキサマノコトツケで返事もくれ

ず、てんであてにならぬ」

ミイラトリノミイラ 何も残らぬ。

ガンギトスネオシ 権力ある人と争つても到底かなはぬ。

セングワンノカタニタコノカサイチマイ 返済すべき千貫のかはりに筒笠一枚を返す。筒笠をタコノカサと

いふ。千分の一にもあたらぬ返金をいふ。カタは抵當ではない。

ヤンメニクビ 脂目に杖。泣面に蜂。

ヨワリメノリヨウゲ リヨウゲは靈怪。弱り目に祟り目。

トリモチデウマサス 物事を容易くいひなして人を瞞着せんとする様子。

ハルノヒニヒサシカケル 春の日に庇かける。のんきな人を評した語。

ネバシワタデクビシメル 眞綿で首をしめるやうにじわ／＼と言ひつめる。

カシノキキッタアトニダラノキガハエル 賢人には不肖の子が生れる。

テマヘオリカミ 自分免許に同じ。自分の力を人に吹聴する。

ソシリソシリヨメツカフ 譏り／＼嫁使ふ。

シホカラクハンサキニミツノム 鹽辛食はん先に水飲む。人間はいつつらい事に遭遇するかも計り難いから

平素の用意が肝要であるの意。

ナハノナイトキノカツラ 繩の無い時は葛で代用し得る。人も俊材を求め得ぬ時は劣材を以て之に充てると

の意。

トギチンニミラサガヌ 鈍刀を幾度磨いても鋭刀にはならず磨き質のみ嵩んで遂には其身をも失ふこととな

る。即ち勞して功なし。

ヌストツカマヘテナハナヒダヌ 盗人捕へて繩縛ひ出すで、火急の間にあはぬこと。

イチモンオシミノヒヤクシラス 一文惜しみの百知らず。目先の慾に迷はされて、先の大きな利益を失する。

キヨウモンノサニコソデキル 着よう物の無さに小袖着る。不斷着が無いので小袖の着物を着る。

アマグリヒガキ 雨栗日柿と言つて栗は雨の多い年によく出来、柿は旱の年によく出来る。

シハスノジュリグチ ジュリは泥濘、グチは東風。陰曆十二月下旬頃はよく小雨が降り續いて道路は泥濘で

ある。それをいふ。

ニハチゲワツノテノヒラガヘシ 陰曆二月と八月とは掌を返すが如くに風向きが變る。

ナツノユハウシノシタカラナメテモワク 夏の湯は牛の舌から甜めても沸く、即ち早く沸き立つものである

との意。

コトシヤジフサンツキナヘカマサヘコモツ 今年は十三月鍋釜さへ手持つて、閏年には子供がよく生れると

いふこと。即ち同じ月が重なるより斯くは言ふ。

ヤキミソクヘバコンキウスル 焼味噌食へば困窮する。金箔を延べる傍で味噌を焼けば箔が延びぬといふ

が、それを財物の延びぬに譬へて斯く言ふと言はれてゐる。

フムトコロクボリ 數人相寄つて事を爲せばその宿先に當る者は目に立たぬ失費をなすものだといふことを

踏む所窪りといふ。

シホハカツテモテナメヨ 鹽量つても手舐めよ。人の仕事の手助をするにも口錢なり報酬なりを取つてせ

よ。

ワガコトホメルモノハイチノバカ 自分のした事を吹聴したり子供の自慢をしたりするのは愚の極である。

カハイイコハボウデソダテヨ 寵兒には愛に溺れず棒を持った氣持で嚴格に育てよ。

ハヤバリヤクソフム 早張れば糞踏む、慎重に事に當らねば失敗を招くとの戒め。

タツタラオヤデモツカヘ 立つた者があれば親でも使へ。遊惰の人なからしめよとの意。

アフタトキノカサヌケ 人の馳走にでもあへば遠慮なく飽くまで食べる。例「某はアフタトキノカサヌケで遠慮氣兼ねよく食べる」

コケタリヤウマノクソデモツカム 轉んでも只は起きぬ畜畜家の動作を評した語。

ダイミヨウトセノハタハヨケヨ 大名と瀬の端(荒波に浚はれるおそれあり)は避けよで、危き所は避けるに限る。

アキノユフヤケカマヲトゲ 秋は夕焼の翌日は天氣であるから鎌を研いで樵に行く用意をしておけ。

ナヒカニヤマノシフガキ 名引かねば山の澁柿。暗に人の非難をして若しその人が怒れば「私は御前の名を引いて言ひましたか。名引かにや山澁柿ぢや」と抗辯する。

ゲスノチエハアトヘマハル 下司の智慧はあとへ廻る、即ち愚者の智慧は時の用をなさぬ。

ヌストスリヤテサシダス 盗みをすれば他人は言はずとも自ら其露顯の緒を作るものだ。

ダイミヨウハクラヲオイトサンネン 大名は氣の長いもので鞍を置いて乗るまでに三年かゝる。氣長の人を評した語。

ヒトリゴハセバセドトホラヌ 獨り子は狭瀬戸通らぬ。獨り子は親に大切に育てられてゐるから危険な狭瀬

戸の間などは通らぬ。

オウオウニゼニイラス 子供にせがまれても應々とさへ答へておけば口上のみで金錢を要せず。

ココロイソゲバナベタギラス 心急げば鍋滾らす。心忙しい時はしてゐる事が何となく進まぬやうで氣が益

益せく。

タツタニンギョウウネガセヌ 人形の立つたのは値がせぬ。人も立つた儘の者は價值が無いぞ。

カクチヨウマンイシャイラス 膈や腹滿の疾は不治のものである。

カシヨハヌウルシニハマケヌ カシヨフとは觸れること。さはらぬ漆には負けぬ。人も權門に入つて事を爲

さうなどとすると却つて蹉跌を招いたりする。

ムイテクルイヌノツラハウタレヌ 向いて来る犬の面は打たれぬ。憐みを乞うて来る人を追拂ふわけにはゆかぬ。

ニゲタイヲハフトイ 逃げた魚は太い。子を失つた親が其子を特に優れた者のやうに言ふに譬へる。

ガンガトベバハトモトフ 雁が飛べば鳩も亦之を見て飛ぶ。人眞似するの喩。

ガキモニンゼイ 俄鬼も人勢。役に立たぬ者を集めても人勢を増すことになる。

カレキモイシヨウ 馬子にも衣裳に同じ。「はづくひも衣裳」ともいふ。管杖とは長い丸太材を地に打込み衣類を乾かすに用ゐる。

クサレナハモトリドコ 腐れ繩も取り所。魯鈍な男でも何か取り柄がある。

イシデテツメル 融通の利かぬ堅いことのみを言ふ人を石で手詰めたやうだといふ。

アフキハヤブツテヘタトハイハレル 扇は破つて下手とは言はれる。扇の破れる程一心に舞つても人は賞めることはせずあらのみ言ひたてるものだ。

バカノオホモンクラヒ 馬鹿の大食。

メノテンハクチニアル 目の點は口にある。眠い時物を食べ目覺める。點は灸治の語。

ワガホトケタフト 僧徒はおのれの寺の本尊のみを尊崇する。おのれのみを立てて他人の言を疎かにするを

言ふ。

コウヤノアサツテコトバ 紺屋は引受けた仕事を約束の期日に出来さず、明後日は出来し上げますとて

引延ばす。

イヘオゴリノソトスボリ 内辨慶。

オヤハオモヘバコハクソタレル 親は思へば子は養われるで、親の思ひやりを無にする子。

ヤブレナベニカゲフタ 破鍋に缺蓋。愚人の妻にはそれに相應した落ち目の者がある。

オウタコヨリダイタコ 負うた子より抱いた子。遠い所に離れた子より身近に居る者を寵愛する。

カヒモノハヌシニル 飼ひ物は主に似る。家内の者の舉動は主人のそれに似る。

オモヒガカイニナル 人の爲を思つてした事が却つて害となること。ガイニナルと濁つては言はぬ。

タギリユニミツヲサス 沸り湯に水を差す。騒擾の俄かに靜まること。例「長い間騒しい事件だつたが何某

の一言でタギリユニミツヲサシタやうに忽ちに靜つた」

コマウナギハアトカラ 鰻中の好味たる胡摩鰻は最後に出るもの、人間も最終に至つて良い人が出る。宴席

で藝を求められた時など「胡摩鰻はあとからの譬へもあれば、私如き名人はまだ後からにませう」と戯れ

る遁辭。

イハヒハノベル 祝事は延ぶるを善しとする。

ニクムガハンジョウ 人に憎まれるやうな者が却つて繁昌する。

ヨハマジコツ 世は祝事。ヨハマジナヒともいひ、世の中は祝事の爲禍を轉じて福を得ることもあるから、

強ちに捨てられぬものは祝事である。

ネコバカボウズニヒフキダケ 猫馬鹿坊主とは教養なき僧を嘲つた語。火吹竹で火を起す他能なしの意。

ニンゲントイレモノハアリアハセシダイ 人間と容れ物は有合せ次第で使ひ合はされる。

オヤノワルイノトミツノワルイノハシマツガツカヌ 親の悪いのと味噌の悪いのは始末がつかぬ。

クチハハチジフシリハベタベタ 口は八十尻はべたべた。口ではうまい事を喋舌つても尻にはべたべたと糞

をつけてゐる。言行相反せる者を評した語。

キャラモタカネバヘモヒラス 何の香も臭もなし、可もなく不可もなき凡人。例「彼はキャラモタカネバヘモ

ヒラズほんのお人善しである」

キンリサマノハタケ 怠つて肥料を施さぬ畠を禁裡様の畠といふ。

アブナウモクサウモナイトノサマノセツチン 危くも臭くもない殿様の雪隠。殿様の雪隠のやうに危険性が

なく大丈夫だの意。

キノドクハカツラ 人より「それは氣の毒な」といはれて「木の毒は蔓」と戯れ應ずる。

サンバチガサンヨウ 三八が算用。三八は愚者の異名。計算に遅鈍なることをいふ。

ヤソサンノロオシ 八十さんの船押し。昔舟渡しに八十吉といふ者がゐて賃錢の高下により航行を遅くも速

くもした。報酬多ければ事を迅速に運ぶの意。仕事など催促されて「それはヤソサンノロオシでありま

諺

す。少し張込んで頂ければ早速やつてみませう」などといふ。

テングノヤトリ 天狗の矢取り。物事のどちらにもつかず言ふことなすことのであてならぬ人の仕事。

サルノモチカヒ 物と物を易へる時目の子算を以てするをいふ。

ニタカハンガチ ハンガチは朝鮮語で「同じ」の意。どちらも似たやうなものだ。

ネコノシヨウジン 精進は臍部に魚類を用ひぬこと。表面正直を装ひ内心多くの物を得んとの野望ある人を、

猫の精進するに等しいとの譬へを引いていふ。

タコノテクヒ 鮎は食物の無い時は己れの手を食ふといふ。知人と會食するに一同が自ら持出したものを食

べ席を終るを「鮎の手食ひぢや」と言つて互に笑ひ興する。烏賊鮎はその足をテといふ。

11

フユトシ 去年の冬を去年の冬年といふ。

ヨリツキ 閏月。

キニヨウンバン 一昨日の晩をかく呼ぶ。

ヒシテ 一日のこと。

ヒハンニチ 半日。

アマナカヒルマ 眞晝の間。

マグレヒグレ 黄昏、日暮。又マグレともオテマグレともいふ。

モウモウドキ 暮れ方をいふ。化物の出る時だと言つて子供の外出を戒める。

ヨノカミ 夜半。

ヤツアカリ 八つ時(今の午後二時)に雨の晴れることは多いので斯くいふ。

ソラエエ 空合、空模様。

ヒヨリズツ 日和裾、天氣の續いた後の曇天。

ダレビヨリ 雨の降りさらな日和。天氣がダレルなどいふ。

ツバエ 小雨、細かく降る雨。俄に小雨の降り出すことをツバエルといふ。

ザザヌケ 抜けるやうに降ること。例「今日はひどい降りやうで(豪雨)ザザヌケでありました」

名

アナジ 北西の風。

詞

スイカゼ すきまより吹き入る風、すき風。
ドウメキ 炎天或は猛火の熱氣。例「今朝の火事は何分火元が近く、そのドウメキで家の中の働きが十分に出来さつた」

○

セリキリ 仕切、區劃、さかひ。

メ 對馬では東面の地を東目、西面を西目といふ。

ランゴク 町外れの遠い所。

カタエンジヨ 町外れの隅の所。

ボウリ 町の通り。川端ボウリ大町ボウリなどある。「今屋敷ボウリの人が斯くく言うた」等言ふ。

シゲ 風水の患ある地に接する樹木繁茂の森林に、天道地、シゲ地、崇り地等と言つて名目を神にして尊敬せしめ伐採を禁じてあるものが州内諸所にある。

ソネ 岨、山の上に於ける延長一町餘にも及ぶ稍平坦な所。

コバ 嶮岨な地の雑木林を伐採して焼いたものがコバ。木庭と書く。灰が肥料となる。こゝに麥粟蕎麥などの種を蒔く。即ちコバ作りである。

94

ヤマトコ 山のほとり。

ヤマホタリ 草枯れの時期を以て山野に火入れをすること。

ワミ 谷間ひ。

サエ 狭い谷間。

ケタミチ 野山の嶺にある平坦な一筋道。

クボタマ 窪んだ部分。

ヒラ 岡のこと。お寺のヒラとは墓地のこと。

オホノンハル 大野の原で、廣々した所。

ガアツパハラ 河童の常によく出るといふ地。

ビツチャリ 泥濘。ドロビツチャリともいふ。

ドベ 下水などの泥濘。

ノタ 大雨で地が泥田のやうに泥濘となつたをいふ。

オテキシ 斷崖。

ガタ 海が遠浅で潮干た時は地面の現れる處、又はその泥土をいふ。

ワタ 浦津の入り曲つたもの。

ヤレエ 波止、波戸をいふ。

カキブセ 巖石に着いた牡蠣の痕跡。

形 地

95

シリハサミブネ

兩舷を船體以外に延長し、船尾の左右に牛の兩角の如くに突出せしめた船で、遠洋航海に堪へぬやうに鎖國時代に強制して造らせたもの。明治十年代迄は此の船體を存したが政府の禁令により今は全くなし。

ナミセン

激浪の爲破損した船。又ナミセンブネといふ。

カアラ

舟の底の外面。

シンバリ

羅針盤。

タテクサ

船に附着した牡蠣を焼くことをフネヲタテルといふが、其ために燃料として用ひる杉松の枯葉をタテクサといふ。

フナゴロウ

船を漕ぐ競走をなすこと。

ナマダテ

魚を生ナマの儘で需要地へ差向ける。

イワシワケ

鯛の大漁の折の雑沓をいふ、又これから普通雑沓することをも斯く呼ぶ。

エデ

エバ、エサともいひ餌のこと。

トホメ

遠見臺。

イヲ

魚。

アイノイヲ

あいばる。以下は何れも海魚。

アゴ

飛魚。

アカブク

赤色を帯びた海魚。アコウ、雉羽太チハハの類。

エビカネ

伊勢えび。たゞエビともいふ。

イカケ

アラともいひ、色黄黒く斑点あり、一二尺から三尺に及ぶ。味淡し。

オコゼ

背に堅い刺あり、捕へんとすれば刺す。

オヤネギリ

鰈の別名。かれひは親を睨んだ罪障により魚と生れてあの様な目をしてゐるのだといふ。ネギル(九頁)参照。

カチキリ

かぢき鮓、かぢき通しに同じ。全身青黒く嘴尖り、舟の舵木を通すことがあるから、舵切りといふ。

ガタボウ

ウツボともいひ、はもに似て色黄黒く斑点あり、目小さく齒利し。

クサビ

五六寸の小さな海魚、色赤黒く味淡白。氣宇仙キウセン。

タアラゴ

なまこ。

クチビ

鯛に似て口尖り色が薄赤い。一名クチミダヒ、又タマミ。

クロイヲ

形鯛に似て色黒く鱗が細かである。メジナ。

タヒノイランゲンハチラウ

鯛の魚の源八郎。鯛の味を賞していふ。

メシロダヒ

目白鯛、鯛の一種。

アカバナコダヒ

赤鼻小鯛。鯛に似て色赤く、鼻は段鼻。形小さく凡そ七八寸である。

バトウ 的鯛。マトイオ、カガミダヒともいふ。青黄色で一尺餘、その形馬の顔貌に似たるより馬頭といふと。

クツナ 甘鯛。

チンダヒ 茅淳鯛、又略してチンといふ。

チントクソ 茅淳鯛はよく人糞を食する魚で是と人糞とは切つても切れぬものであるといひ、人の仲の善いのを「彼等はチントクソだ」といふ。

チュウジョウイワシ 鯛の一種。キビナゴ。

トウゴロウ 鯛に似て色黒く全身に細かな鱗がある。

トウヘイ 藤平、細長い灰色の海魚。

ノコブカ 鱧の一種で灰色を帯び、體細長く頭は扁平で嘴長く鋸の齒のやうな鋭い齒がある。ノコギリザメに同じ。

ハイラ 圓く大きく長さ五六尺黒色で身は赤く、尺餘に及ぶ鱧のやうな鋭い嘴を有す。マカジキ。

ヒラス 平鯛。鯛の一種で背青く腹白く長さ二尺乃至三尺。鯛は圓いが之は平形。

フクトウ ふぐ、河豚。

ブトイカ 現今いふ一番烏賊。

ヲバイカ 今日いふ二番烏賊。又マイカ。

ミツイカ 形太く美味な烏賊。シドイカといふ種類もある。烏賊等足をアシとは言はず、それ／＼イカ

ノテ、タコノテといふ。

マンビキ シイラともいふ。性群居を好み、その數、萬を以て數ふる故にマンビキといふ。

ホシカリ 口廣く體圓く色淡紅で味は淡白。その沿岸に棲息するのを穴ボシカリといひ、稍黒色を帯びてゐる。能く餌にかゝるので欲しかりと呼ぶとの説があり、俗に鰈の字を作つてあててゐる。かさご。

モリヨウ たつのおとしご。

ロッパウ 七八寸でひらたく首が小さい。全身灰色、美味だが稍淡白である。又「皮剝ぎ」とも。

チュウチュウサザエ 小蝶螺。

サザエブク 蝶螺の殻。

チヨツヘエ 蝶螺の蓋。

セ 石花。海岸の岩礁に多數附着せるものでウチセといふのが藤壺のことである。オガミゼは又カメノテともいひ、人の合掌したやうな形である。セエクロクチといふセもある。

トコボシ とこぶし。海邊の岩について住み鮑の形に似て殻薄く太さ一寸から二寸、焼いて食べるが美味である。

イソモン 磯にゐる小さな鮑に似た貝。

ハガヒ 双貝。瀬戸貝、貽貝におなじ。

タマガヒ 眞珠貝。

オモガヒ 蛤のやうで殻が厚く表に荒い縦の筋がある。むきみとして美味。海の砂中にゐる。

ウマノクソガセ 雲丹の一種だが肉が黒く味も稍劣る。

YK ガアツバミナ 河童蛭、水に棲む蛭。

ユダ 河水と海水との間に棲む魚。形は鮎に似て味は淡白である。

カンタ カンタクラウともいふ。淡水魚。蒼黒色を帯び鱗に似て形が小である。

コウツ 水龜。

クロニヒジキ 二三寸の短いひじき。ひじきは海中の岩石に生じ、色蒼黒である。長さ二三尺のをナガヒジキといひ、その芽立ちの短いものをクロニヒジキといふ。

モガ 海藻で色黒く薬用とするもの。

○

ウゲ 古木の一部分の朽ちた洞。

シフタ 木の肌。

フシコッポウ ふしくれの太いこと。

スイバリ 割つた竹木のそけて針状をなした刺。

カックヒ 木を伐切したあとの株をキノカックヒといふ。

ネカバリ 張り廻つた堅い木の根。又根氣強い人をネカバリの強い人ぢやといふ。

イラ 藪や路傍に叢生する莖に刺のある草。

オツタガシヤクシ 草の名、天南星。その花はお多賀じやくしに似てゐる。

カハラゲサ 古い瓦屋根などに生ずる草。岩蓮華におなじ。

キジンサウ ゆきのした。

ソウレンバナ 彼岸花、石蒜のこと。

モロモク もろむぎ、裏白、羊齒。

イドラ 茨、いばら。

YK ゲス からたち。これは密柑の接木によい。

コサンチク 最も小さい竹。

センニチバナ 百日紅。

タイサンボク 櫻の一種、花は八重で大きく色が濃厚である。泰山府君の訛。

タラ たらの木。山中に生じ、幹直く枝無く刺が多い。正月に神前に供へる。

タツノキ ねづみもち。

チシャカケ ひさかき。神前に生けて供へる。

マツノツングリ 松かさ。

ナタヲラシ 對馬鰐浦にある木質硬い木で五月上旬白い花が咲き海面に映るので又ウミテラシともいひ、

天然記念物。學名ヒトツバタゴ。なんぢやもんぢや、あんやもんやともいひ明治神宮境内にもある。

イクリ 林檎に似て肉の赤い果物。

カタイシ 棒の實。棒油のことをカタイシの油といふ。
カラスノコマクラ 烏瓜。

マテ 團栗の一種で形圓く長く尖つて大きき五六分、黄褐色。煮て實を食す。

ヤシヲ 椰子。核は二つに割つて、水を飲むのに用ひる。

アキノジャクマ 一名キタタキ。鴉の如き啄木鳥で、體の一部は純白、雄は後頭鮮紅色を呈す。對馬及び朝

鮮の深山に棲み遠くは飛翔するを得ず。天然記念物である。

オクテシ 山鳩。松のやうな巨木の洞ほらに巢ねくつた山鳩が夜に入つてオクテシオクテシといふやうな聲で鳴くから。

オトキタカホソシカケタカ 時鳥の啼聲。

ビコビコドリ 鶺鴒。

チャモ しゃも、軍鶏。

シシ 農村で鹿のこと。上縣郡の鹿見村はししみと讀む。

シカンエダ 鹿の肢。

ワタボシカブリ 綿帽子被り、學名對馬貂ツシヤシ。夏は頭部背部並に脚部は黒色だが、冬には淡褐色或は體の部分

により黄色となり、頭部は純白となるのでこの名がある。

アマメ 油蟲。

エンバ 蜻蛉。鹽辛とんぼは鹽辛エンバ。

カメトウトウ 夏よく水上に浮び廻る黒色を帯びた長い足四本を有する蟲。

ゲル おたまじやくし、蛙の卵の孵化したもの。

コフ 蜘蛛、田舎の語。

サシ うじ、蛆。

ダイリヨウ 又デエリヨウ。蝸牛。

トカギリ とかけ、蜥蜴。

トコムシ 南京蟲、朝鮮ではピンデヒといふ。

ヒゲムシ 毛蟲。

ヒラクチ 蝮の一種、口邊が扁平で齒に大毒あり、人を害す。

チャビラクチ 色は黄黒で星の斑黒あり、ヒラクチ中最も悪性で、之に食はれる時は目くらみ大いに痛み甚しきは往々死に至る。人の陰秘を發き之を罵るを常とする人もチャビラクチと呼ばれて人に恐れられる。

ヨナ 精米に付く黒き羽ある蟲。

ホウ 豆によく付く蟲。

○

ホウガラ 前項ホウに付かれた豆が殻のみ残つたのをいふ。轉じて何でも實がなくなり殻の残つたもの、空

虚なもの。

ホロガキ 實の最も小さい柿。煎じて咳薬に用ひる。

コウコウイモ さつまいも。

ムギノハサミ 麥の穂。

ムギノハシカスル ハシカは芒。麥を打ち芒を取除くこと。

ネエガマ 薙鎌。身は薄く、三日月型で草を薙ぐに用ひる。

ウマンハミ 馬の食物。

○

ヤダツカヒ (1)やたらに金錢を浪費する。(2)人を使ふに分別なくむやみに酷使する。

コテンボウマハシ 人を思ひのまゝに小突き廻して勝手に使ふ。テコンボウマハシともいふ。

ヌヒアゲ 仕事を早く切上げる爲手脱けをする。

シリサマシ 忙しい中から暫し休息する。例「私は一寸暇を取つてシリサマシをしてをります」

テヤリ 手つだひ。

テゴ 人の手助けをすること。

ホネカブリ 忌中の宅へ手傳ひをなすこと。

イッスンセキ 一寸のがれ。先のことを計らずに一寸づつ先にせいで行く。

ズツタリボウ 爲すがまゝに放り置く。

ゴミマメクリ ほこりに浸つてゐる。

ヤリソブラカシ やり損ひ、仕損じ。シソブラカシともいふ。

テニカカリヨリ 手にふれたもの。例「何でも目にかゝつたものはテニカカリヨリ片端から拾ひ集める」

エテキチ 得意。例「あの仕事は彼のエテキチの所であり良く打つてつけとる」

コツエエ こつ。相撲、枕引、算盤押しなどの遊戯は決して力まかせて勝つのではない、つまりコツアヒである。

シツバレエ 事の終り。

ゲエシヨタアレ 甲斐性倒れ、甲斐性無し。

キモガチ 勝氣、人に負けじとする心。例「彼はキモガチな人間で、何時も人より先にのさばり出て仕事をしたがる」

ヒトガカリコンジョウ 人懸り根性。

キオホブリ 事に取掛らぬ前から其事を大儀に思ひ悩むこと、取越し苦勞。

キコン 機嫌、思ひ。例「どうでも彼のキコンに任せて仕事をさせて置からう」

テエコツ 飽果てる。例「ほんにテニコツし果たす」「待ちテエコツした」

テアマリ 手に負へぬこと。

イキダエエナシ 物覚えなきこと。

ネリメヒネリメ 物事の不極りな人のさま。例「彼は何事をするにもネリメヒネリメして一向極りが付かぬ」
アラシカヲトコ あつたら男。例「あれ程の力量がありながらアラシカヲトコが遂に事を成就せしめ得ざつ

たが残念な次第であつた」

オホボヤ 大きな體を持ちながら能なき人。

イキノロ のろき者。

ウキヨクモスゲ 常業なくして世の中をうろつきまはる者、怠け者。

シリヤケザル 物事に飽きが早くて一ヶ所に永續させず轉々として廻ること。

シチブショウモン 無精者、怠り勝ちな怠け者。

ヘリキ 力のない人。

ホヤホヤ (1)飯蒸菓子などの硬からず軟かからず調味よく出来上つたさま。(2)乳臭を脱せぬ弱年者や業務の

未だ練達せぬ者。

○

テンモコ 手番、よごのこと。

テボ 圓筒形に作つた竹の笊。其小さいのをコテボ、大きいのをナガテボといひ、これは幅廣の紐を付けて

背に負ふやうにする。

ザル 竹を五六分幅にへいで作つた大型の籠で、主として漁業運搬に用ひられる。小さい籠をザルとはいは

ない。

ハラジヨウケ 笊の大きいもの。

スカリ 背に負ふやう横平たく作つた籠。

ナガセエボウ 長い棒。

ホクトウ 木の棒。木刀とは異なる。

サシネエボウ 差擔ひ棒か。後と先二人で擔ふ長い棒。

シケエ 朝鮮語チゲの轉訛。背負梯子、しよいこ。

ステブリ 素手振り、手に一物も持たず。

ヒトソビキ 物を運ぶに一人の力でソビク位ある場合ヒトソビキアルといふ。

ヒタカチ 徒で歩くこと。

○

カミガタ 上方、對馬で本土の人をカミガタの人といふ。

タビタコク 對馬以外の地。

タビノヒト 他國の人。田舎では他の村の人をもタビノヒトと言ひ、他村に行くことをタビニユクといふ。

ゴウシユク 郷村の人の府中(序文参照)に於ての宿泊所。又クサツカヒともいふ。

トホマチクダリ 商品を取りよせることを品をクダスといひ、送つて來たことを品がクダツタといふ。遠町

即ち僻地の店の中々品が揃はず「そんな物はトホマチクダリには有りかねます」と斷はる。

エドニ 昔は江戸へ上るのに荷造りの堅固なるを要した。轉じて荷造の堅固なことを江戸荷といふ。

シハスゴウ 十二月に正月用の魚類を船に積んで賣りにゆくこと。

ニグチ 商品の荷の包装を解いた最初の品。例「之はニグチですから別段にお安く致します」

ヤステラモン 値の安く粗雑なもの。

ザツバモン がらくた、價値なき雑具。

コトカギヤ 品物の揃ひかねた店、用を辨じかねた店。

ミタアシヤ 人の物を見倒して二東三文に買取る商人。

セビツメネダン 極く引詰めて賣る値段。

ウワハ 過剰金。

ゼニメ 金高。例「ゼニメが上らぬ」

エトク 所得、得るところ。

トレメ 収入。例「あの人はトレメが良い」

ノリソリ 物の上り下り、出入、高低。例「これはどちらが値が高いか、餘りノリソリはあるまい」

シホリダメ 勤勉により絞りためた財産。

アダモウケ 賣買上あただに意外の大利を収得したること。

ホラナモウケ 豫期せざりし俄かの収益。

ズブガへ 物と物とを交換するに、差金等を出さずそのまま交換すること。

シウモク 生粹の正味。

カセン なべ錢。

オットリ 秤の盛り出し。例「此のはかりはオットリが二匁である」「此のちぎりはオットリが一貫匁である」

デモンダシモン 出費の數々重なること。

ヨツココキ 多くの人が相寄り平等に金品を持出して事を營む。

チンナンタアレ 目に立たぬ位になし崩してゆく。タアレは倒れ。

カンダラ 鯨を捕獲して解體する時、人々群り來つて鯨肉を切取つて逃げる。之を鯨のカンダラといふ。業者は敢て咎めなかつた。又風揚の競争で一方が切られた時、群集が我勝ちに奪ひ合ひをするを風のカンダラといふ。

ウハマヘトリ 賣買の仲介をして口錢を取る。

サイトリサシ 口錢を取つて賣買の周旋をなす。又、土壁を塗る時塗土を左官に取次ぐてつたひ。

スアヒトリ 賣買の仲介をして口錢を受ける人。又人の買物を取次ぎ、中間で密かに利を取ることをスアヒ

トルといふ。テメヲスル(二三頁)参照。

ナメン 名義。例「家の財産を相続人のナメンに改める」

○

オフレメエ お振舞ひ、饗應。

コビルマ 晝の二三時頃の間食、傭工の中休みに出す茶菓。

ヒバツオゼン 旅行中の家人に遙かに供する膳部、陰膳。

ショウジンアゲ 葬式後魚料理を客に供すること。

サカオゼン エビスゼンともいひ、膳の側面を表に出して据ゑること。新佛には特に逆膳にして供へる。

タルサカナ 婚約の成つた時婚方から嫁方へ贈る酒肴。

イツコンモリ 膳部の皿に魚一尾盛ること。

アトオサヘ 食事の終つた後「アトオサヘに一獻召上れ」と言つて酒をすゝめる。

アトクチナホシ 異物を食つて口中悪しき時他の美味な物を食してあと口を改めること。

ヒイナホシ 美味しいものを食べて脾胃を補ふこと。

ノドノアカトリ おいしい食物を食べる。例「今日は結構な御馳走に預りまして、久振りに喉の垢取りを致しました」

オンザノハツモン 果實蔬菜類の無くなつた時期に珍しくも残つたもの。

クチゼセキ 物を好んで食膳におやつにと味よきものを常々食すること。

グノミ 鵜呑みにおなじ。丸呑み、食物を嚙まずに吞込むこと。

カタケ 一回の食事をヒトカタケといふ。

タシヨク 食物の足し。例「此位の物では何のタシヨクにもならぬ」

ケヒシヨク 食料。例「あの家は固いうちぢやけケヒシヨクは十分に備つてゐる」

チョウフ 味加減、工合、あんばい、仕事の出来のよしあし等。例「柔くもなく硬くもなくチョウフ良く出来

とる」「あすこの嫁はチョウフ良くありつた」「どろどろチョウフにとく」

ハンコウ 二合半の半分、一合二勺五才。古くはハンコウ枴があつた。

シヨウハ克蘭 色の褪めたこと、魚の生鮮ならず色の變つたこと。例「此魚はシヨウハ克蘭してをつて、

とてももう食はれぬ」

サザミ 醤油の黴。例「此醤油にはサザミが浮いた」

コガレ 鍋に焦げ付いた飯、おこげ。

ガンチイ 飯を炊ぐに火の廻り悪く生米まじりになつたもの。

タギリメシ 炊きたての熱い飯。

ウハジリケ 飯の腐敗しかけて水分の浮き出たもの、ジリケは濕氣。

オコハイ 赤飯。こはいひ。

センキュウモチ センキュウはあはた(二四頁参照)。搗き方の十分でないため糰粒の外に現れた餅。

フツモチ よもぎ餅。よもぎをフツといふ。

オシユリ お汁。

スメジュリ 吸物汁。スメは吸物、下地物。

シユンカン 吸物の下地に、露土筆鳥肉蒲鉾などを入れた料理。春向きのもの。

センバンニ 鱈の身や腸に大根菜ほんだわら等を取合せ醤油で煮たもの。

フクミ 魚の臍煮。

ササヤギゴボウ さしがき牛蒡に同じ。

イリヤキ 鮮魚の水たきに醤油酒を加味し野菜豆腐素麩等を入れて煮込んだ鍋料理。

ミソヤキ 摺味噌に酒醤油砂糖を加へ鮑又は烏賊に野菜を取合せて煮る料理。

イリキラズ 豆腐のおからを煎つて味をつけたもの。カライリともいふ。

ヒコズリドウフ 木芽味噌に茹豆腐を和す。

ヒリョウツ がんもどき。豆腐の中へ細かく切つた牛蒡人参銀杏の實麻の實等を入れ油で揚げたもの。又顔

は痘痕面だが聲よく唄の上手な人をいふ。

ハマヤキソウメン 濱焼素麺。炙り鯛をだしとして煮上げた素麺。

ノタアヘ ぬたあへのこと。生魚の肉又は茹でた野菜の酢味噌和へ。

シャウユギリ 魚の生身を切つて醤油に浸したるもの。

アヘマゼナマス 短冊大根に蒟蒻木茸油揚等を混合せた鱈。

シコクツケ 澤庵漬、大根を乾して糠と鹽とで漬けたもの。

ウリコウ 糟漬の瓜。

オペリヤス 煎餅を明治初年までは斯く呼んだ。

ツリヤゼンペイ 釣屋煎餅。三角の煎餅を二つ折りにし、中に小さい玩弄物を入れて、振ればがらくと音

がする。中の物を樂しみに開く。ガラガラセンペイに同じ。

カスマキ うどん粉に卵と砂糖を混じ平らにのべ蒸焼して餡を入れ丸卷にした對馬創製の菓子。カステラ卷

きの略であらう。

チマキシバ 灌木で葉は楯に似て大きく、ちまきを包むに用ひる。

カンネ 野生の蔓草で、その根の汁を絞り、さらして葛粉を取る。昔飢饉の時は其根を採つて食に充てたと

54。

セン 澱粉。わらびのせん、薯のせん、片栗のせん、檉實のせん、かんねのせん、しぶせん等あり。わらび

のせんは提灯傘などを張る糊に用ひる。

ホシメ わかめの乾したもの。

メノシン 和布の芯、平たくて長い。これから和布の葉が生えるのである。どぶ漬にしたり乾物にしたりし

て食す。

メノモト 和布の根。刻んで湯をかけ汁の實に用ひたり、又酢や醤油をかけて食したりする。美味。

マサラ 緑色の小豆、普通の小豆より小さい。別名緑豆、八重生、むんどう。

カバシコウ 馨しくて好味ある米。

ニウ 餡。又餅餡のみでなく物の中に包まれてあるものをニウとかアンとかいふ。また判金二分金二朱金等

の舊貨幣の質造をニウ入りとかアン入りとか云つて排斥した。

アイモン 合ひ物。鮮魚乾魚鹽魚すべて魚類をさしていふ。

ブエン 鮮魚をブエンノモノといふ。
 エンナベ 縁鍋、即ち羽釜のこと。
 ナデウス 田舎で餅搗臼のこと。
 ハラブツチョウ 家庭の醸造用の陶器で、その胴を張らせて作ったもの。
 リヨウビツ 米櫃。
 メシツギ 飯櫃。
 コウチフタ 浅く長手の箱で、麴を製するに用ひるが、又これで穀類を乾したり、食料品を入れたりもする。
 メゴ 籠をあらく編み大きな目を作つたもの、目籠。魚類野菜などを入れる。
 ショウケ 筥。
 タカゲ 小筥、味噌こし。
 スイノウ 篩。
 テンモク (1)奈良茶々碗、小型の蓋茶碗。(2)料理の名稱。即ち吸物下地に蒲鉾落荷牛蒡などを取合せこのテ
 ンモクに入れて五つ組膳立の先において饗す。
 テシロザラ 手代皿、手鹽皿。
 ネコンゴキ 猫の腕をいふ。
 チャランベエ 陶器の破れや欠け。
 リウラ さくら、六寸程の小竹の先四寸程を細く割つたもの。又藁を以て造る。

セツカヒ 刷匙。插鉢などに付いたものをすり落すに用ひる。セツケエと訛る。
 チリンゲ ちりれんげ、陶製の匙。
 カヒジャ 貝杓子。
 ショウガオロシ わさび卸し。
 スイキン 炊巾、甑で物を蒸す時に下に敷くヌノ麻又は木綿。

○

ナリフウ なり姿。
 ソデバリ 両方の袖に手を入れ、袖を張つて歩くこと。現今は此風を絶つ。
 キリモン 着物、キクワモンともいふ。例「キクワモンは大切に仕舞うておけばいつまでもよくもてる」
 サラモン 新しい物、仕立て卸しの着物。
 ヒツマブリ 晴衣を衣装櫃の守神に譬へていふ。例「此着物はヒツマブリとしてたしなんで仕舞うておから」
 イロ 葬式に用ひる白衣。
 チンピラ 至つて粗末な着物、又短い着物。例「彼はチンピラのやうなものを着とる」
 サントクサガッタシナ すり破れたり色褪せたりして使用に堪へ難くなつた品物をいふ。
 シジフヤハギ 數多の裂れを接ぎたてたもの、四十八接ぎ。
 ヌリツボ 着物の垢付きて塗壺のやうに光を生じたもの。

キワダレ 際立つて汚れたのをいふ。

ショウタレ ますぼらしい身容の人。例「あの人はショウタレで、髪は取亂し着物は垢付きのまゝのものを着て居る」

ヨロヒムシャ 檻褌を纏つた見すぼらしい人を鎧武者といふ。

モゾウラ ソウラ(一四頁参照)はさゝらのこと。藻を束ねて作つたさゝらを假に想像し、檻褌をまとつたみすぼらしい様子を、モゾウラのやうだといふ。

サンポロリン 破れ若くは汚れた着物を纏ひ、風采の賤しい人を、サンポロリンのやうな風をしようと云ふ。

ジャンバ 取亂した髪貌。ジャジャンバともヤッサボウともいふ。

グルグルマキ 曲卷、女の髪の結方でぐるぐると巻いたもの。

キタイチ 着替へを持たず汚れた衣服を着たまゝの人。

ギンダラマキ 帯など不規則に巻き立てる事。

カタミイダリ 着物を一方は長く一方は短く無作法に辻褃の合はぬ着方をした事。

オビトコロムネ 衣服を着て帯をしないこと。

オツバダガカリ 肌ぬぎのまゝ。

オチヨボジリ 雨降りなどに衣服の裾をからげること。オチヨボカラゲともいふ。

パンブクロ 身體にびつたりせぬ衣服又は股引を纏ひ着膨れたのをパンブクロのやうに云ふ。

シタガヒ 着物の下前。

タモトモグサ

袂の中に塵埃の固つて締のやうになつたもの。外傷した時之を傷口へ當て、血留めとしたが近時衛生思想の發達すると共に此習ひは全く絶えた。

サンゲントバシ 縫ひ立ての衣裳の縫目の荒いこと。

フセ 着物の破れに繕ぎをあてること。障子襖の破れを修復すること。是をフセルとかフセヲアテルとか言ひ、又フセばかりで固めたことをフセコツベタといふ。

ウツワブセ 破れを表から伏縫すること。

ヌストバリ 着物の裏をくける時誤つてそのくけ目の絲の表にあらはれること。シチバリともいふ。

ヒビリ 長く續いた糸の區切りをなす印。ヒトヒビリ、フタヒビリ、ミヒビリといふ。一ひびりは凡そ四

丈乃至五丈である。又「ヒビリメが入る」といへば、ひびが入ること。

スクリ 綿を引いて作つた太筋の絲。足袋の底などを刺すに用ひる。

ヨマ 麻で作つた紐、綱の小さいもの、絲の太いもの。紙薦ヨマの語がある。

ミツクテ 三筋の裂れを平打ちに組んだ紐。又女兒の髪の三つ組みをもいふ。

ツギボシ 絲綱ヨマなどを結び繼いで生じた節、繼ぎ節。又ムスンボシともいふ。

ネバシ 眞綿。

ナイサゲ 裂れ繩切れ等を物に結びつけて目印としたもの。例へば買物の折、數個のうちから一個を選び出して置く場合にこれをなして、他の數個と混同しない目印とする。

フランケツ ぶらんけつとの訛。毛布。

フセマクラ きれで作った枕。

ウハフトン 敷蒲團の表の汚れを防ぐため、ふとんの上におほふもの。多くは白金巾の類を使用する。

トウジンデクリ 略してトウジンといふ。筒袖の着物、つつぽのこと。

チツペイ 夏季に腰より上に掛けて着る半身の着物、ちんべい。

ハンチャ 半纏のこと。羽織に似て襟の返しなく、半襟を掛け、綿を入れ、紐を付けぬもの。

シトネ 労働者のどてら。飛白や縞の古い木綿の布を継ぎ合せ、全部糸で綴ちつけ袷又は綿入れとしたもの。ドンザともシトネドンザともいふ。

ツツタケジバン 着衣と殆ど丈を同うする襦袢。ツツタケは突立つた人の着衣の丈。

スヌキ しごきおび。

ミノウマヘカケ 三幅前掛。

ヒライタ ふろしきのこと。ヒライタンの約。

コシサシ 腰差。煙草入と煙管挿しとを結合はせて腰に差すやうにしたもの。その煙草入をカマガキと呼ぶ。

カマガキは吠のことである。

ツマブクロ 絹又は木綿のきれで作った手提げの袋。

タコンバチ 筒笠、竹皮を張って作った笠。農村の語。

サシゲタ 差齒の下駄。

ヒキズリ 下駄に緒を釘付けにしたもの。明治初年まで用ひられた。

ユビガネ 指輪。

ピンクリ 女の髪結道具を入れる箱。

キツパ 刀の代りに用ひる木刀。丁稚が主人の伴をする時に腰を帯びたものである。

○

ウラセド 裏背戸、宅地の裏邊。

エントウヤ 悪疫流行の時の隔離室。田舎の語。

カンジョウドコ 便所。勘定所の字をあてゝゐる。

ホナ 土を掘込んで蕃薯など貯蔵する穴。

ベベイシ 濱邊から採取する青黒色の栗石。庭園に此石を敷く。

ダングヒ 杵。亂杵の轉。

ガンギ 石壇。

クラスミ 暗いところ、暗隅。

トサマ 壁の一部分を截り除いた採光用の窓。たゞサマともいふ。天井を穿ち作った天窓をソラザマといふ。

ベエラド 板戸。

ゲスイタ 五右衛門風呂の底に入れる板。

オカマ かまど、竈。

ハズ ミヅハズともいひ水槽のこと。

スイドシ 炊事場の溜に流入して沈澱した汚物。

ガツタリ 幅二尺長さ五尺計りの木製の臺に廻轉の脚二本を付して店頭之柱に廻轉式に取付け、店を張る時

には之を出して脚を下し商品を陳列する。

バンコウ 木製腰掛けの長手のもの。マレー語より傳つた長崎方言だといふ。

アシツギ 踏臺。フミアガリともいふ。

シヨク 机。

ツキタテ ついたて、衝立。

ゴクメエヒバチ 瓦焼の黒い火鉢で、縁を平らにし物をのせるに便ならしめたもの。

カラヘエ 薪の灰。

ホスベル 燐寸、まつち。

クワンニヤ ほくち、燧火をうつしとる物。

サシカ 薪の材料とする木。

シワガレ 薪の半枯れしたもの。

イボラ 茨、枯れた梢。薪を焚く時に是を加へて其燃力を増さしめる。又イドラともいふ。

ホタ 薪に用ひる木のこかぶ、木の切端。燃えさしのホタをモエホタヅリといひ斧の稍小さく柄の短いもの

をボタヨキといふ。

ヨロコビ 喜火。竈下の焚火のブウ〜と音を立てること。家庭の吉兆として喜ぶ。

ヤナホリ 轉宅。

バンゼエオクリ 新築の建前祝を終り、統領大工の宅に酒肴を持ち込んで再び祝ふこと。

ドウゲヒヨウシ 道具物の總て。例「ドウゲヒヨウシを描へて……」

ウツボガシ ほがすは穿。ウツボゲといへば穴である。例「あの家は南から北にウツボガシになつてをるけ、

夏分には随分涼しう」

○

クロス 色の黒い人。

ゲックワリ 身長低く横に張り肥えた人。

コンゴウカラヒ 物を負つたやうに背の特にかゝんだ人。

コヒン 小作りの人。

チヨコマン チヨコ、チヨコサイ等は子供のこと、又矮小なる人。

コビキ ビキともいひ小さい人を嘲つた語。

ビイカリ 弱小な人を嘲つた語。

ヤセボシ やせて骨と皮になつた人。

ヒガマス 瘠せた人。かますの干物の意か。

ヒボカシ 瘡せ衰へて日乾しにしたやうな人。

カチケ 瘡せた子供。カジクは憔悴。

ガゴ 瘡せ果てた弱い子供。

ガゼ (1)瘡せた子供。(2)猫の仔の瘡せること。例「猫の仔をさうこなしちやガゼになるはい」

ムツクリボウス 頭の全部を坊主に剃る事。

ハンコウゾリ 頭を半分剃ること。

ビンタ 頭。ピンタはつるとは頭をはること。

アタマンハチ 頭の頂き。

ヒテエグチ 額。

ベンボウ 頬の卑語。カタベンボウは頬の半面。ベンボウとらかすは頬を打つ。ホウタン、カバチ、カブタ

ンなどともいふ。

ハナグス 鼻の拉げて變つた音調の人。

ベツタリバナ ペしやんこの鼻。

コウリヨウバナ 高くて丘陵の如き形の鼻。

ハナダレ 鼻汁。ハナダレタレとは鼻垂れの愚人。

ハナンス 鼻の孔。耳の孔はミニノスである。

アギタ 髒。人を罵る時は「やなアギタの奴ぢや」など言ふ。多辯を弄する人を「アギタたくく奴ぢや」など言

ふ。又美味を口にした時「おいしくてアギが落てる」といふ。

スケアギ 髒の長く出たのをいふ。

リッコフ 力瘤。

ヒンシリ 肘、肘の屈折するところ。

テノハラ 掌。

キヨウマキ 指の紋。

ギチ 左利、ギッチョウともいふ。

サカデ 逆な手の使ひ方。

トツタリ 柔術、やはら。

ドンバラ 腹(はら)の俗語。

シリタブラ 臀。

ツブシ 膝。ヒザツブシともいふ。

ツブシノサラ 膝のさら、膝のかわらること。

コプロ こむら、腓。脛の背の膨れた部分。こむらがへり、轉筋をコプロガヘリといひ、遠路を歩いて腓の

張りく／＼することをコプロバリといふ。

エダ 人の足を罵る時にいふが、本来は獸の肢のこと。

ヨコバチカリ 横匾ヒラタくはたがること。

テツチヨウイドリ イドリは安座。あぐらかくこと。又ワリヒサともいふ。
イドリダコ すわりだこ。常に坐つてゐる爲蹠に生ずるたこ。
ウチガモ ウチワニともいひ女の歩き振り。爪先が内に向く。これに對して爪先の外に向くのをソトガモ、

ソトワニといふ。

センソク 足ばかりでなく顔や肌を洗ひ摩すること。

アカガレ あかぎれ、輝。

シヨウドウ 眼を煩つて出る涙の凝結したのを、シヨウドウが出るといふ。

ナメ 下痢の糞便。

オコブリ 胃に満ちた空気の上り出るもの、おくび。

ヘツベ 反吐、へど。

トバコツ 病人が熱に浮かされていふ取りとめない謔言。

ソコイロ 芯底からの肌色。例「あの人はソコイロがよくないから、しつかり養生をせにやいかぬ」

ホトケツラ 顔色の憔悴した病人を指して「佛面下げとる」といふ。

センキユウ ●痘痕、あばた、じゃんこ。尙センキユウモチ(一一頁)照參。

ホヤケ 皮膚にある赤色又黒色の斑點。

ヨメアザ 顔の全面に點々とある小さな痣、雀斑。

イノチアザ 老人の身體に多分に生じる痣。

ジャクロ 皮膚病の一種で、手指の爪などがひつつく病氣。

ガブシロ 瘡の嵩く固つたもの。

カサハチ 體一杯、又は頭一杯に瘡の出來た者。

コセカキ 總身にこせ瘡の吹き出た者。

ハゼマケ 櫛にかぶれて皮膚に粟粒のやうな瘡を生じること。

インノクソ 臉に生じる小さい腫物、ものもらひ。

マロウト 病のため、眼球に生ずる白點。俗に目に星が入つたといふのがこれで、それを、マロウトが下り

るといふ。

ニガシロ ニガシともいひ腫物をいふ。

テッコボ 頭部などを打つて腫れ出たこと。

リンリンバリ 身體が腫れて張り切るかの如く張り詰つたこと。

ホ 瘡、夏季に皮膚に生ずる腫物。アセボといへば汗瘡である。

トウ 物の痕の付くこと。腫物の治つた痕に其形の残ること。

ワタクシゴト 水痘。

イボハシワタレ 疣橋渡れ。疣を落す呪の言葉。疣を竹などでつつき是を數回唱へる。

テンキン 幕末の頃猖獗を極めた病氣。後にコロリとなり今はコレラと稱せられる。

ヒヤヤミ 冷病、冷がる人をいふ。

ホネヤミ 筋骨に痛みを感じる事。例「今日は遠い山から薪を餘計に擔うて來たのでホネヤミをして節々
が痛くてたまらぬ」

ボウチャク 老いぼれてぼける事。

シジフケレ 四十歳位から視力の衰へること。四十クラガリともいふ。

チサクラ 産後血治らず身體倦み疲れ精神沈鬱し、或は狂氣の如くなる者もある。又チカタ、チケともいふ。

ミヂケ 乳呑み兒が母の娠みたる爲乳を離れて起す病。ミゴチケ、オトミツハリともいふ。

ハンジヨウ 出産。

ハラゴメ 腹籠め。例「あの婦人はハラゴメのまま親元に歸つて來た」

コモチバラ 乳呑兒を抱へた母親の食欲の旺んなこと。

イヤ 胎盤。

ミコ 母の妊娠に遇つた嬰兒。

○

オクニ 土地の人が對馬をオクニといふ。オクニの人、オクニ言葉など。此語近來は減じ來つた。

ギヨイヘ 親しく交際する家、懇意なる人。

カッホネノシムルイ 最も近い骨肉の親類。

ミツモマジラヌナカ 骨肉の親をいふ。

ドウシヨウ 姓を同じうせるもの。又他人の子息を敬してゴドウシヨウといふ。

タシヨウ 他人。

ヒツリヒツバリ 親類の切端し、遠い親類。

エンビキツテ 縁引傳て。親類及び縁故者をいふ。

ユカリカカリ よすが、よるべ。

キンジヨガツベキ 近所合壁、比隣。

カマド 株、戸籍に同じ。又家の格といつたやうなもの。舊藩時代には百姓カマド、問屋カマド、紺屋カマ

ドなどあつた。

ケネエ (1)家内。(2)他人に對して吾が妻をケネエといふ。ケネエウチは一家の内の者の意。ケネエヅキは舊

藩時代の、家族に附屬した僕婢。

イトコベラ 従兄弟の類。

サシワタシノイトコ 再従兄弟。

トリヨメトリムコ 夫婦養子。

ヤクソクゾヒ 媒介者を待たず男女が自由に夫婦約束をすること。

ソヒゾヒ 夫婦のこと。

サシムキ 夫婦二人暮しの人をいふ。

タタキバナシ 何の科なき妻などを無理やりに追出すこと。

アハウバラヒ 何一つ與へず放ちやること。例「何の罪咎のない嫁をアハウバラヒを食はして遂に叩きもどした」

オヤヂイサン 田舎で祖父をオヤヂイサン祖母をオヤバアサンといふ。

タタ 母。丁寧に言ふ時はタタ様、少し軽く言ふ時にはタタヤン、タタサン。

オツサン 伯父さん。田舎ではオイサンといふ。

オッサマ (1)伯父様。(2)年長者に對する敬語。

バキイ 叔母貴。田舎の語。

ベエベエ 伯叔母をいふ。田舎の語。

ネネ (1)良家の女兒を敬してネネサマといふ。(2)下婢をネネ、ネネヤン等と呼ぶ。(3)田舎で己れの姉をネネと呼ぶ。

バボウ (1)舊藩時代士族の子弟を敬してバボウサマと言つた。(2)僕下男又兄をバボウ。兄を敬してバボウヂ

ヨウといふ。

オテエスサマ 御亭主様、夫をいふ。他人の夫をばゴテエサマといふ。

ウチノヒト 妻が他人に對して夫をかく言ふ。

オヒメゴ 人の娘に對する敬稱。ヒメヂヨウともいふ。

ムスコヂヨウ 人の男兒を敬していふ。

メラウ (1)女を賤しめた語。(2)田舎では娘のこと。(3)山中に於る女體の怪物。

カカシユウ 人の妻を卑しめて言ふ。

ケラコウ 下郎。又權勢ある人の鼻息を窺ひ阿つてその用を辨するものなどを侮つていふ。例「彼は何某の

ケラコウで、何時も附いてまはつてお鬚の塵を取つて居る」

サシビト 舊藩代農家の弱年男兒を命令を以て城下の上士の宅に無給で奉公させたもの。

エイテイヤツゴ 永代奴。刑名で、罪科ある者を郷士の許に預け、その一生涯を奴僕として使役せしめたと

ス。

チャネボウス 茶坊主、茶道坊主。

キウニン 給人、舊藩の郷士のこと。

ヒラマチ 城下に住まふ町人で格を有せぬ者、即ち平町人。

シダケ 或は朝鮮語か。對馬藩から朝鮮へ派遣せられた代官又は其他の役人の従僕。

○

カキテ 一村常備の執筆の人。

バクリヨウ 博勞、牛馬賣買の媒をなす者。

コゼエババ 取上婆。

アマフナトウ 漁夫を卑しめた語。

スネキリダイク 粗工を貶していふ。脛截大工。

シリフサギ 末子。

ホイトウボウズ 米錢の喜捨を乞うて世渡りをなす僧侶。

タカツクリ 竹器を作ること。

ナホシ 雪駄直し。

○

バイサイ 勝れた才のある人をバイサイのある人といふ。

オホテエナヒト 緩かな人、一寸の私なき人。例「彼は手前勝手をいふやうな事は少しもなく、誠にオホテ

エナヒトである」

テシヤ 相撲の手の巧みなる者、轉じて腕前のある人。

ギシヤ 義理固い人。例「彼はギシヤで、自分の身に引受けて事の成就する迄努める」

ウ 得てゐる、通じてゐる、委しい。例「あの人は物事に委しい人で、何を聞いてもウである」

サルモノ (1)さる聞えある者。(2)悪辣な者、みだらなる者。

バラモン 素行の修らぬ者、放埒なる者。

ベエタモン 色めかしく身なりを飾つた猥りがましい女。

ナグレモン 放蕩なる人。救ひ難きまでに身を持ち崩した人。又クタブレモンともいふ。

テンベエ おてんば、主に女兒の舉動の騒がしいのをいふ。

トッパ 輕率にして何とも取りとめのないことをいふ性行の人。トッパチラウともいふ。例「あのトッパの言

ふ事が本氣に受取られるもんか」

トンピンカン 何とも取りとめのない頓馬者。

ヒョウクラウ 兵九郎、剽輕者、輕率にしてをかしげな人、おどけ者。

トンボウサレ 頓狂者、あはてて間の抜けた振舞の人。トンボウモンともいふ。

タエエナシ 記憶力乏しく物を忘れ易い人。

ツカン 聽いた事の頭に止まらず直ちに抜けてしまふ人。

ズラボン 捕へ所のない人。

ヘエタラウ 平氣な者を嘲つていふ。

ヘラズ どこに行つても氣兼ねなどをせずいつも平氣な者をいふ。

センメエハラレ 千枚張られ。厚かましく恥をしらす面の皮の厚い人。

グウタレ 意氣地なし、活氣なし、甲斐性なし。ノウタレともいふ。例「彼はノウタレでいつも汚れた着物

を着てゐる」

オニウレエサマ のろくとして意氣地のない何を言つても反應のないやうな人。

ホス のろま、遲鈍な人。ノロともいふ。

ヌラバチ ぶら／＼と怠つて居る人、ぬらくら者。

ナマクレモン 懶者、懶惰にして世の用を爲さぬ者を嘲つていふ。

ヨカエミ よか右衛門。右衛門をエミと約略する。氣の利かぬお人よし、馬鹿正直。

コメンムシ 生業なく只食ふ一方で安閑と世渡りする者。

オテレス 愚鈍の人、縮りのない容貌の人。

ウツウサレ トウケツともいひ氣を失したやうな人、癡人。朝鮮語で人をサルムといふ。サレはサルムの

轉だといふ説がある。

アンボス 間抜けの愚人、あんぼんたん。アンテラともいふ。

キヨス 間抜けの人。

ゴクタタズ 役に立たぬ者。役に立たぬをゴキイタタンといふ。ゴクツブシとは別である。

ヤボダシ 田舎から出て初めて都會の空氣に接した人、山出し。

リジン 禮儀を知らぬ粗相な人。

ウンネキ 田舎者。これは元朝鮮語から出た語とかいふ。

ヨボソウ 應病人、たゞヨボともいふ。

デグスミ 人の前に出ることを臆劫に思つて出ようとしないこと。

ウンツク 人に對してあひしらひのよくない人、黙々としてゐる人。

イタリタアレ 汚穢を厭はぬ人。例「あれだけのイタリタアレは世に少なえちやらう。家の拭き掃除を何時

したもんやら、着物が穢れたとて洗濯もせず、汚い事がまるで氣に懸らぬ人だ」

ドンタクレエ 泥酔漢、よつばらひ。

オホゾウトリ 人並以上に大食する。

キンボウモン 粗暴者。例「どうも彼はキンボウモンで、人の事などは耳に入れずどこまでも我を通さうと

54」

ヤコク 道理を辨せず、世の中を我意で通す輩。

イツツモン 人の言を諾はず、どこまでも意地を通さうとする人。

コッポウモン 是非を辨へず強情な者。どこまでも言ひ出した事を通さうとする。

クジニン 人に對して角菱を立て、公事を起す無頼漢。

ヨトウモノ 餘黨者か。人間の屑、常に邪な行爲をなして世に爪弾きせられ、人として認められぬ者。

シクタモン 良からぬ者、たはけ者。

アバズレモン すれつからしの暴れ者。

ソリアガリ 人にのせられて乗り氣になり自分でえらがつてゐる者。ノリアガリともいふ。

オホバチ 事柄を誇大に言ふ者。

コウジョウクワン 口上官、よく喋舌る人。

ホラガタウゲ 法螺をよく吹く人。

テンゲンツウ あてにならぬ言ひしをして世間をたばかり歩く者。例「あのテンゲンツウが言ふことがあて

になるか」

ツルドロ 横着者、狡猾な者。ツルドロノカハといへば取分けづるい者。

クメンシ 心だくみをする人。

スレモン 世間によくすれた人、人ずれして悪くなつた人。

バンタヤク 他人に代り東奔西走斡旋する人。世話役。

エテカッテツンボウ 自分の勝手のいゝ事のみを言ひ張り人の言を耳に入れぬ人。

ヘクヒドシ 屁食ひ同志、良からぬ者同志。

○

ミチアケ いさかひなどの爲に杜絶した仲を元の通りに道あけをすること。

ショウハリ ショウハリの鏡ともいひ、生き證文の意。淨玻璃か。例「只今私の申します事は、今此處におい

でになつてをります何某さんがショウハリ委細御知りになつてをつて聊か間違ひのないことをござります」

ネンコウ としかさの意、年功。「ゴネンコウから先づお先に……」等といふ。

フエンミマヒ 不沙汰して居つて久振りに見舞に行くこと。

オトネ 音信。例「何のオトネもねえ」

チンチョウハイモン 上位の人の言葉を聽いて平伏する。

ネコジギ 猫辭儀。人の餘りに辭儀がましいのをいふ。

ツケビタシ しつこく付き廻ること。

ナメタレ なまめかしい振舞。

ヘンメエ 餘計なこと。ヘンメエコンメエともいふ。例「何をヘンメエな事をいふか」

ワザトゴト しないでもないゝ事を自ら求めてすること。例「彼は常に勘辨をしておけば怪我也出來ざつたの

であらうのに、ほんなワザトゴトをして思はぬ怪我をした」

サリキラヒナシ 貰ふ物は何でも好き嫌ひをしない。例「あん男はサリキラエナシで人の出した物は遠慮な

くよく食べる」

アゲゼンサゲゼン 富裕な人、氣取つた人などの袖手して、何事もしない様子を「上げ膳下げ膳で食事をな

してゐる」といふ。

タヘエラク 奢侈に耽るをタヘエラクスル、身邊に何でも有り餘つてゐるやうに誇らしげに言ふことをタヘ

エラクイフといふ。

ムチクショウ 人道離れた所爲を以て人を痛ましめること。

オリワタリ 先方の非を鳴らし抗議する。例「堪へ情が盡きてとう／＼オリワタリに行た」

サシメンユヒ 差面言ひ、人の陰秘を摘發し忌憚なく直言する。

テボヤブリ 物事を忌憚なく言ひ破ること。テボは圓筒型に作つた竹の筧。

ニクジユウ 人の嫌ふも憚らず憎たらしい事を言つて反對すること。クチニクジユウともいふ。例「彼は人の

言ふ事に容易に同意せず、いつもニクジユウな事を言うてをる」

ケセツ 無い事を有るやうに言立てて、難題を持ちかける。例「人にケセツを吹きかけてもぐらう(金錢を卷

き上げよう)とする」

キカセブリ 聞けよがしに當付けていふ。

チュウヘエ 詔諛、へつらひ、おんつか。

ベンツルキ 劍の如き鋭い辯舌。

シャッコウ 多辯によく喋舌ること。

ゾウタン 巫山戯、ふざけ、戯れていふ話。

カケリコツ 物を言ふに落着かず忙しさに慌しく言ふ。

ソソラハゼ あわたゞしげな言語舉動。例「彼はソソラハゼでいつも忙しさにしとる」

トワタリバナシ 四方山話や人の評等取りとめのないことを談話すること。

シクタゲチ 無駄口。

ハチゲン 自慢心に物事を誇大にいふ。例「彼はハチゲンばかり言ふので其話が本氣に取られぬ」

ブツネゴツ ぶつ／＼寢言のやうに言ふ。

ヌストゴツ 根底のない虚言。

ヘツパク 虚言。例「嘘とヘツパクは言うたことがない」「ヘツパク言ふな」

モンギ 話の意味。例「段々話をきいてみたけどんモンギが全く分らざつた」

ソカド 話すべきことの「廉、話の緒。例「話のソカドを聞いてあらまし分つた」

クチフジョウ 口に不淨を言ふこと。例「あの人は何か心に安からぬ所があるらしく、生きとる甲斐は無いと

か早く死んだがよいか、いつもよくクチフジョウを言うて居る」

クチモンマウ 口文盲、物言ひの拙いこと。

ベエベエコトバ 田舎言葉といふこと。伯叔母をベエベエ(二八頁参照)といふより出た。

ジゴン 字言、漢文の熟語。例「あの人は話をするのにいつもようジゴンを使ふ」。

ジイロハ 萬葉假名。

カンチョロジ 金釘流の悪筆。カンチョロといふのは瘡せて小さい者のこと。

ハヤオリソ 人の言をろく／＼耳に入れずして早合點すること。例「あの人はハヤオリソで、いつも話の央で

早合點する」

シラワラヒ 冷笑。

ワンザクレ 自暴自棄になること。例「彼は近頃ワンザクレエ出して……」

カリアガリ 一時にくわつと逆上し軽はずみし易いこと。

ウラブクレ 例「彼は何か腹立ちあるものか此頃はウラブクレしとるやうにある」

ブツバラ 不快を感じながら怒り黙すること。腹立ちやすい人をブツバラカキ。

ツラブツチョウ 佛頂面、愛敬なき顔付。

ツラクサレ 愛敬なし。

ケシキ 顔色の意だが、その險悪な場合にのみいふ。又ケシキヲスルといへば面相をかへて鋭い勢をなすこ

と。例「彼が腹をかいた時のあのケシキはどうか、實にえらいぞ」

リュウサエ 乗り氣、有頂天。例「あの人は少し珍しきさうなことでもあれば忽ちリュウサエになつて直ちに飛

んで行く」

タテヘダテ わけ隔て、人を遇するに貴賤貧富の隔てをすること。

ダンサン 段棧、段、物や人の上下。「人にダンサンをつける」など。

ザダン 人の地位、品物の格合ひ。例「誰某と何某とはその見識の上から見てザダンが違うとる」

バリ 勢力ある者、巾利きの時めくさま。例「何某はどこに行つてもバリぢや」

ケンベン (1) 権柄。例「彼はえらさうにケンベンらしい事を言うとる」 (2) 當り前。例「彼は人に物をして貰

ひながらそれを勞る心はなく、まるでケンベンのやうに考へとる」

タケブン 識見。識見のある人をタケブンのいゝ人とかタケブン者とか言ふ。

イキマヘ 意氣前、心だて。例「何某はどうもイキマヘがよくない」

ココロコンジヨウ 例「彼の言ふことはどうも木氣に取られぬ。ココロコンジヨウの知れぬ人間ぢや」

ニンクワ ニンクワのよいといふのは、淡泊で人の氣受けのよいこと。ニンクワの無いといふのは、さつぱり

とせず人付きのよくないこと。

フリマヒ 振舞ひ、動作。例「彼の血相を變へてのフリマヒには驚いた」。響應、もてなしの意にはフレマヒ

とよ。

サツサバケ 例「あの人は氣の利いたもので中々サツサバケがよい」

ヲレソレ 起居動作、禮儀。例「あの人は律氣な人でヲレソレがいゝ」

シラタ 穀物蔬菜の種子の實入らぬをいふ。又白痴の人。

ノウマ 山野に育つた馬。教養なく放埒に育つた子。

ショウケミニ 聞いたことを長く記憶せず直ちに抜かし終る耳。籠耳、策耳と同じ。ショウケは策のこと。

ヂンコウキ 塵功記、あらゆる事を記された書物。何事にでも精しい人をいふが、雑駁に種々の事を知つた

人を嘲つてもいふ。

シヤクシマヒ 杓子舞、今までのしたことのなかつた事を始めてする。例「今までのこんな事に携はりたことは

ござりませぬが、今度始めてシヤクシマヒを致しました」

タイハウシ 大砲師、大袈婆な事を目論む人。例「彼はタイハウシで何々の事業でしくじつてをりながら、

それにもこりず今度は又それ以上の事を企てた。とても我々の考への及ばぬことぢや」

トバエ おどける人を鳥羽繪といふ。例「あんトバエの言ふ話があてになるか」

マンノウコウ 萬能膏、萬事に熟達した人。

ニイジンコウ 人參エキス。價高く至つて少いもの故、たゞ至つて少いものを戲稱して人參膏といふ。

アミアガリ 最早世に出られぬの意。例「何某はあのしくじりをして、もうこれでアミアガリぢや」

レシ 彼。人を賤しんで「レシが云々」といふ。

アフラツホ 樞要な地域、富豪の相集つた所など。

キンブルヒ 絹飾。家事經濟等に於て簡素を専らとし、細心の注意を拂ふ人。嘲つた意味にも用ひる。

キヤハンプロ 脚絆風呂で、風呂の湯の至つて少いこと。

ホランコ 鯛の子。鯛はよく水面から飛出しては又水中に入る。放埒で御し難い蕩兒を是にたとへる。

ミヤコイリ 人の黄泉に赴いたこと。

ヤラサン 嚴原港口東南の岬を耶良崎といふ。對馬の人で本土に旅した事のない人を耶良崎の三寸先を知らぬと嘲つて「耶良三」といふ。

コンジン 金神は祟り易いから、物に激し易く和かな話の出来かねる人をかくいふ。

ノブソ 體肥大にして味よからぬ海魚。人の體ばかり肥大で智能なきを罵る語。

サンシラウヤク 藩侯の便所の掃除番に三四郎なる者があつたが、奇才あり認められて後藩政に參與し治績があつた。便所の掃除をする事を戯れてかくいふ。

トリカチ 好んで賄賂を貪り、又己れの利得となるものは懐に取込まうと計る者の類。

ホタキリ 寡婦の所へ入婿した男。田舎の語。

オニミソ 鬼味噌、強さうに見えて強くない臆病者。

オタカラ 家の厄介者、居候。「オタカラをつさん」「オタカラをばさん」などいふ。

シタトリ 鬪鶏の強弱の意から、力量のない人を下鳥、強力の人をウハトリ(上鳥)といふ。

イヘガウナ 家にばかりゐて外に出ぬ人をがうな(寄居蟲)にたとへていふ。

アンゼエタアラゴ 愚鈍の人。タアラゴはなまこのこと。

ホトケサマ 意氣張りのない馬鹿正直な人を嘲つて佛様のやうぢやといふ。

アマンシャグワン やかましき嫗。昔嚙にアマンシャグワンは釋迦如來の妻で、如來に色々の難事を言ひかけた人だといふ。

イナカステ 田舎より城下に移住した人。

イマタイカフ 今太閤、當今勢力を得た人。

イブリシヨウ 怒りがましい性質、ぶりく〜いふ人、人に親切でない人。

ミタムネエ 醜夫醜婦をいふ。

イツホンゲイトウ 一本だけ立つた鶏頭花のやうに、高い一方で瘡せた人を嘲つた語。

オトホリ (1)殿様の御通行。(2)物の終り。「これでおしまひ」といふ事を「これでオトホリぢや」といふ。又オトホリギワの悪いといふのは、酒など饗されて遠慮もなく飲み続け、立去らうともせぬこと、分れ際の悪事。

ヤスリカケ 身に鑓をかけるやうな。例「彼の家は一度ならず二度ならず災難が浴せかけて來るので心の安まる隙なく、全くヤスリカケぢや」

カタアタリ 打撃を蒙ること。人の迷惑にならぬやうにしようは「カタアタリにならぬやうにしよう」とい

ひ、多數の人の中で獨り害を蒙つたやうな場合には「あの人のうちが一番カタアタリであつた」といふ。

ジノシャウケツツ 珍しい物を見せられた時「これは珍しいお品を見せて戴きまして目の正月を致しました」

トシヤ。

コウヘ (1)老成、ませ、功經た意であらう。大人びたことをいふ子を、「コウヘタ事をいふ子ぢや」といふ。

オセナブリ (2)人を誑すことに老成した怪物、コウヘ河童カワズなどいふ。(3)淫蕩な者の益々昂じたのをコウヘモンといふ。

ショウハラレ 年長者を輕視して嘲弄する者。オセは年長けた人。オセマサリは伶俐な子。性の張つた子供。

ナキベス よく泣く子供。之を他の子が嘲つて「泣キベスコベス、遠ん山ん鼻糞」と唱へる。

ステラレ 母親の外出にいつも伴はれぬ子。

ウマノコ 馬の子の母馬に随ふやうに、いつも母の後についてゆく子。

ヒトミズ 見馴れぬ人を見て恥らひおづること。大人で人に面會するを厭うてこれをそらす人をもいふ。

アトエエ 跡追ひ、幼児の外出する人の跡を追つて、己れも同じく伴ひ行けと言ふこと。

ネタマガリ すや／＼と寝てゐた子供が急におびえて泣出すこと。

チャンメエ 手で物をいぢること。例「此の子は言ひつけた事はいゝ加減にして置いて、何かチャンメエばかりしてをる」

ジャレエ 子供がむくろなげなどの勝負を賭にせずしようといふを、ジャレエにしようといふ。之に對して

ムクロナゲ むくろじ(木槩)を投げて勝負を決する遊戯。

ジャレでなく本當の賭にするのをホンといふ。

ムクロナゲ むくろじ(木槩)を投げて勝負を決する遊戯。

ムクロナゲ むくろじ(木槩)を投げて勝負を決する遊戯。

ムクロナゲ むくろじ(木槩)を投げて勝負を決する遊戯。

ムクロナゲ むくろじ(木槩)を投げて勝負を決する遊戯。

ムクロナゲ むくろじ(木槩)を投げて勝負を決する遊戯。

ムクロナゲ むくろじ(木槩)を投げて勝負を決する遊戯。

ムクロナゲ むくろじ(木槩)を投げて勝負を決する遊戯。

ムクロナゲ むくろじ(木槩)を投げて勝負を決する遊戯。

ムクロナゲ むくろじ(木槩)を投げて勝負を決する遊戯。

ムクロナゲ むくろじ(木槩)を投げて勝負を決する遊戯。

ムクロナゲ むくろじ(木槩)を投げて勝負を決する遊戯。

ムクロナゲ むくろじ(木槩)を投げて勝負を決する遊戯。

ムクロナゲ むくろじ(木槩)を投げて勝負を決する遊戯。

ムクロナゲ むくろじ(木槩)を投げて勝負を決する遊戯。

ムクロナゲ むくろじ(木槩)を投げて勝負を決する遊戯。

ムクロナゲ むくろじ(木槩)を投げて勝負を決する遊戯。

ムクロナゲ むくろじ(木槩)を投げて勝負を決する遊戯。

ムクロナゲ むくろじ(木槩)を投げて勝負を決する遊戯。

ムクロナゲ むくろじ(木槩)を投げて勝負を決する遊戯。

ムクロナゲ むくろじ(木槩)を投げて勝負を決する遊戯。

ムクロナゲ むくろじ(木槩)を投げて勝負を決する遊戯。

ムクロナゲ むくろじ(木槩)を投げて勝負を決する遊戯。

ムクロナゲ むくろじ(木槩)を投げて勝負を決する遊戯。

ムクロナゲ むくろじ(木槩)を投げて勝負を決する遊戯。

…ゴクロウ 競争。飛びゴクロウは飛びくら、走りゴクロウは走り競べ、廻りゴクロウは廻り競べで、圓形楕圓形の所を走り競べすること。仕事のしゴクロウもある。船を漕いで競争することをフナゴロウといふ。ゴロウは競の轉か。

イキナガミ 小兒の戯れに水に面をつけて息の長短を争ふこと。

イトトリ 女兒の遊び、あやとり。

ハナタカ むかご(零餘子)の蔓に生ずる實を俗にハナタカと言ひ、子供らはこれを唾で鼻につけ、鼻が高いと言つて戯れる。

オサキノコドラ 子をとり子とりの遊戯。其唱へる言葉に「お先の子どら云々」とあるより。

キザハシコグレ 女兒の玉取りの遊びに使ふ語。

スケスケ 片足で飛び／＼して走ること。スケサンスケサンともいふ。

オツキサマ 童謡に次のやうながある。「お月様とうと十三七つ、七つから子持つて、おまに抱かして、油買ひにやつたらば、油屋の前で油一升とぼして、次郎どんの犬と太郎どんの犬と、寄つてかゝつてひん

甜めた。大事なお月様黒んぼが隠した、白ん坊に言うてくれう」

ユビキリ 子供が約束を誓ふ時は互に小指を曲げて引き掛けあつて「指切りかま切り嘘言うたもんなあ遠ん

山ん鼻糞」と言ふ。

シユミセイ 鯨の髭を薄く剃いで竹の弓に張つて作り、紙幣につけるうなり。

ビシヤコ ぶらんこ。

ネンガラ 根木。これを遊ぶをネンガラ打つといふ。

カニワサ 棕櫚の端を圓く輪に結んだもの。これで蟹を釣る。

テングルマ 子供を肩に跨らせ、頭に取付かしめることを、テングルマに載すといふ。

チョウテンノキ 子供が遊戯に加はらずにのいてゐること。

カタランテンテン 子供の遊戯に加はることをカタランといふが、その遊びに不平の點があつて立去る時には

カタランテンテンといふ。

ベベコツ 子供に穢い事よといふこと。穢くなるをベベニナルといふ。以下兒語。

アトウサマ お月様。

カンキン 堪忍。

ギッコ 舟。「行李のやうなものを舟に擬し子供をのせて櫂押しのままねをなし」ギッコやそばよし、押さねば上

らぬ」と言つて引く。

ジシ お魚。

テエテエ 綺麗なもの。子供の正座したのをテエテエ膝といふ。

ハラホン お腹、おなか。

ブウ 火。

ブウ 水。ブヤともビヤともいふ。

ブウタ 湯の生温いもの。

ホチ お餅。

ジヨウジヨウ 草履。

チュウチュウ ねずみ、又子供に結つてやる髪容に此名がある

ヤキヤキ 子供の月代、さかやき。

モウ 化物。

ウシモウ 牛。

○

ラリセック 節句といふに同じ。

ヲリメキリメ 冠婚葬祭年首歳暮等禮儀を主とした慶弔すべてをいふ。

オシヨウグワツアマ 正月の神様、歳徳神、壽老人。門松を立てることを「お正月様を立てる」といふ。正月

様を、シヨウグワツノカミサマともいふ。

オノウレエ 正月の雑煮。

オマイモノ 正月に床に飾る餅。

ホタル 正月に三寶荒神に捧げる米の穂の束ねたもの。

クリヘエバシ 栗の小枝を八寸許りに切り、兩端の皮を削つて中間は皮付のままとした箸で、正月の祝膳につける。

ナンカシヨウグワツ 正月七日のこと。

イゴモリ 追儺の式を正月七日に行ふ。此時火を消し戸締めをして暫時沈黙する。これをイゴモリと言ひ、それから家主が「鬼は外福は内」と唱へて豆を撒く。

モドリシヨウグワツ 正月十五日をいふ。

コツバラ たらの木を削ぎ取り六寸許りに切つてその半ば以上を紙でぐるぐると左巻にし、松煙に燻べて一對としたもので、正月十五日早朝で神棚を叩き「ミイレミイレ」と十數遍唱へて拜し、以下庫小屋桃梅梨等の果樹にまで同様にする。是を又ミイレミイレともいふ。「物のたやすく成就することをコツバラ巻くやうなもんぢやといふのは、コツバラのたやすく巻かれると同様に易々と成就するの意である。」

イノチナガ 陰曆六月朔日を「命長」と唱へてこの日素麺を食べる。

ヤクマ 農家で陰曆六月初めての午の日に行ふ馬の供養。此日は業を休み競馬などの賑ひをなす。

ウラボン 孟蘭盆會に表裏の區別を立て、七月十六日以後を裏盆といふ。

ミタナ 盆の精靈棚。

オテツキダング 孟蘭盆の七月十三日は、祖先の靈が十萬億土より來られる日で、落て着かれるやうにとて團子を作り佛前に供へる。その團子の名。

ナンヤカヤ 盆に佛前に供へる果實豆色煎餅めんどろ麻穀の類をいふ。めんどろといふのは野生植物の名である。

シヨウリョウノミ 孟蘭盆會精靈祭の前によく出る小蚤。

クンチ

九月九日重陽の節句をいふ。この日には焼栗、零餘子、粟を和した赤飯を作り、登山して之を食して祝ふ。この時子供等に對して今日は「クンチ栗飯腹張り裂ける」というてあるから、遠慮なく精出して食べよなどといふ。

アイギョウカク

陰曆十月初亥の日を亥の子といひ、この日赤飯に皮付の柳箸四本添へて三寶荒神に供へてから、家族打寄つて柳箸を取り赤飯を挟みとつて戴くことをいふ。愛敬搔く。

インノコブリ

亥の子ぶり。亥の子の日には愛敬を搔き、餅を食ふを例とするが、夜は多くの子供が集つて石を結へて數條の繩を付し、一人其の根取りをなし木遣歌を唱へれば他は之に和して繩を引き、胴突きの如く地面を突きならし戸々の前で之を行ひ、之て亥の子の吉日を祝ふ。

ハテノハツカ

十二月廿日。幕政時代死刑者は此日に處刑したといふ。

トカキイハヒ

斗搔祝、八十八の賀の祝。竹で斗搔を作り大きな餅二重に添へて配る例がある。

ムカフルツキ

向ふる月、子供が生れてから一年目の其月をいふ。

マダラブシ

農民のうたふ小歌。

シンキブシ

これも田舎でうたふ歌。「しんきしんきと山道を行けばのう」と謡ひ出す。

アメノフルヨブシ

雨の降る夜は戀しさまざる云々などのもの大凡百句以上ある。

ナンドノカミサマ

上縣郡北部の村で家の納戸の内に祀つた神。祭神詳かならず。

ホタケサマ

竈の事を司る神で、各家の臺所に奉々せられる。ホタケは火炊か。臺所の神棚には三寶荒神を祀るを例とするを以て見れば、名は異なるが或は同神か。

オハレエサマ 皇大神宮の御札。

オマブリ おまもり。

ミキノゼンゼンヒタリノゼンゼン 神社隨神像の矢大臣左大臣をいふ。

シシコマ 神前のこまいぬ。狛犬。

キボク 龜卜。龜の甲を灼いて吉凶禍福を判する對馬古來の卜法。又鹿の肩骨を灼いてこの法を行ふを稱してロクボクといふ。大嘗祭に當つて悠基主基の田を卜定あらせられる時に此の卜法を執行せしめ給ふ。

ガラガラ 鈴。

オミノリ 御法。寺の説教師などが法を尊んでいふ語。

オスワリ 神佛の召上つた供饌物。例「オスワリを戴く」

オデマセ 御出座、神渡し。お歸り、御入座をオイリマセといふ。

エベス きつちり物事の合つた時にエベス、エベス三郎、エベス大黒福の神等といふ。

カツレガミ 餓神、餓鬼。食り食する者を賤しんでいふ。例「彼はカツレガミのやうに何も彼も悉く平らげてしまつた」

マツノヲサマ 京都の松ノ尾神社を酒造業者は酒の神として崇敬する。酒に酔つて興に入つた人を松ノ尾様の乗り移りに擬していふ。

オヒヨリモウシ 晴天を神に祈ること。

カマハラヒ 盲僧の行ふ竈穢祭。

ヒノモンダチ 炊いだ物を食べずに神に祈ること。

セメキタウ 責祈禱、つきものしたといふ人を責め詰めて言はしめる祈禱。

フケカケ 病人などに對して盲僧行者等をしてまじなはしめるをフケカケルといふ。

ヤメエオクリ 悪疫流行時に村民相寄り毎夜鐘太鼓を打鳴らし、村中を隈なく逐ひ廻り村外れで疫神をたゞき出す式。今は行はれない。

ミヤジ 封建時代神社の官司をいつた。

ホサ 神樂師の職名。舊記に淨藏貴所の子布施、伊能の二人幻術を修むるの故を以て對馬に流罪せらる。其子孫保佐或は法者と號し陰陽師の一派たり。累世八幡宮の神樂師を勤むといふ。

ヒキダサレ 神死靈などの乗移つて、人の身上のことなどお告げと稱して傳へる祈禱師。

アヤ 怪、怪しむべき事のあること。例「折角出来かけてをつた事が俄かに變つたが、これは多分何某のアヤであらう」

ケニ 怪異か。妖怪の出るといふ家のことをいふ時に、あすこん家はケエがあるといふ。

ガアツバ 河童。

レムラサキギモ 多くの人の中に稀に紫肝を持つてゐる人あり、その類の人が河童に肝を抜かるとの迷信がある。

ある。日暮芥草「五月五日に生れし男子、三月三日に生れし女子は紫肝にして分けて河童好んで抜き食ふといふ」下學集「五月子不_レ養_レ五月子必害_二父母_一云」

ヌレヲナゴ 雨の夜などに出る濡れをぼつた女の姿をした怪物。

メヒトツポ 目の一つあるといふ夜間の怪物。

ヤマワラウ 深山に棲むといふ怪物。又山のみに働く人を戯れに斯く呼ぶ。

ヒトコエオラヒ 山中の怪物。是は一聲オウと叫ぶもので、人若しこれに和してオウと答へれば又オウといふ。人と怪物と交互にオウの應答をすれば人は終に負けて怪物の餌食となる。故に山中でオウの一聲を耳にしても答へてはならぬ。又人を呼ぶ時にも必ずオウ／＼と二聲發するが法だといふ。

ノブスマ 暗夜歩行中大地に白い襖のやうなものが突然現れて、右にも左にも動かれず暫し進退谷まることあるといふ。これをノブスマといふが、むさ／＼び(一名野衾)の翅を張る様子を妖怪化したものか。

サンキ 山中には山氣といふものあり、これに遭へば其魔に襲はれて異様を感ずることありといふ。

イキエエ 小兒などの遊魂に行き合ふこと。

サスレエ 神佛生靈或はよる所ない死靈の障りをいひ、御幣擔ぎのよく言ふ語。

イヌノタチボエ 犬の立吠えは火に立つと言つてこれを恐れる。

マドトイ 夜たけて鶏の鳴くをマドトイといひ、これを火に立つとて忌む。マドトイが唄ふと翌朝直ちに其鶏を氏神様に奉納した。此風習は明治初年の頃流行はれ、氏神の境内に數羽の鶏の棲息せるを幼時に見受けてゐた。

シチナンクヤク 七難九厄で、七、九、十七、十九歳等七の年九の年に遇へば災があるといふ。

シアクジフアク 四悪十惡。結婚に當り嫁の年齢から掣の年齢へ數へて四と十とになることを忌み嫌ふ。即ち掣廿四、嫁廿一は四惡、掣卅一嫁廿二は十惡である。

ち掣廿四、嫁廿一は四惡、掣卅一嫁廿二は十惡である。

サンナンイチ 子が三男一女になれば親を食ふと言つて之を嫌ふ。故に四人目の子は生れ落つるなり直ちに他家へ與へる。又子年生れの子は親を食ふと言つて嫌ふ俗信もあつた。

○

ホトケサマ 先祖の靈にいふ。

オマヘダナ 祖先の靈を祀つた佛壇。

ノオクリ 葬式。

オボクサマ 佛前に供へる飯、御鉢米。

コウンハナ 香の花、香氣ある木で枝葉を佛前に供へ、皮は細末にして香とする。

カウヤツチ 高野土。高野山の土で、死者があれば之を寺から乞ひ受けて棺に納めて野送り(葬式)をなす。

シケバラヒ 葬式を送り出したあとに、巫又は座頭をしてシケバラヒをなさしめ以て家のシケを拂ふ。

トリワタル 彼岸會七日の内に死者の命日にあること。例へば彼岸を三月十八日からミテの廿四日までとし

て、死亡の家族で二十日の命日の人があれば「今日は二十日で何某がトリワタルルから、御靈膳もたてお菓子も供へよう」と言つて供養をする。

ダブセキ 墓碑の基壇。セキは石、ダブは茶毘か。

カラムシヨ 空墓所。遠隔の地に客死した人の靈を忌むために設けた假の墓。

チャタウ 茶湯、先祖の靈に供へる煎茶及び水をいふ。

ヒノウチ 人が死んで五十日の忌明けまでの間をいふ。

ガキノメシ 佛前の靈膳を供へるに當り、餓鬼に供へるとしてその脇に小さい器に些かの飯を盛つて添へるのを餓鬼の飯といふ。

オシヨウジンビ 舊藩時代殿様及びその子女の命日を御精進日と唱へ、この日は鳴物を遠慮した。

○

ミジホ 見頃、見時節。

ハザミ 物と物との狭間から窺ひ見ること。

ヤラネエ 事の長短得失を考慮し、經濟其他諸般の切り盛りをなすこと。やらなひの訛。例「あの家は内外に事が多く、一通りの者ではとてもやりきれさうにないが、あの人はよい腕前の人でよくヤラナウテゆく」

キメヒキ きつかりと物の結末を付けて應對すること。

ミカジメ とりしまり。例「何某は父を喪うたけんどん、しやんとした叔父が居つてミカジメをするから安心なもんぢや」

マツボ 眞壺、圖星。「マツボを指されて……」などいふ。又マツブクロともいふ。

セ 瀬か。例「仕事を仕上げようとあせつても、外の事が次から次へと出て来るのでどうしても手を着けるセが來ぬ」「又よいセが來て運が開けるでせう」「つらいセもあつたがとう／＼あのセを通した」

ハ 縁、よすが、よるべ、よりどころ、すべ。「戻りハ失ふ」「行きハ失ふ」「取付きハの無い」「手もハもつ

かぬ」など。又烏賊漁の折に、大型の烏賊の密集してゐることをハが良いと言ひ、小型のものなるか其の集りの少い時などをハが悪いといふ。

イリワリ 事の顛末。

ソラ 氣持。「居るソラはせん」「物をするソラはせん」「行くソラはせん」

イロ 場合、境遇。例「あの家では随分むごい言ひしをされたから、たとひ食はんイロがあつても、あの家へは又と行かうとは思はぬ」

フ 運氣、まはり合はせ。フが良いとか悪いとか言ふ。

オウケ (1)含有量、(2)……甲斐。

(1)何品を買つたが入つて居た数が思ひの外多かつたので随分オウケがあつた。

(2)あの子を心からよく育てたが、育てオウケがあつて頼もしい者となつた。

タテハフ 立法、法の立て方。例「其の人によつてタテハフがある」

サンベエ 仕事。例「こんなサンベエは無え」「嫌なサンベエぢや」「こんサンベエはどうも驚いたなあ。」「サンベエするは世話するの意。又サンベエコンベエするともいふ。

ヘダイ 紙の一帖と一帖との間に幅狭き紙片又は藁を入れて其仕切りをなすもの。又物と物との間に隔てをなしたもの。

ダクボク 凸凹、でこぼこ、物に高低があつて一でないこと。

ズンドウ 位置、道筋。例「何々の地はどのズンドウに當らうか」

タカテン 高い天邊。

オンツマリ 詰、最終。

ツマサレ 影響、結果。例「杏りの頂上に達してそのツマサレが来て今日のやうなみじめなことになった」

ケヒレ 曙光、微候。例「前方にそんなケヒレはちつとも見えませんでした」

ハツサキ 端先、眞つ先。「濱んハツサキ」など。

キツバシ 尖端。

トドナカ 最中。

ニキ 際、傍ら、脇の方、ねぎ。

ワキヒラ 周邊、環境。例「ワキヒラの人の見掛けもあることであるけ、さう雑と濟めては置かれぬ」

ジュウゲルリン 周圍、ぐるり。

ガアタ 外側。

コモト 根本、元々の仔細。「そのコモトを訊ぬれば……」など。

ネツッコウ 根、根元。例「ネツッコウから伐る」

ドツッコ 底、容器の中の極底をいふ。

シコ 量。いゝシコあるは澤山あること。シコラは嵩、程合ひ、物の高さ廣さ、數などの多さをいふ。

スベ 滑らかに觸れる感じ。スベが良いといふのは、スベ／＼してゐること。

ベエ 番。「おんど(我共、我等)がベエに廻りた」「今度はお前のベエぢや」など。

シャナリ

前觸れ。例「何かよさうな事を言うて居つたが全くシャナリばかりで、とうとう身にならざつた」

ジョナリ

改め得ぬ習慣。例「彼がするまゝに放つて置けば自然ジョナリになつて、遂には改められぬことになら」

ホガホガ

空虚。例「中はホガホガになつとる」

ホゲタマ

穴のあいた所。

ノウ

幅。一ノウの幅は約九寸から一尺。一ノウは一幅、二ノウは二幅。

ホウ

本數。一ボウ二ホウ三ボウと數へる。田舎の語。

シツチャコッチ

表裏前後左右があべこべになつてゐること。

ヤヘ

物の二重になつたを八重といふ。

ダイコンナリ

大根形で、始めは勢よくて次第に衰へること。ダイコンボソリともいふ。

サンツミ

多くの品物を山のやうに積みかさねること。

センツメ

千詰めで人とか物の夥しく詰め込んだ時をいふ。

ゴンダマゼ

ごたまぜ、色々に入交つたこと。

ハンゴウ

取合はせ。例「甲と乙とを取合はせようとしても、きつちり合ひかねてどうもハンゴウが悪い」

ワヤ

物のこわれることをワヤニナルといひ、ワヤを入れるは纏りかけた相談などに横槍を入れて妨げること。ワヤノサンタクといへばワヤの限りの意である。

テンゴウノカワ

易々と成就すること。例「何、それ位のことではテンゴウノカワぢや。忽ちに出來上るぞ」

ネツカリ ねつから、一向に(…:せぬ)。

クグム かぐむ、屈む。

アマエカス あまやかす。

サカヨキ さかやき、月代。

ワキゴ わきが、腋臭。

カモヒ かまひ。例「何のおカモヒも致し得ませぬで、失禮しました」「どんな事しようともおカモヒなしで

ある」

サオル 物に觸れること。

アオナク 仰のく。あふのけにをアオナケエといふ。

ウダク いだく、抱く、田舎の語である。例「こん子はウダカレウち言ふばな。さう言やウヂエち見んや」

カブ かび、黴。

アブセル あびせる、浴せる。浴せ掛けるはアブセカケルである。

スズク しづく、雫の訛で、吸物の下地のこと。水の滴ることをスズクダリガスルといふ。またスタダルと

もいふ。

スタダリ 滴り。水の滴り以外に、損失のスタダリといふこともいふ。例「追々の損失のスタダリが積り積

つて、今日のやうなみじめなことになつた」

スタレル 枝垂れる、垂れ下る。スタレ柳、スタレ桃、スタレ梅などいふ。

オホケナ 大きな。

シラメ しらみ、虱。

セキリ 仕切り、區劃、さかひ。

ネラム 睨む。

オソヘル 教へる。

ミカゴ むかご、零餘子、ぬかご。

アイ あゆ、鮎。

イガム ゆがむ、歪む。

イゴク 動く。

イデル ゆでる、燂でる。イガクともいふ。

イク 行く。

ノノ 布。布子はノノコである。

オトトヒ おとつひ、一昨日。

オム 芋をうむ、績む。

ヤボ 藪、下手な醫者はヤボイシヤ。突然なることはヤボカラボウである。

アキビ あけび、荀子。

ネガキ 寝がけ、寢際。行きがけはイキガキである。

キヤス 消す。

ハジミチ はじめて、始めて。例「こんな仕事をしたことは今度がハジミチちやつた」

ネジミ 音メ、音のやらす。例「琴三味線のネジミ」

シビリ しびれ、痺れ。例「シビリ切らす」

ムクギ むくげ、權。

オル 俺、我、おのれ。其れはソル、是れはコルである。間投詞の場合のこれをもコルと發音する。例「コ

ル、お前はそんなことを言うて居つていゝのか、よく考へて見なさい」

ネトブケル ねとぼける。ねぼけて戸惑ひをする。

カマブコ かまぼこ、蒲鉾。

ツ 田舎では接續詞「……と」をツといふ。例「それツこれツ……」

コツ こと、事。仕事をシゴツといふ。

フツクラ ふところ、懐。ホトクラともいふ。

コユミ こよみ、唇。

コヌヒト 此の人。あの人にはアヌヒトである。

アラレムネエ あられもない、とんでもない。

オムテエ 重たい。

イツシュ 一緒。

オンバク おんばこ、車前草。

ノケスル のけ反る。

ダン だに、牛馬などの皮中に喰ひ入る蟲。

イン いぬ、犬。

ハイ はや、早や。

○

イツテエ 一體。

イテエ 痛い。

エエバル あいばる、魚。

エレエ えらい。

シウエエ しわい、吝い。

ゾンゼエナ ぞんざいな、無禮な。例「此奴あゾンゼエナ奴ぢやなあ」

キンレエ 近來、近頃。

ケエ (1)貝。(2)甲斐。例「折角骨折つてしたけどん、したケエもねえことになつた」
エエ えひ、鱒。

キイ 田舎で食ひをキイといふ。

チイ つひ……。例「チイ其處ぢや」「チイ今んさき……」「チイ行つて來られる」

マドリイ まどろい。

サテエ さとゝ、敏。

シュウラシイ しほらし。

オウマデニ あゝまでに、「オウマデニ言はぬでも良ささうなものぢやのに」等。

○

ヒク 敷く。例「寢床をヒク」

ヒザル しざる、退く。後退りはアトヒザリである。

ソマ 蕎麥。田舎の語。

シキビ しきみ、穡。

サフシイ 寂しい。

ウツブク 俯く。

ネブル 眠る。

ウベル 湯に水を差す。例「風呂があんまり熱かつたけ、水をウタベタ」

ヒボ ひも、紐。

ドウチ ろぢ、露地。

ゲンゲツ れんげさう、蓮華草。

カヤクリ からくり。糸仕掛で動かす器械。又表向きばかり飾つて、内々はやりくりしてゐること。

マザラ まだら、斑。

ニウシ みよし、へさき、舳。船の前頭をいふ。

シユル 汗。

キビシヨ きびす、踵。

タルム たるむ、弛む。

ガサ かさ、嵩。

ガゼ 雲丹の殻のまゝなのをいふ。かせ。

ガニ 蟹。田舎の語である。又龜をガメといふ。

ズナ 砂。スナともいふ。

マドメル まとめ集めること。

アドメル 物を集めること、仕事を片付けること。集まるはアドマルであるが、一所に集まることをキドマ
ルともいふ。

ヌク 脱ぐ、解き捨てる。――着物などを。

タイカク 書物の大學は、濁らずにタイカクと讀む。

ムシツノツミ 無實の罪。

ザコク 雜穀。

オック 奥。

ツッキン 頭巾。

イッサキ いさぎ、魚の名。

オットモネエ 何とも無いの田舎語。

ランキョウ らつきよう。

ニイジン 人參。

オゴウチヨル 拜んでゐるの轉。田舎の語。

ダンオンサマ 旦那様。

ナスンバ 茄子齒。蟲齒のこと。色が茄子と似てゐるから。

アサトウ 朝疾く。

○

……ネミ 右衛門。三右衛門、源右衛門はサンネミ、ゲンネミであるが、吉右衛門はキチエミといふ。

アネエナ あのやうな。田舎の語。

アシナサ 明日のあさ、明朝。

サカシネエスル 逆様にする。

スゲラ すみら。野生草で、葉は水仙に根は菫の根に似て味は甘い。

アグヒト あのお人。このお人はコグヒト。

チヂビキ 地響き。

ソリカリ それから。

ツブレ つるべ、釣瓶。

ツモグリ 晦日。晦日に蕎麥を食すれば金が溜るとて、毎月末に食する風があるが、これをツモグリソバと

シヤ。

ナニガシロ ないがしろ、蔑ろ。

ゴリ おり、澱、水の底に沈んだごみ。

シノトウマク 「子曰く」をかく訛る。

スゴウメ すがめ、眇、やぶにらみ、ひがら。

ユウシ 嘔。



出版會承認
290321號



著者略歴

慶應二年三月生
明治二十三年對馬
方言蒐集に著手、
昭和十八年四月一
應繼る
明治四十二年縣社
八幡宮神社子總
伏となり今日に至

著者	瀧山政太郎 <small>たきやま まさたろう</small>
發行者	湯川龍造 <small>たくわん りゅうぞう</small>
印刷者	新里銳三郎 <small>にいり えいざぶろう</small>
配給元	日本出版配 給株式會社
發行所	中央公論社

昭和十九年九月一日初版印刷
昭和十九年九月五月初版發行 (2000部)

對馬南部方言集

定價 貳圓
特別行爲稅相當額拾五錢
合計 貳圓拾五錢

本社出版の書籍中、萬一落丁亂丁等不備のものあらば早速お取代へ致します。

全國方言集

柳田國男編
中央公論社版

既刊

岩倉市郎著 喜界島方言集(品切)

定價 二圓八十錢

野村傳四著 大隅肝屬郡方言集(品切)

定價 二圓三十錢

柳田國男編 伊豆大島方言集(品切)

定價 一圓三十錢

原安雄著 周防大島方言集(品切)

定價 一圓三十錢

藤原與一著 伊豫大三島北部方言集(品切)

定價 一圓八十八錢

倉田一郎著 佐渡海府方言集

定價 二圓〇五錢

瀧山政太郎著 對馬南部方言集

本書

908

149

終

